深海からの侵略

elebras

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深海からの侵略

【Ｎコード】
Ｎ６４２８Ｖ

【作者名】
ｅｌｅｂｒａｓ

【あらすじ】
多目的海洋調査観測船「みこもと」は自律ＡＩ搭載型海洋調査ロボット「ＤＯＲＩＩ」（Ｄｅｅｐ Ｏｃｅａｎ Ｒｅｓｅｒｃｈ Ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｔ Ｉｎｔｅｒｇｅｎｃｅ）の試験航海に出発した。その頃米海軍は試作新型原子力潜水艦が試験航海の途上消息を絶ち、「みこもと」の所属する独立行政機構「海洋調査機構」に捜索の協力を依頼していた。急遽、予定を変更して捜索に赴いた「みこもと」とその搭載する深海調査艇たちが出会ったものとは？そして、それによる全海洋の危機に「海洋調査機構」のメンバーが

立ち向かう。

遡逆

生物

その生き物はこれまで見た事もない大きさだった。ほとんど透明に近いその体長はゆうに五〇ｍを超えていた。体側の繊毛（このサイズでもそう呼んで良ければだが・・）をせわしく動かしながら、ゆったりという表現しかできない動きで海中を漂っていた。

「こいつですか、昨日の幽霊の正体は。しかし、なんでこんな大きなもの、これまで発見されなかったんです？」聞いたのは装備担当の津田だった。

「生息域が深い、生息分布、いろいろ理由はあるでしょうが、やはりまだ海は人間にとって『広い』ということなんでしょうね。」と海洋学研究員の望月が答えた。しかし、当の望月とて正しい答えを知っているわけでは無かった。

「艇を少し振るぞ。このままでは視野が狭いし、ちょっと近付き過ぎだ。」艇長の野瀬はそう言うと、艇を生物の側面方向に移すべく、マニューバーを開始した。

彼等が搭乗しているのは、高機動潜水調査艇「みずなぎ」一号艇だった。この艇は主に大陸棚付近の水深で、機動性の高い、言い換えれば海洋生物を追跡調査可能な潜水調査艇として、特別行政法人「海洋調査機構」が独自に開発したものであった。その主な要目は、

全長　９ｍ
全幅　４ｍ
全高　１．８ｍ
船質　カーボンファイバー／ケブラー／ボロン複合積層強化樹脂
動力装置　低損失コアレス水中電動機　二基　合計　１５ｋＷ
発電装置　リチウム触媒燃料改質型燃料電池集積体　３３ｋＷ／時
推進装置　キャビテーション・ダクト型ウォータージェット　全周

回転方式
安全潜入深度　９００ｍ
最大潜入深度　１３５０ｍ
最大水中速度　１２．５ノット
航続距離　７０海里
搭乗人員　３名

というものであった。これ以外に、その都度の観測、調査内容に応じて、パッケージ化された観測装置を収容するベイを耐圧殻外部に備えていた。これにより、小型の艇にも関わらず、非常に汎用性の高い艇となっていた。しかし、この艇の特徴は別のところにあった。それは両舷にそれぞれ2枚づつ配置された水中翼の存在だった。浮上、沈降のエネルギーをこの翼により前進、後退のエネルギーに変換することで、ほとんど無動力で進む事ができる装置、１９９０年代に米国ウッズホール海洋研究所で実験された装置をよりリファインした形で搭載していた。船体サイズから言えば「長大」と評しても良い、７０海里もの航続距離は、この装置によって達成されていた。

「おい、長野君、まだ『みずなぎ』とはリンク繋がらないの？実験では巧くいったはずでしょう。」と調査主任の吉村は電子装置担当の長野を急かした。
多目的海洋調査観測船「みこもと」の遠隔観測機器室で、吉村はすでに2時間近く、「みずなぎ」からの海中データリンクが繋がるのを待っていた。
多目的海洋調査観測船「みこもと」は「みずなぎ」と同じく、特殊行政法人「海洋調査機構」が文部科学省の予算で建造した船だった。深海調査母船機能と広範囲な海洋観測機能を高いレベルで統合した結果、波浪貫通型双胴船形という特殊な船形と、船体の大型化を招き、予算の確保には多大な労力が費やされたが、その労力は無駄ではなかった。

全長　１４８ｍ
全幅　３４ｍ
基準排水量　８７５０総トン
喫水（軽荷）５．４ｍ
動力機関　低損失直流コアレス水中電動機　４基　軸出力合計８４２０ｋＷ
推進装置　全周回転型２重反転コルトノズル推進装置　２基
発電装置　高効率定回転ディーゼル発電機　４基　合計８８００ｋＷ／ｈ
　同　　リチウム触媒型燃料電池集合体　２基　合計２４００ｋＷ／ｈ
航海速力　１８ノット
最大速力　２７ノット
航続能力　１８ノットで最大９６００海里
搭載観測装置
　一万ｍ級深海潜水調査艇「かいえん」　１基
　高機動多用途潜水調査艇「みずなぎ」　２基
　自律行動型深海調査ロボット「ドリイ（ＤＯＲＩＩ）」　１基
　曳航式可変深度音響通信／観測集合体「金魚」２基
　ＯＤＯＮ社高精度サイドスキャンソナー　２基
　統合型ネットワーク制御装置　１式

などが主な要目であったが、それ以外にも双胴船形を利用した船尾ベイの採用と、それにより門型揚収装置に代わって採用された、ガントリー式揚収装置など、多くの進んだ補助装置が採用されたことにより、この船の稼働可能範囲は非常に幅の広いものになっていた。

「あ、吉村さん。何か途中に海水の不連続があって、すごいマルチパスが起きてるんです。今、可変深度用の『金魚』をだしてもらっ

てますから、もうすぐ繋がると思います。ちょっと辛抱願います。」
と長野はキーボードからのコマンド入力の手を休めずに答えた。
「んーー、金魚以前に繋がりそうです。あー、吉村さん、それいじってもだめですよ、やたらにいじらんで下さい。その左舷側の小さいモニターに字が出ます。キーボードはその下です。」
「お、オンラインになった。長野君これ、向こうはログインしてるの？」
「いえ、向こうの信号は歪みが大きくて、こちらから、ポーリングで強制的に向こうを制御してます。文字だけならなんとかいけます。そのまま打ち込んでもらえば向こうのモニターに現われますから。」
「うー、了解。それじゃ『モチヅキ、コタエロ』っと・・・」

艇首部分のほとんど全てを占める半球型の透明な観測／操縦キャビンは、潜水中の常で照明が落とされていたが、今は観測のための強力な外部フラッドライトからの散乱光でほの明るくなっていた。それでも、最前部、一段下がった観測員席のモニターに浮かび上がった文字は明るすぎるほどだった。
「艇長、リンクが繋がったみたいですね。吉村さんからの呼び出しです。『コチラ　モチヅキ』っと。」
『ナニカ　ミツカッタカ？』
『ミツケタ。』
『ナニヲ？』
『オオキナ　イキモノ』
『ナンダソレハ？クジラカ？』
『コレデハセツメイフノウ。ベツノホウホウヲカンガエル。タイキネガウ』
『リョウカイ』

発見（前書き）

第二話です。
更新は不定期になる事をお断りしておきます。

発見

「津田君、この深度でも無線ブイは上げられる？」
「現在深度３７０ｍですから、いけます。水深４５０ｍまでは上げられますから。」
「艇長、どうも水中リンクが巧く繋がらないようなんで、無線ブイを上げようと思います。艇の機動が制限されますんであまり使いたくはないんですが、他に方法がありませんので。」
「状況的にそれしか手がなさそうだね。さいぜんの機動で生物との位置関係は安定したから、ここしばらくは問題無いと思う。」
「それじゃ上げます。津田君、衛星回線メイン、一部ロングレンジＵＷＢのセッティングで上げて貰えますか。」
「了解。上げるのは良いですが、回収はどうします。多分、この深さだと相当時間が掛かると思うんですけど・・」
「津田、回収はせんよ。切り離して上に探させよう。ビーコンセットしておいてくれ。」
機動性の喪失時間を考えれば野瀬のアイディアは妥当だった。
「そういう事なら了解です。それでは、２Ｍｂｐｓの衛星メイン、４００ＭｂｐｓのＬＲＵＷＢをバックチャンネル、ビーコンは一応、ＶＨＦと衛星両方をセットしておきます。どちらもＧＰＳ位置情報を１０秒間隔で送信。この設定で上げます。」
「うん、やってくれ。」
津田はキャビン最後部の操作員席コンソールからブイにデーターを打ち込み、シミュレーターで機能を確認すると、即座にブイをリリースした。直径２５Ｃｍに満たないブイはケブラー繊維で強化されたシリコンゴム被覆に覆われた光ファイバーケーブルを引きながら上昇していった。
「吉村さん、『みずなぎ』から、衛星で入ります。今ネゴシエーシ

ョン中。大スクリーンに出します。おっと、ＵＷＢにも来てるぞ。バックチャンネルで何か送るつもりだな。」長野はサーバーモニターから目を離さずに言った。
「お、絵がでた。なんだ望月の顔だけか。見たくもねぇなぁ。」
「吉村さん、それ全部『みずなぎ』で聞こえてますよ。」長野は笑いをかみ殺しながら注意した。
「へいへい、聞こえてます。そっちも吉村さんの顔しかみえないですよ。
「ん、まぁ、そのだな、それはそれとしてだな、どんなもん見つけたんだ。」
「えーえー、それはそれとしてですね・・・まず、ＵＷＢも繋がってるみたいですから、バックチャンネルでこれまでの映像を送ります。この回線ではリアルタイム映像だけを送るつもりです。長野君はそこにいるんでしょ、リアルタイム映像は高解像度モードじゃ送れないんで、バックチャンネルに復元データを乗せます。録画映像は、そのまま高解像度モードで送ります。デコードの準備よろしく。それから、吉村さん多分、海棲生物の村木君と生態学のチャンさんも一緒に見た方が良いと思います。」
「ああ、二人とももう来てる。ちょっと顔だして見て。」
画面に斜めに二人の顔が現れて消えた。
「望月さん、データー・デコード全部ＯＫです。テンポラリーの容量ははテラバイトオーダーですから、解像度最高で送って大丈夫ですよ。」
「判った。それじゃこれから艇外のカメラに切り替える。距離は約５０ｍ、比較対象としてカメラの視野に水色板を入れる。距離は１ｍ。それでは切り替えます。」
カメラが外部に切り替わった当初はスケールの認識ができない事で、あまり驚きは無かった。しかし、頭がそのスケールを理解し始めると、すでに一杯になっていた観測室のそこここから驚きの声が上がった。

「大きいですね。オビクラゲの類のように見えますが、良く見ると体節らしきものが見えます。旋毛虫類かゴカイの仲間かも知れませんが、なにせここまで透明に近いのは初めてですねぇ・・・」海棲生物の村木がまだスケールを理解できていない口調で言った。
「村木サン、それどころじゃないよ。このイキモノ、生態学的には悪夢です。一体どんなエネルギーで生きてる。簡単な計算すれば判るけど、体長５０ｍ超えてるのは確かだから、単純な食物からの炭素？酸素反応じゃ相当な量を食べないと体維持できないですよ。じゃ食べ物はナニ？そんなたくさん、栄養価の高い食べ物なかなか無いよ。」
在日7年目の台湾人であるチャンの日本語は流暢だった。
このチャンの疑問に答えるかのように、「みずなぎ」の望月が割り込んで来た。
「実はチャンさん、この生物、動作だけじゃなく、他のエネルギー消費もしてるんです。ひょっとしたら、それが答えになるかも知れません。これから、それをお見せしますよ。」
そう言うと、艇外のフラッドライトを全て消灯した。艇外カメラの露光調整が光量変化に追随できず、一瞬スクリーンが真っ暗になり、徐々に何かを映し出し始めた。

それは、この世のものとは思えない光景だった。カメラの露光調整が正常になるにつれ、観測室の大スクリーンに現れたのは、まさにそう言う光景だった。
明滅し、乱舞する光のページェント。走り、止まり、そして一瞬の爆発。その体のゆったりとした動きからは想像もできない、美しく活動的な光の乱舞だった。これには観測室に詰めた全ての要員が目を釘付けにされた。そして、自分の頭の中でそれを実スケールに変換できた人間は、大きなショックをも受けた。
「こりゃ、またその、何というか・・・・・・・」
意味をなさない言葉を最初に発したのは吉村だった。

「これは化学反応での発光じゃないです。化学反応ではこんな速度じゃ伝搬できない。ＥＬだと考える以外に無い。エレクトロルミネセンスを自然界の生物ができる・・・いや、もっと小さなスケールなら、発電能力を持つ魚類で可能かも知れないが、このスケールでは・・・・望月さん、生体サンプル無理ですかねぇ。」村木が興奮気味に聞いた。
「生体サンプルですか・・・・艇長、近づけますかね、そこまで。」
「あんまりぞっとしないな。軟体動物だとは思うが、サイズを考えれば、その質量だけでもこの艇をぶっ飛ばせる。」
「艇長、こちら村木です。確か、海水物理計測用の青緑レーザーパックを積んでましたよね。それで生物の体の一部を照射したらどうでしょう。レーザーメスの要領で一部を切り取れませんかねぇ。」
「散乱が大きいから、レーザーメスの様には行かないと思うが、それなら１０ｍ程度の距離まで近づけば、小さな部分は熱膨張で剥離するかも知れんな。ただ、加熱されたサンプルになるかも知れんが良いのか。」
「無いよりましです。ごく局部的に照射できれば、加熱が進まないうち剥離が起きるかも知れませんし。」
「判った、ブイ切り離し後、機動できるようになったら試してみよう。津田、準備しておいてくれ。」
「あー、吉村です。それでは艇長、くれぐれも慎重に。ま、野瀬さんの事だから心配はしないけれど。本船研究員は画像データー転送終了次第、それぞれ分析にかかってくれ。ただし、今回のミッションは生物学的調査じゃないから、そのつもりで。分析はミッション目的との関連が第一だ。」

画像転送は２０分ほどで終了した。残る調査項目は打ち切って生体サンプル収集と、付近の海水物性だけを行って帰還することなどを打ち合わせた後、ＬＡＮブイを切り離し、自由な機動性を取り戻した「みずなぎ」は、３７０ｍの海中をゆっくりとその生物に接近

するマニューバーを開始した。

調査（前書き）

第三話です。

調査

「３５ｍです、艇長。」津田は音響測深儀の数値を操縦に専念する野瀬に代わって読み上げた。接近は音響測深儀のトランスジューサー設置位置の関係で上方からしか不可能だった。海中では空気との屈折率の違いで起こるレンズ効果のため、目視による距離の判定はまったくあてにならない。正確な距離を知る必要のないマニューバーならばどの方向からでも良かったが、レーザー照射を行うためにはある程度正確な距離を知る必要があった。

「望月さん、レーザーの試験をお願いできますか。」

本来ならば津田が行う作業であったが、二人が接近マニューバーに忙殺されていることから、レーザーの操作は望月が行う手はずになっていた。

「方向はどうしますか。」

「とりあえず、生物と正反対の方向でやってください。刺激してもあまり良いことはなさそうですから。」

「了解、生物と反対方向、海底に対して４５度の入射角で試験発射します。同時に海水の成分分析もやってしまいましょう。時間が節約できる。」

「お願いします。」

望月は観測員席のモニターコンソールから方位、角度を指定し、同時に観測センサーの初期設定とキャリブレーションも行い、試験照射で海水分析をしてしまう準備を整えた。

　青緑レーザーによる海水分析の原理は、透過性の大きい青緑レーザーをある方向に向けて照射し、その散乱の度合いを計測する事で海水中に含まれる浮遊粒子の量と、特定の浮遊粒子が引き起こす特徴的な散乱パターンを観測して、浮遊粒子の特定などを行うものである。

「それでは発射します。」望月はそう言ってモニターに出してあっ

た、レーザー制御コンソールの発射ボタンをクリックした。２秒間の試験発射であったが、計測器はフル稼働していた。
「計測結果処理中。あれ、エラーだ。散乱度変化が設定値を超えたって？まさか。もう一度キャリブレーションしてみます。」
望月はレーザー制御コンソールから初期設定タブを開き、前のキャリブレーション設定値を捨てて、もう一度キャリブレーションを行った。しかし、その設定値は以前のものとほぼ同じだった。そして、再試験の結果も同様であった。
「望月さん、接近行動を中止します。レーザーに問題があるのでは意味がないですからね。」
「そうですね、いったん距離を置いて調べなおした方が良いと思います。それに、ここから先の機械の点検は津田君じゃないと。」
「それでは、一旦側方へ距離を取る。レーザー再試験後、改めて接近行動を再開する。津田、マニューバーは俺一人で良いから、レーザー点検初めてくれ。」
「了解、艇長。しかし、ちょっと腑に落ちないんですよ。望月さん、試験出力は定格でしたか？」
「ええ。マニュアル通りですよ。」
「散乱度の変化って、散乱度が大きい方へ変移してるって事ですよね。だとするとですね、レーザー側の故障だとしたら、出力が増える方へ変化しなきゃいけないんです。ところが、今、電源系のログ見てるんですが、レーザー照射中の電流は変化してないんですよ。」
「するとレーザー装置側に問題は無いと？」
「ええ。そう思うんですよ。これから計測器をチェックしますけれど、二度初期化しても同じ結果ってのもおかしい。というのはですね、エラーは散乱度の変移が設定値を超えた、って言ってるわけです。計測装置に問題があるなら、２度目の初期化での値に変化がなけりゃいけない。双方に共通するのは電源だけですが、これはすでに、ログで確認して、変化が無い事が判ってる。どうも変ですよ、これ。」

「それじゃ何が原因なんです。」
「海水自身。それの可能性が一番高いです。あ、計測装置の自己診断が終わりました。異常なしですね。これで異常が無いなら、後はメインコンピューター自身がおかしいという事なんで、それはちょっとあれですから・・・・望月さん、ちょっと実験してみましょう。ちょっと方向を変えて、レーザーがフッドライトの中を通るようにして照射してみます。で、それを外部カメラで拡大して見てもらえますか。」
津田はマニピュレーターの先端座標をマニピュレーター制御装置からレーザー照射制御装置に取り込み、そのマニピュレーターの先端をかすめるように照射するよう設定した。望月はマニピュレーターの先端に外部カメラの焦点を合わせ、それを４倍に拡大してスクリーンに映し出した。
「それじゃ照射しますよ。最初は試験と同じ２秒間です。それじゃ照射します。」
津田がレーザーを照射すると、２秒間、鮮やかな青緑の線がモニターに現れ消えた。
「ほら、望月さん、見て下さい。レーザーの通過した跡が見えますよ。通過した跡が僅かに白濁しているのが判りますか」
「確かに。なるほど、これじゃ時間とともに散乱が増えるわけだ。」
「こりゃ、海水がおかしいですよ。可視光線での透明度は普通に見えますから、レーザーだけに反応する何かが海水中にあるってことです。」
「しかし、そんな海水って例がないですよ。」
「津田、海水の比重は連続して計測してるだろ。それに変化無いか？」
「ちょっと待って下さい、艇長。ああ、これだ。水深３００ｍくらいに小さいですが比重の不連続があります。ってことは、我々は違う水に入ってる？どうして艇長判ったんです？」
「実はな、艇が少し浮き気味なんで変だと思ってたんだ。それとな、

出力／速度曲線も多分おかしい。海水の粘度が違うんじゃ無いか？」
「うわ、さすがに粘度は連続計測してません。海水サンプルを取って、母船で調べてもらいます。ところで、もう一回レーザー照射します。今度は１０秒間照射して、例の白濁を十分出して、それを採取、上で分析してもらいましょう。望月さん、すみませんがカメラの方お願いします。」
「了解。このままで良ければ、画像自体はすでに取り込んでますから、いつでも良いですよ。」
津田は照射時間を１０秒にセットして、照射を開始した。今度は時間があったため、レーザーの経路に沿ってわき出すように白濁が現れるのが、カメラではっきり見えた。

調査（後書き）

用語で判らないモノがありましたら、どうか感想に書き込んで下さい。
説明します。

攻撃（前書き）

第四話です。

攻撃

それは、望月が白濁した海水サンプルを採取しようとした瞬間だった。

「何かに掴まれ。来るぞ。」野瀬が叫んだ。

それまで、海中に漂うような動きしか見せていなかった巨大生物が、突如その全体を燐光で光らせるや、驚くほどの早さで体の両端を合わせるような動きを始めた。そして、その両端の合わさる位置には「みずなぎ」があった。

物理的な衝撃は９００ｍを超える潜航耐力を持つ「みずなぎ」の艇体強度が許容できる範囲だった。しかし、その物理ショックの直後にさらされた電撃には耐えられなかった。金属ボロン繊維とケブラーで強化された炭素繊維／アクリル樹脂製の主船殻自体は絶縁性だったが、外部に多数の金属製部品が露出しており、また、艇体周囲に巨大な電流が流れた事による、静電誘導、電磁誘導による起電も無視できなかった。

電撃によって、電源系の接地電位を数千ボルトにまで上昇させられた事により、地絡保護系は例外なく焼き切れる事になった。さすがに２重３重の安全性を追求する潜水調査艇ゆえ、回路的に保護されていた部分は直接的には無傷であったが、電気、電子装置に電源が供給されないのならば、壊れていなくても結果は同じだった。３７０ｍの海中で電源を失った艇は、真の闇に包まれた。それまで発光していた生物も、この攻撃以来、まったく発光をしなくなっていた。

「みんな、大丈夫か？」最初に精神的平衡を取り戻した野瀬が安否を確認した。

「津田、なんとか生きてます。」

「望月も怪我は無いようです。」

「みんな生きてるようだな。ところで何だったんだ、あれは。最初はぶっ飛ばされるのかと思ったが、そっちは外洋の波程度のショッ

クで、ちょっと安心したとたんに、ピカ、ドカーンだ。雷みたいな感じだったが、海中で雷か？」
「多分、そうです。艇長。雷というよりも生体電撃、つまり、電気ウナギとかシビレエイのあれだと思います。ただし、規模が雷クラスだったという違いはありますが。」
「電撃なのか？海中だぞ。海水は電気の良導体じゃないのか？」
「そうですが、なにせ電圧、電流が大きいですから、僅かな抵抗でもこういう事になります。」
「なるほどな。ところで、津田、なんで非常灯まで点かないんだ？あれは自分が抱えてる電池で動作するんだろうに？」
「調べてみないと・・・ちょっと待って下さい・・・・・・あった、これで明かりができる・・・・」
　津田がそう言うと、手元に緑色の灯りが点った。
「これを使って下さい。化学発光体です。中程で折り曲げて、中のガラスアンプルを壊すと発光が始まります。振れば明るくなりますから。」
３人がそれぞれ発光体を点灯すると、キャビンは淡い緑色の光で満たされた。
「なんだ、津田、こりゃあ夜釣りで使うケミホタルじゃないか。なんでこんなもん用意してあったんだ？」
「深海でのマーカーに便利なんですよ。中身が液体だから水圧で潰れないですし。さてと、非常灯はと・・・・」
ほどなく、非常灯が復旧して、キャビン内部は先ほどとは逆に赤い光で満たされる事になった。
「ったく、非常灯まで半導体化だとか言って、メインとの切り替えをＳＳＲ（半導体リレー）なんかでやるもんだから、メインラインのサージでＳＳＲが飛んで、肝心の時に役立たずになる典型ですね、これ。単純に機械式にしとけば済むものを・・・」
ともかくも、非常灯が復旧したことで、メイン電源系の復旧に取りかかれる事になった。しかし、こちらは予想外に深刻だった。

「艇長、ちょっとメイン電源は簡単に行きそうにないですね。地絡保護の付いたブレーカーは全て地絡保護回路が焼け切れています。ブレーカーそのものの交換以外には完全に復旧する方法は無いです。問題なのは、燃料電池への燃料圧送ポンプがやられてる事でして、このままでは燃料電池出力が半分も出ません。燃料電池そのものは、保護回路のおかげで無事ですが、自然流入だけではどうにも・・・・推進系と浮力制御系以外は非常用の電池で動作させられるので、接続を切り替えれば問題無く動くはずです。ただし外部の観測装置は期待できませんが。」
「なるほど、状況は判った。ともかく、艇の現在の状況を知る事が先決だ。まず艇の制御を取り戻したい。今の状態では艇が沈下しているのか、浮上しているのか、、まったく判らないからな。」
「了解。すみませんが望月さん手伝って頂けますか。」
「おやすいご用で。何をすれば良いですか。」
「最初に観測席の両脇に燃料電池へのアクセス口があります。コインで頭をねじれば開くロックですから、それを開けて貰えますか。」
狭いキャビンの中で3人の戦いが始まった。
「えっと、これで制御装置とコンピューターの電源は復旧するはずだ。艇長、制御システムを立ち上げて下さい。」
「今やってる。お、立ち上がったぞ。アラームで真っ赤っかだがな。」
「ああ、そりゃ正常に働いてるって事なんで喜ばしい。すみませんが、制御をこちらのコンソールに下さい。」
「よし、切り替えるぞ。3、2、1、切り替えた。」
「はい、来ました。さてと、アラームを潰さないけりゃ。望月さん、そちらのコンソールも立ち上げて貰えますか。」
「もう立ち上げてます。こっちもアラームで真っ赤っかですねぇ。観測装置制御系はこのコンソールからやりましょう。」
「そうして貰えると助かります。艇長、そちらのコンソールに浮力系の制御を出してあります。試験プログラムを走らせて貰えますか。

」
「お、判った。今ロードしてる。・・・じゃ走らせるぞ。」

攻撃（後書き）

というわけで、第四話です。
用語の判らない部分がありましたら、感想に書き込みをお願いします。
後で解説します。

復旧（前書き）

第五話です。

復旧

主電源に関わるものを除く、その他の装置の試験と切り離しを終え、艇制御を再起動させた時点での状況は深刻なものと言えた。艇は０．７ｍ／分というゆっくりとした速度ではあったが沈降モーメントを受けており、さらにごく僅かではあるが、浮力はマイナスになっていた。これは今後水深が深くなるにつれ、浮力は減少するため、さらに沈下速度が加速される事を意味した。

「艇長、あまり歓迎できる状況じゃないですねぇ。艇が沈んでます。どうしてもメインを復旧させないと・・・非常浮上装置は極力使いたくないですから。」

確かに艇には非常浮上装置が備わっていた。しかし、それは球形キャビンのみを切り離し浮上するというもので、それは艇を失う事を意味していた。それゆえ、本当の意味での最後の手段だった。

「確かに、まだキャビンの切り離しをする段階じゃないな。推進と浮力、どっちの復旧の可能性が高いんだ？」

「電力的には浮力調整装置ですね。ただ、復旧できるならば、推進装置の方が浮上は早くなります。ともかく、なんとか電源を供給しないと、自己診断もできません。」

「津田さん、燃料電池の端子が見えてるんですけれど、ここへ直接繋ぐわけには行かないんですか？」

「ええ。この艇の電源系は超大型のプリント基板みたいな構造でして、樹脂船殻の中に電源母線を埋め込んである形なんです。ですから、繋ぐためのケーブルというのがほとんど存在しない。母線の回路自体は二重化されていて、安全係数は非常に大きいのですが、まさか海中で電撃を受ける事までは想定されていませんでしたから。」

「そうですねぇ。まさか海中で電撃を受けるなんて普通は考えられませんからねぇ。」

「ブレーカーをバイパスしてしまえば復旧はするのですが、バイパスするものが無い。で、ブレーカーを分解して内部を強制的に接続状態にする方法で復旧する事を考えているんですがね。」
そう言いながら津田は、配電盤からメインのブレーカーを取り外していた。ブレーカー自体はコネクター式になっているため取り外しは容易だった。
「あー、やっぱり。これ組み立て式じゃなくて、樹脂モールドになってます。こりゃ分解は手間だぞ。それよりも強制的に接続状態にできるかな？」
「なんでそんなもの使ってるんだ。サバイバビリティー最悪じゃないか？」
「いえ、それ自体のサバイバビリティーは低くないんです。そのためにコネクター式になってるんですから。ただし、予備を持ってることを前提にしてですが。」
「とにかくなんか考えてくれ。製造メーカーの批判は上に上がれてからにしよう。」

浮上、操縦に支障のない部分を手当たり次第に分解した結果、なにがしかの代用品を入手できた津田は、浮力調整装置の復旧にかかった。しかし、コネクター部分でバイパスするにせよ、故障していないと思われる地絡保護の無いブレーカーを除いても3カ所のバイパスを造らなければならなかった。それでも、かれこれ一時間の津田の奮闘により、電源が浮力調整装置に供給された。
「艇長、電源はこれで繋がってます。そちらのコンソールで試験願えますか？」
「もう立ち上げてる。お、早いな、自動診断に入ったぞ。うん、取りあえず駆動系には異常がないぞ。あー、電源電圧アラームが出た。電圧が低い。診断結果はこの深度だと浮力調整は無理だと・・・」
「ええ、それは予測範囲です。さてと、燃料電池電圧をどう上げるか？なにせ燃料圧送できてませんから。」

津田はまず燃料圧送系の電源復旧を試みたが、これは絶望的だった。燃料タンク内部に設けられた圧送ポンプ系は唯一地絡保護がされていなかったため、ポンプ駆動モーターにダメージが及んでいた。
「予想通り、ポンプはだめですね。アイディアはあるんですが、ちょっと危険なんで・・・」
「そんなこと言ってられんぞ、現在深度４１０ｍ、０．９ｍ毎分の沈降度になってる。このままだと加速度的に沈降度が上がるし、電源に問題がある状態だから、なるべく早いうちに正浮力にせんと、アウトになるぞ。」
「ええ、それは判ってますけれど、予備の空気ボンベを使わにゃならないんで、躊躇してるんです。」
　津田のアイディアは、３本ある予備空気のボンベのうち１本の空気を放出して、そこに燃料を入れ、もう一本のボンベの加圧された空気をそれに入れて、圧のかかった燃料ボンベを作り、それを燃料電池の燃料ラインに繋いで圧送するというものだった。１回に最大１０リットルしか送れないが、浮力調整だけならなんとか可能なはずだった。
「しかし、津田さん、どうせ巧く行かなければ緊急浮上しかないんですから、その作業時間分の予備空気があれば十分ですよね。と言うことは、２本使ってしまっても大丈夫だという事だと思いますが。」望月の意見は非常に論理的だった。
「津田、そういうことだ。そのアイディアを実行してみよう。それでだめなら、緊急浮上するだけだ。」
「判りました、やってみましょう。」
作業自体は簡単だった。エアコックを開いて空気を艇内に放出し、空になった空気ボンベの弁を外して燃料ドレインから燃料を入れ、もういちど弁を取り付けて、ホースで別の空気ボンベに繋ぎ、均圧させるだけでよい。しかし、燃料系にエアホースを繋ぐのは簡単では無かった。スクイーズバルブの手前で燃料ラインを切り離し、エアホースにアダプターを付けて、それに繋ぐ作業は狭い点検穴に半

身を入れてでなければできなかった。結局、一番近い望月が貧乏くじを引くことになった。
「繋ぎましたよ。もう一度は金をもらっても嫌ですけれどね。」
点検口から体をやっと抜き出した望月がぼやいた。
「いや、その、もう一度入ってもらわんと・・・・すんませんね望月さん。」
「えーー、もう一度。何するの。」
「燃料を送る前にスクイーズバルブを開いて、エア抜きしないといけないんですよ。」
「あ、そりゃ大丈夫。バルブのところから曲げて、体入れなくても手がとどくようにしてあるから。」
「あ、流石・・・それじゃ早速燃料送る準備しましょう。えっと、スクイーズ開いてもらえますか？」
「ちょっと待って・・・・・はい、開きました。」
「それじゃ、ゆっくり送りますから、燃料が出てきたらすかさず締めて下さい。」
「はい。どうぞ。」
「それじゃ送ります。」
「まだ来ないぞ。あー来た来た。はい閉めました。」
「ＯＫ、準備完了です。艇長、それじゃ燃料圧送しますから、アラームが消えたら、浮力調整お願いします。」
「コンソールはもう出してある。いつでも良いぞ。」
「それでは送ります。」
津田はボンベのバルブを僅かずつ開き、規定の燃料圧に調整した。
「艇長、どうですか？」
「まだ回復しない。どうしたんだ？」
「まだ反応膜全部に燃料が浸透していないからでしょう。もう少し待って下さい。」
「お、アラームが消えた。それじゃ始める。」
艇体の４カ所にある、機械的に排水することで浮力を調整するチャ

ンバー内部のブランジャーが動き始める音が聞こえた。まもなく、コンソールの浮力指示が正になり、艇は浮上に転じた。

復旧（後書き）

第五話でした。
少し端折り気味ですが勘弁して下さい。詳しく書いてると技術説明書みたいになちゃいます。＞＜
用語の判らないところはどうか感想に書き込んで下さいませ。説明を致します。

復旧２（前書き）

ちょっと短いですが第６話です。引き続き第７話も投稿します。

復旧2

「津田、水中翼制御にも電源貰えるか？できればもう少し母船に近づいておきたいんだがなぁ。」
「多分大丈夫でしょう。燃料はまだありますから、ブレーカーの接続だけ変えれば、十分いけると思います。」
「それじゃ頼む。」
津田は破損したブレーカーを簡単にバイパスした。一度できた事は簡単に他にも応用できる。
「艇長、電源行きました。コンソールで操作してみて下さい。」
「うん、アラーム消えて操作アイコンが出た。これ最適値制御させられるのか？」
「うーん、多分だめだと思います。メインコンピューターとはオンラインですけれど、外部センサーが死んでると思いますのでフィードバックデーターが無いですから。」
「なるほどな。それじゃ、えいやっと。ま、こんなもんだろ。」
まったくの山勘ではあったが、経験に裏付けられた野瀬の操作により、艇は浮力を前進力に変換しはじめ、艇は静かに海中を進み始めた。

復旧２（後書き）

筆者旅行のため、中途半端な投稿になった前話の続きです。本編は引き続き第７話として投稿します。

承前（前書き）

第7話です。

承前

「吉村主任、電話ですよ。海自の滝川さんから。」
「ほい、ありがとさん。みっちゃんいつも可愛いねぇ。」
「吉村さん、それって典型的セクハラですけど。お世辞はいいですから、早く出てください。ったく。」
海洋学研修生の八木みどりは毎度の事にうんざりした口調で文句を言いながら、吉村に受話器を渡した。
「まぁまぁ、そうとんがらずに。へい、毎度、提督。今日は何でござんしょう。」
『おはようございます。滝川です。今日、ちょっとそちらへ伺いたいんですが、体空けて貰えませんか？』
「滝川提督のご要望なら、と言いたいんですが、今日はちと都合がよろしく無いんですが・・・これからドリイのバグ取りがあるんで、試験水槽に詰めなきゃならんのですよ。明日にできませんか？」
『それが、天の声でして・・・』
「っつーと、幕の辺りから・・・」
『いえ、もっと上でしてねぇ。』
「そりゃまた・・・判りました。いつでも結構です。体空けます。」
『すみません。無理言って。それじゃすぐにお伺いしますから。』
「判りました。お待ちしてます。」
「おーい、みっちゃん、ドリイの班に今日のバグ取りに参加できないから、勝手にやって、後で報告と改訂分のソースリストこっちにくれるように連絡してくれるかな？使っちゃって悪いけど。」
「はいはい、判りました。どーせ研修生なんて、こき使われるもんだって諦めてますから、見え透いたお世辞は言わなくても結構ですからね。」
「まぁまぁ、今日の昼飯おごるから、機嫌直して。」
「モノで釣ろうとしてもダメです。それに、職員食堂のラーメンで

二度も釣られるもんですか。銀座辺りでフルコースってなら釣られても良いけど。」
「お、ぉい・・・・・・・・・・」
一時間半ほどで海上自衛隊幕僚監部所属の滝川一佐は吉村の前に現れた。
「滝川さん、何ですか、かなり深刻な話のようですが・・・」
普段の吉村からは想像もできない真剣な口調で、挨拶も抜きに切り出した。
「ええ、ま、深刻と言えば深刻なんですがねぇ・・・」
「ひょっとすると米軍絡み・・・そういう話ですか？」
言いにくそうな滝川の先を吉村が読んだ。
「ええ、そういう事なんですが、今回は単純じゃなくてですね・・・」
「私のスタンスは判っていらっしゃる滝川さんだから、今更ごちゃごちゃ言っても仕方が無い。ともかく話を聞きましょうか。」
「そう言ってもらうと気が楽になります。それじゃ・・・・・」
滝川の話をかいつまんでしまうと、米海軍の最新型原子力潜水艦が小笠原東方の海中で消息を絶った、というのが話の骨子であった。問題はその潜水艦が米海軍が次期攻撃型原潜のプロトタイプとして建造し、評価試験中の艦だった事だった。この艦の持つコンセプトは、これまで軍事的には利用された事が無い、新たな空間、つまり、千mを超える水深の海中における自由な行動であった。最大潜入深度三千m、安全深度二千mという深海潜水艇なみの耐圧船殻と、そのような大深度からも攻撃可能な武器体系を持つ、この新型潜水艦は事実上一般的軍事手段では探知不可能であり、さらにこれを攻撃する手段も現時点では、どの国の海軍も持ち合わせていなかった。従って、現時点でこの艦は無敵と言っても過言ではなく、それゆえ、米海軍内部ですらこの艦の存在自体極秘の扱いとなっていた。
その艦が消息を絶った。米海軍が所有するＤＳＲＶの持つ能力を遥かに超える水深の海域で消息を絶ったこの艦の捜索が有為な時間

で可能なのは、一万m級の潜航作業が可能な「かいえん」を持つ海洋調査機構しか無かった。
「なるほど。確かに太平洋の西側ではうちだけですからねぇ、そういう能力があるのは・・・しかし、極秘の艦でしょう、いいんですかね？半官とはいえ、民間であるうちに情報を渡しても？」
「背に腹は代えられないって事でしょう。それと、これは噂ですが米政府のかなり高い地位の人間の関係者が乗り組んでいるとか、いないとか・・・」
「まぁ、そういうこともあるんでしょうね。で、具体的にはどうするおつもりですか？」「今、「みこもと」は出てるんでしたよね？」
「ええ、都合の良い事に小笠原近傍での海底調査に向けて航行中です。今は相模湾を出る辺りですかね。」
「そりゃ都合がいい。どこか、八丈辺りで便乗者乗せられれば・・・」
「事情が事情だから私が直接出向きますよ。「ドリイ」も運ばなきゃならんので、どうせ一旦どこかに入港する予定でしたから。ただ、アメちゃんの指揮下に入るのだけは勘弁してもらいますよ。これだけは譲れない。情報はリアルタイムで流しますが。それと、上との話はお願いします。「ドリイ」を持って私が飛ぶまでは、予定のうちですが、そこからの目的変更は私の一存じゃ無理なんで。」
「ああ、そっちは任せて下さい。もともと一番上から幕へ降りてきた話ですから、問題ないでしょう。指揮権の方は赤坂（大使館）の方がごちゃごちゃ言いそうですが、なにせ吉村御大自らご出馬じゃ譲るわけにも行かない。ごり押しますよ。」
「よろしく願います。で、ブリーフィングとかは？」
「連中（米軍）はやりたいみたいですが、連中だってそう多くの情報を持ってるわけじゃない。時間を考えれば、乗船してからで間に合うでしょう。遭難した艦のデーターは直接「みこもと」のデーターベースへ送れば済む事ですし。」
「そういうことなら、すぐにでも動きましょう。おーい、みっちゃ

ん、ちょっと来てくれる。」
「はーい。なんでしょう、主任。」
「えっと、インマルかインターネット経由で「みこもと」に八丈へ入るよう連絡してくれますか？多分、インマルの方が早いな。Ｃならブリッジで打ち出されるから、長野がオンラインゲームで占拠してるネットより早いだろ。」
「了解しました。それではインマルサットＣへＥメールで送ります。バックアップにネット経由でも同一文を送信しておきます。」
「はい。それで良いでしょう。それじゃお願いね。あ、それと「ドリイ」班の村上君に後で来るように伝言しておいてもらえると有り難いなぁ。」
「はい。「みこもと」へメール打った後ですぐに。」
「すみませんね、八木さん。突然忙しくしちゃったみたいで。」
「あ、い、いえ、滝川さんのせいじゃありませんから・・・」
「お、おい、滝川さんと俺とじゃ随分応対が違うじゃないか・・・・」
「主任、中年のいじけはモテない原因の第一位ですからね。」
「ぉ・・・・・・・・」

承前（後書き）

時間を遡っていますので、混乱の無いように。

捜索（前書き）

第８話です。

捜索

翌日早朝、バグ取りの済んだ「ドリイ」と吉村を含む一六名に海自からの連絡員二名、米海軍からの便乗者八名を乗せたC?１３０輸送機は厚木基地から八丈空港へ向けて離陸した。八丈三根港に入港した「みこもと」への「ドリイ」の搭載と便乗者の乗船は午前中に済み、昼前、「みこもと」は一路小笠原東方海上へと進路を向けた。

昼食後、乗り組み要員へのブリーフィングが行われたが、米海軍からの情報は遭難位置に関する以外、ほとんど意味の無いものだった。付近の水深は三千m程度であることから、艦自体は無事である可能性もあったが、米側の希望でそれは伏せられたまま、一次捜索はサイドスキャンソナーにより海底地形の変化を探知、それをデーターベースに送られた艦型を三次元シミュレートしたものと比較して、可能性のある海底地形へ「ドリイ」を送り実画像で確認、という手順を繰り返すことに決められた。

問題だったのは、米海軍からの便乗者だった。連絡、識別、技術のために来た六名には取り立てて問題は無かったが、その専門がはっきりしない二名が発見後の指揮権を要求したため、吉村と真正面から衝突することになった。すでにＣＩＮＣＰＡＣと在日米海軍司令部からは滝川が手を回して覚え書きを受け取っており、無視すれば良いだけであったが、吉村の性格と事情がそれを許さなかった。この二名が母島二見港で降ろされずに済んだのは滝川から、「米政府の高い地位」からの要請で降ろす事だけはやめてくれ、という一報があったことによる。

実は吉村には、米国を信頼できない事情があった。それは「みずなぎ」開発に関わっていた。吉村は「みずなぎ」開発の主務者として計画に関わり、特に「水中グライダー」技術を、その中心となっ

て推進していた。実験を行ったウッズホール研究所と正式に技術提携を行い、ほとんど基礎データーしか無かった「水中グライダー」技術を、Ｔｒｏｎと組み合わせて外部センサーフィードバックによる最適制御を行う事で実用可能なレベルにまで発展させたのは、ほとんど吉村の率いたチームだけの成果と言っても良かった。ところが、それを「みずなぎ」に搭載し、いよいよ正式実験開始という段になって、とんでもない問題が持ち上がった。米国南部の田舎町に住む一人の男の代理人から、「水中グライダー」に対する特許使用料の請求が舞い込んだのである。ウッズホール研究所との提携で、商業利用しない限り無制限の技術使用権を獲得しているはずの技術に特許使用料を請求されたのだから、まったくの寝耳に水であった。驚いた吉村はウッズホール研究所と連絡を取り合い、事情を詳しく知ろうと努力したが、ウッズホールでも何も判らず、結局、米国内で訴訟を起こされる事になった。

後になって判明した事であるが、その事情はあまりにもばかばかしい事情だった。ウッズホール研究所がこの「水中グライダー」を実験した新聞記事を読んだこの男は、

その日のうちに原理図を書き上げ、自分のアイディアとして特許申請したのである。ウッズホール研究所は、この方式の実験をスキューバダイビングの補助装置と位置づけて行ったため、その用途としての権利関係については注意をしていたが、実用潜水艇の動力としての考慮はまったくしておらず、盲点を突かれた形で特許が成立してしまった。そして、ウッズホールでは実験結果があまり期待できるもので無かった事などから、すでに忘れられた技術として注意を払っていなかったため、本来なら彼らが獲得すべき特許が他の人間に認可された事を知らずにいたのだった。

当初、吉村は一人でこれに対処するはめになった。技術提携先のウッズホールは、すでに忘れられた技術として、あまり熱心ではなかったからである。吉村は日本と米国の間を飛び回りながら対応していたが、結局最初の裁判では数千万ドルもの特許使用料を支払え

との判決が下される結果となった。ともかくウッズホールが動かない事には埒が開かないというよりも、本来ならば訴訟の矢面に立つべきはウッズホールなはず、と考えた吉村は「水中グライダー」技術の骨子とも言えるＴｒｏｎ応用技術とその最適化論理を、時期尚早という部内の反対を押し切る形でウッズホール側に公開、それによって技術の将来性を認識させる事に成功し、ウッズホールに真剣な対応をさせる事になった。これにより訴訟には勝ったがその将来性を知ったウッズホール側から様々な技術利用制限を押し付けられる事になった。

本来、投げ捨てていた技術にもかかわらず、吉村らの努力でその真の価値が見いだされるや、権利を主張し始める、というウッズホール研究所に限らず、米国の社会的習性とでもいえる対応に、日本側ではこれまた日本的な吉村の技術的詳細の提供が原因だから、と責任を追求する動きまで起きては、吉村と言わずともうんざりするのは当然だった。これ以降、吉村とこれに関わったチーム全員は、米国という国家に対する信頼感をまったく喪失し、独自技術による開発を目指すが、なぜか米国に対して妄信的信頼を置く人々からは「無駄な努力」「金の無駄遣い」などという非難を浴びせられる事になった。それでも、トラブルによる遅れを取り戻し、当初予定からの遅れも許容範囲に収め、当初予算の範囲内で「みずなぎ」計画を成功させた吉村とそのチームの業績を評価しないわけには行かず、潜水艇による海中調査の第一人者という地位も外力で左右できるものでもなく、現在の地位は当然のものと言えた。

このような吉村であったから、その二人の要求への答えは、「ふざけるな、何様だと思っていやがる。」であった。幸い、日本語はあまり判らないようで、大事には至らずに済んだが、吉村を知る米海軍便乗者の中には失笑を漏らすものまで居た。しかし、このどたばたも滝川からの連絡で吉村が矛を収め、一段落したかに見えた。それでもこの二人は、吉村だけでなく、システム担当の長野にサー

バーへのｒｏｏｔ権限での接続を要求したり、船長にインマルサットＦの専用を要求したり、なんとも表現のしようの無い行動を展開していた。

しかし、船はどたばた劇とは関係なく行程を進め、二日目の午後には遭難海域とされる位置に到達していた。捜索は最終的に判明している位置とその時点での進路、速度を基準に、いくつかの矩形の区画を設け、そこを一海里幅でジグザグにスキャンして行く。速度を7ノット以上に上げるわけには行かないため、捜索範囲を考えれば非常に時間の掛かる作業だった。捜索はこれ以外にも、発信されていると思われる、音響遭難信号の受信を目的とした艦艇や対潜哨戒機によるソノブイ投下などでも行われており、どこかに出張っているはずの原子力空母「ニミッツ」の搭載機と思われるＳ？３哨戒機が時折付近に現れていた。しかし、いまだ信号を発見したという知らせは無かった。

「みこもと」は事前に情報に基づいて割り出した予想コース上を１０個の一辺１０海里の区画に分け、それを一つずつしらみつぶしに捜索する操船を開始した。サイドスキャンソナーの信号は角度が大きくなるに従って歪みが増えるため、両サイド０．５海里程度が実用範囲だった。無理をすれば2海里程度の幅を取れない事も無いが、今回のように三千ｍを超えるような深度では歪みが大きすぎて実用的ではなかった。時間的節約のため、スキャンでそれらしきものを発見しても、停船せずスキャンを続け、一区画スキャンが終了した時点でコンピューターシミュレーションでの蓋然性が高い順に「ドリイ」を送り込む手はずになっていた。対象の位置精度はＧＰＳが頼りだったが、ＤＧＰＳ信号の受信範囲外であるため、精度が問題であった。しかし、米海軍の技術陣が持ち込んだ軍用ＧＰＳ受信装置からの信号をシステムに取り込む事で簡単に解決してしまった。精度そのものは公表されなかったが、要求される表示精度から考えれば、ミリ単位の精度でもおかしくなかった。

第一区画では１４個の「それらしき」目標を発見したが、シミュレ

ーションの結果、蓋然性がどれも１０％以下で、「ドリイ」を送り込む優先順位は低く、そのうち数個は出力を上げて再スキャンすることで、軟泥下の構造との連続が確認されたため、岩礁と判断され、結局第二区画へそのまま移行した後に調査という事になった。

捜索（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

異常（前書き）

第9話です。

異常

それが見つかったのは第二区画の走査を半分ほど終了した時だった。
「あれ、なんだこれ。」
ソナー担当の黒岩が素頓狂な声を上げた。リアルタイムで解析をした結果を表示しているスクリーンの一部が真っ白に空白になっていた。ソナー観測室の隅でコーヒーを入れていた、もう一人のソナー担当、山崎が「なんだ、お化けでも出たのか」と混ぜっ返したが、黒岩は真剣だった。
「画像の一部が解析不能らしいです。空白になってます。どうしたんだろ。」
「なんだって？コンピューターがおかしくなったんじゃないか？」
「いえ、他の部分は正常なんです。おおよそ８００ｍ四方の区域だけがぽっかり空白になっちゃってます。」
「そりゃ変だ。主任を呼んだ方が良いな。」
自室に居た吉村はインターカムで呼び出された。インターカムでの簡単な説明を聴いて、システム担当の長野にも呼び出しを掛け、自分はソナー観測室へ急いだ。
「なんだ、何があったんだ。黒岩君。」
「これを見てください。８００ｍ四方が空白で出力されてます。」
「ふーん。変だねぇ。解析前のソナー信号映像は見たのかね。」
「今、スクリーンに出します。」と山崎がソナーを操作しながら答えた。
「なんだ、こりゃ？穴が開いてる？まさか？おい、長野君ここだけエラーって事は無いのね。」
「コンピューターってのはこういう形ではエラーしないんですよ、普通。なんかのコマンドが入ってここだけ空白にせよ、って命令したなら別ですがね。とにかく、データーをダンプしてみます。」

「それじゃ俺は船長に頼んでちょっと船を戻してもらおう。位置は判ってるんだろ、真上に船を持っていってもらう。」
吉村はブリッジに連絡して、異常を伝えると共に船を戻す位置を知らせた。
「あー、なるほど。それで空白なんだ。」データーを見ていた長野が声を上げた。
「なんだ、何か判ったのか？」
「これ見てください。入力データーが閾値を超えてるんです。だから空白が表示される。要するにあり得ないデーターなんですよ。だからコンピューターはエラーとして切り捨ててしまうわけです。こりゃコンピューター側じゃ無くてソナー側の出力信号の問題ですね。」
「で、山崎君、ソナーはどうなんだ？」
「吉村さん、これ見てください。これ空白のエリア部分の録画像ですけど、その空白部分、穴が開いてるように見える部分じゃなくて、その周辺部分なんですけれど、海底地形が乱れて見えるでしょう。これ海底地形じゃなくて、相互干渉か何かで反射波の到達時間が変わってるんです。辺縁部の乱れが全周で同じ周期になってるのが判りますか。」
「うん、言われて見ればその通りに見えるな。」
「吉村さんブリッジからです。」長野がブリッジからの呼び出しを取り次いだ。
「お、すまん。はい、吉村です。ただ今直上ですね。すみません、お手数かけます。できる限りで結構です、この位置をキープして頂けると有り難いです。はぁ、わかりました。いえ、それで結構です。ダイナミックポジショニングに移行する必要は無いと思いますので。はい。それでは観測終了次第連絡します。山崎君ただ今直上だ。ソナースキャン頼む。」
「了解。スキャン開始します。」
「お、やっぱりひどく乱れてるな。長野君、なんとか解析できない

か？」
「ちょっと無理ですね。海中の音響特性がひどく変化しているから、閾値を変えてもだめでしょう。シミュレーションを停止して、歪み修正だけにしてみますが、そう変わらないと思います。ただし辺縁部の正確な形は判ると思います。」
シミュレーションを停止した結果、音響異常の区域が不定形のドーム状に広がっている事が判ったのは収穫だった。穴ではなく海底から盛り上がる形になっていた。
「一応、海底を三千ｍと仮定して、回折などで信号遅れが生じていると想定した解析結果です。多分、現実の状況に最も近いかも知れません。それと４００ｍ付近にいくつか乱れがあります。何かが浮遊しているようです。ソナーでは見えませんか。」
「だめですね。こちらの表示部はそんなに頭良くないですから。」
「判った。ともかく、探査を続行しよう。４００付近の幽霊は「みずなぎ」を降ろして調べてみよう。「みずなぎ」なら7ノット程度の速力でジグザグ航行している本船との出会い進路に入るのは簡単だからな。もっと深いドーム部分は区画探査終了後、「ドリイ」にて行う。ソナー班はそのまま続行、長野君は「みずなぎ」とのデーター回線構築を頼む。「みずなぎ」は一号艇、野瀬さんに行ってもらおう。チームは誰だったかな、津田君か？長野君すまんが、野瀬さんに連絡してもらえるかな。俺はブリッジへ説明してから、後ろへ行く。」
吉村は当座の行動をそう指示すると、ブリッジへ上る階段へ向かった。
「お、吉村さん、いったい何が持ち上がったんですか？」
吉村がブリッジに上がると、そこには船長の山下が待っていた。
「船長、こちらでしたか。いえ、ソナーがおかしな反応を捕まえまして。」
「ほう。今回の探し物に関係がありそうなんですか。」
「いえ、まだその辺は判りません。ただ、これまで本船が遭遇した

事が無い現象である事は確実ですね。この直下の海底の相当広い範囲に渡ってソナー反射が異常になる部分が存在しています。解析した結果どうも海底からドーム状に盛り上がる形でそういう部分があるようです。それと水深４００ｍ付近にも幽霊のようにつかみ所のない反応が現れてます。少なくとも魚やクジラの類いじゃありませんね。」
「なるほど。それで、どうするおつもりですか。」
「一応、探査はこれまで通りこの区画が終了するまで行い、海底の異常部分へは、区画探査終了後、「ドリイ」を送るつもりです。水深４００ｍ付近の異常には、ここで「みずなぎ」を降ろして、調査後本船との出会い進路に入れ、会同点で回収を考えてます。」
「大丈夫ですか、まったくバックアップ無しで。」
「ええ。「みずなぎ」はもともとがそういう用途で作ってありますんで。もっとも状況が許せば、ゾディアックを一杯残しておきたいんですがね。」
「なるほど。ゾディアックはこちらでやりましょう。「みずなぎ」と一緒に降ろせば時間が節約できる。」
「助かります。船長。それじゃ私は後部へ行きますので。」
「はい。ご苦労様です。「みずなぎ」は野瀬さん？」
「ええ。一号艇です。経験じゃ彼の上に出る人はいませんので。」
「そういうことでしょうね。それでは気をつけて。」
「みずなぎ」の発進準備作業が行われている、後部甲板に降りた吉村は、艇長の野瀬を探した。
「野瀬さん、すいませんね、大変な仕事お願いしちゃって。」
「まぁ、あんたと仕事する限り毎度の事とあきらめてるから、気にもならんよ。」と野瀬は笑い飛ばした。
「ところで、吉村さん、その調べる対象の予測すらできんのかね。長野君から聴いた限りでは、随分とおかしなものみたいだが。」
「ええ。どうにも判らないんですよ。まぁ、それで野瀬御大に白羽の矢ということなんですがね。」

「おい、その御大は勘弁してくれよな。まるで年寄りみたいじゃないか。ところで、具体的にはどういう調査するんだね。」
「早い話、上じゃ何も判らんから、野瀬さんに丸投げするつもりなんですがね。海洋学の方から多分、望月君が一緒に行く事になると思いますんで、話し合ってうまくお願いしますよ。結果に文句は付けさせませんから。」
「なんとまぁ・・・それじゃ、搭載ポッドの選定もこっちでやるって事かいな。」
「早い話、そういうことになります。」
「みずなぎ」はその外部、艇底部と上部に計４カ所の外部観測装置集合体搭載ポイントが設けられていた。そこへは各種観測機器を搭載できる４種類のコンフォーマル整形された搭載コンテナ、別名「ポッド」が用意されていた。各観測班は、その目的に必要な機器を「ポッド」に搭載し、搭載ポイントへ接続することで、艇内の観測員コンソールへリアルタイムで観測データーが送られ、記録、転送などを「みずなぎ」搭載のメインコンピューターにより処理する事が可能だった。データー転送は「ポッド」自体に用意されたマルチ入力光データー変換装置、アナログ／デジタルで取り込んだ信号を高速光伝送信号に変換する装置を介した後、無接触光ファイバーコネクターを経由して艇内に送られるため、「ポッド」に内蔵できる電源を使用する限り、水圧による制限は「みずなぎ」の潜入深度限界と同じであった。もっとも、観測機器によっては、水中に露出させる必要があるため、そのような装置では、それ自体の水圧限界に束縛されることになったが、観測と言う作業を考えれば許容できる制限だった。

異常（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています。

異常２（前書き）

少し短いですが第１０話です。

異常2

野瀬は作業中の「みずなぎ」に近寄ると、観測窓を叩いて内部のコンソールで作業中の津田を呼び出した。
「なんでしょう、艇長。あ、吉村さん、どうも。」
「ポッドの選択はこっちでやってくれって事だ。おまえさんに任せる。以上だ。」
「あ、あの、任せるっても、私ら観測要員じゃないんで、持ってるのは水中高速データー通信ポッドだけですけど・・・」
「あー、それ搭載しといてくれ。後は海洋学の望月君が来るらしいから、彼と相談して巧くやってくれ。」
「ふぇー、また仕事が増えるんですかぁ・・・今回は海が深いからうちら出番なしって聴いてたのに・・・・」
「恨むなら吉村さんを恨め。それじゃ頼んだぞ。操縦特性の設定はいつも通りでいいから、少し手が抜けるだろ。優しい艇長を持った事に感謝するんだぞ。」
「手が抜けるって、それでなくてもややっこしいんですけど・・・ったく・・・」
「ほら、あと30分で着水作業だからな。しっかり働け。」
「ほんと、人使いが荒いんだから、もう。えーえー、判りました、やりますよ、やればいいんでしょ。艇長こそ着水に遅れないで下さいよ。」
このコンビの準備作業は毎度のこと、爆笑漫才顔負けのやりとりの連続だったが、「みこもと」船内、いや海洋調査機構内でもっとも経験と信頼がおけるコンビだった。二人とも「みずなぎ」の開発段階から関わっており、特に津田は「みずなぎ」の制御部に関しては設計者よりも詳しいと言われていた。
30分後、「みずなぎ」は着水し、すぐに潜航に移った。問題のポッドは海洋学から青緑レーザー海水物性観測ポッドが搭載された。

これはその測定の都合から機器露出型だったが、耐水圧は「みずなぎ」本体より大きかった。

吉村は「みずなぎ」の発進を最後まで見送ったが、なぜかあまり楽観的になれない自分を発見して驚いていた。

異常2（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしてます。

分析（前書き）

第１１話です。前節が短かったので、同時投稿します。
ここから時間が現在時に戻ります。

分析

浮上に成功した「みずなぎ」一号艇は、ボンベに最後に残った燃料を使って、ネガチブタンクを排水し、いまや水面から９０Ｃｍの高さに露頂していた。
上部ハッチから頭だけ出した津田は緊急用ＶＨＦウォーキートーキーで母船と連絡を付けようとしていた。
「みこもと1、みこもと1、こちら、みずなぎ1、感度ありますか。」
「みずなぎ1、こちらみこもと3、浮上したのか?」
以外と強力な信号に驚いた津田は、水平線を見渡した。艇首から右舷３０度ほどの方位、水平線上に黒いものが見え隠れしていた。
「みこもと3、ゾディアックですか?」
「その通り。こちらからはそちらが見えない。方位をくれ。どうぞ。」
腕に付けた腕時計型コンパスを瞬時に読み取り、磁方位を計算した津田は、
「こちらからは、そちらが見える。そちらからの方位２４０度方向、距離は概ね3海里ほどと思う。どうぞ。」
「了解、直ちにそちらに向かう。待機願う。」
「みずなぎ1了解。待機します。」
ほどなく、白波を蹴立ててこちらへ向かうゾディアックが見えて来た。ゾディアックでもこちらを視認したらしく、若干進路を変更して真っすぐ向かってくるようだった。
「艇長、ゾディアックが来ます。すでにこちらを視認したようです。」
「おー、そうか。そういや着水時に一緒にゾディアックを降ろしたが、あれか。」
「そのようですね。運用課の先読みに今回は助けられましたね。」

「そうだな。後で船長に礼をしなくちゃな。」
ほどなくゾディアックが接舷し、ウエットスーツを着た回収要員が飛び込んで双方をロープで繋いだ。安全のために「みずなぎ」の乗員は三名ともゾディアックに移り、ハッチを水密にして曳航する事になった。すでに母船へはゾディアックから連絡が取れており、全速力でこちらへ向かっていた。

「いったい、何が起きたんだい、野瀬さん。」
母船に戻った「みずなぎ」一号艇のメンバーは、食事と３０分の休憩を与えられた後、観測班会議室での状況説明に呼び出された。運用課からは船長、観測班は吉村、二人の長と、今後の解析に必要と思われるメンバーが集合した会議室で最初に吉村が口を開いた。
「私の方からは起きた事実だけですね。青緑レーザーの調整中、海水の異常を見つけて、それの確認中に突然あの怪物が凄い早さで動き、前後端で艇を挟んだ。その瞬間、ピカ、ドカーン、電源が落ちて艇内が真っ暗になった。それだけです。詳しい現象の説明は津田君、望月君の方が私より適任でしょう。」
津田、望月もそれに続き、津田は電撃について、望月は海水の異常について、それぞれ説明を行ったが、まったく想定されていなかった現象であり、直後に電源を失った事から定量的な分析が不可能だった事もあり、結局皮相的な分析以上の事はどちらもできなかった。
「さてと、事情は判った。これまでの状況説明から、専門的立場で何か判るかね。生物学的見地としてはどうかね、村木君。」
「データーが少なすぎて難しいですが、判っている事だけを羅列してみますと、まず、巨大であること、ＥＬによると思われる発光をしている事、この２点と電撃を受けた事を合わせると、相当に高い発電能力を持つようですね。生体発電は普通それ専門の細胞組織が関与しているのですが、ビデオで見る限り、そのような組織は見当たらない。だいたいにおいて、細胞組織があるのかさえ判らないわけで、この辺はまったく謎です。今回の件でサンプルの採取は危険

が伴う事が判ったわけですし、別の手法で解明するしか方法は無いようですね。生物学的には全くの新種、それも今世紀最大規模の発見になると思いますが。」
「生態学の立場からはどうですか、チャンさん。」
「問題は何を食べてるかです。こんな大きな体を維持するのは大変です。食物連鎖のどこに位置するの。いっそ何も食べてくれない方が説明がやさしいです。どのニッチに当てはめるのか、発電能力はいったい何のためか。自分が直接攻撃されたわけではないのに、攻撃行動を取った意味は。本当に謎だらけ。大変興味深いです。」
「吉村さん、ちょっとよろしいですか。」電磁気学の藤村が発言を求めた。
「どうぞ。」
「あくまでも電気的な見地ですが、海水中でどうやってこんな電圧、電流を扱える絶縁性を保持しているのでしょうか？電撃を受けたという事は、それまでは絶縁状態にあり、艇に触れた瞬間にその絶縁性を喪失した、という事になります。そんな都合の良い絶縁物はこれまで知られていません。強いて言えば半導体でしょうが、生体が半導体になったという事実を知りません。多分、物理的、電気的物性はこれまで知られていないものかも知れません。宇宙からやってきた生物と断定したいくらいです。」
「私も物理屋のはしくれだから、君の気持ちは判る。しかし、宇宙生物というのは少し棚上げしておきましょう。船長、船の安全の立場から何かありますでしょうか？」
「さきほど藤村さんに予測してもらったんだが、同じレベルの電撃を受けた場合、本船でも何か障害が発生する可能性があるようだ。ただし、「みずなぎ」と異なり、本船の場合全体が金属なゆえ、局部電位は「みずなぎ」ほどは上昇しないらしい。今、地絡保護付き電流制限器と継電器の系統を調べてる。当座、安全性は低下するが、地絡保護無しのものにメインの線路だけでも交換を急がせている。物理的な力は大した事なさそうなのは「みずなぎ」を見れば判るし、

表層まで上がれるのかも不明だから、当面は電源喪失の事態に陥らない対策だけで行こうと思っている。以上です。」
「了解しました。さて、この怪物と海水異常が今回のミッション目的と関連するかなんだが・・・情報が少なすぎて分析が難しいのは判るが、何か意見はないだろうか。」
最初に口を開いたのは津田だった。
「我々が受けた電撃で原子力潜水艦がどうこうなるものか、その情報が必要だと思います。米海軍の技術の連中に聴いて見たいのですが。」
「あー、それはもっともな考えだな。津田君、ちょっと呼んでもらえるかな。あー頼むからあの二人は別にしてくれってな。」
米軍側も今回の顛末には興味があったらしく、潜水艦技術を担任する士官がすぐに顔を出した。転送された生物のビデオと、これまでの顛末を説明された士官はさすがに驚いたようだった。
「ところで、通訳が必要ならチャンさん、お願いします。さて、どうだろう、このような電撃で原子力潜水艦が何か被害を受けるだろうか。」
士官の答えはチャンを通じてだった。話が専門的になるため、片言の日本語では表現しきれないためだった。
「一般的な原子力潜水艦であれば、問題ないでしょう。原子力潜水艦はその原理上、非常に大きな電力の発電を常時行いますから、基準電位保持にはかなり気を使って建造されます。しかし、今回の新型では大深度運用のため複合素材を多用しているという噂です。正確な情報は我々も持ち合わせていません。噂レベルの話では、形状保持に複合素材を、耐圧船殻にはチタン内張をしたＣＦＲＰが使用されていると言われています。この場合「みずなぎ」と類似した現象が発生するのを否定できません。」
その時だった。大声で
「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！　Ｎｏ　ｍｏｒｅ！」
と叫ぶ声がした。例の二人のうち一人が叫んでいた。もう一人が吉

村に詰め寄り、早口に何事かまくしたてた。チャンがそれを通訳したが、もちろん通訳できない４文字言葉は省略してだった。
「なぜ、我々に黙って会合を開いた。資格の無いものが機密情報に触れる事は許されない。即座に解散せよ。」
これを聴いた吉村は、怒るより先に呆れ返った。ボランティアで捜索に参加している他国船舶に乗り込んで、機密保持やら解散命令やら、いったい何を考えているんだ？というのが感想だった。
「船長、すみませんが、保安要員を呼んでもらえませんか？捜索活動を妨害するつもりらしいんで、拘束する事を具申します。」吉村は真顔で船長にそう提案した。
「そうですね。事を荒立てるのは本意ではありませんが、これまでにも、不審な動きが多すぎました。拘束して米側と話し合うのが筋でしょうね。保安要員、船長命令。この二人を拘束しろ。自室に拘束、以後命あるまで２名の保安要員を２４時間立たせるように。かかれ。」
「みこもと」乗り組みの保安要員は常時は４名で接岸時の保安を担任するだけであったが、今回は事情が事情だっただけに倍の８名に増員していた。どの保安要員も警視庁警備課からの出向で、逮捕術をマスターしている猛者だった。二人は初め抵抗したが、その道の専門家４名が相手では相手が悪すぎた。すぐに取り押さえられ、自室に軟禁される事になった。
　この騒ぎで会合は一旦解散、後刻検討の上、再集合することになった。その再集合までの間、自室に引き取っていた吉村に米海軍派遣の残りの６名が面会を求めた。
「吉村サン、我々は抗議シマス。」
「あー、判った、判った。抗議は聴いた。で、本題はなんだ。」
「書類ニシテオイテクダサイネ。」
「どこで覚えたんだ、そんなお役所日本語。ったく・・・」
「英語デイイデスネ。」
以下便宜上英語を日本語に訳した形で進めるが、

「一応抗議しておかないと、後でいろいろとうるさいので・・・・」
「つましきものは、日米変わらんなぁ・・・ご苦労なこった。まず、連中は何者だ。」
「あれは、国家安全保障省の連中です。大使館が司令部にごり押しして、オブザーバーの資格で参加しました。海軍の制服は便宜上です。彼らの兵役経歴は陸軍でしかありません。指揮権要求した事を知って、彼らにはあくまでもオブザーバーである旨注意したのですが、無駄だったようです。」
「ああ、その後もサーバーへの無制限アクセス要求やら、衛星通信の占有要求やら、なんかメチャクチャな要求をしていたぞ。」
「困ったもんです。遭難がテロ行為の可能性有りとかの理屈を付けて、何にでも首を突っ込んでくる。」
「こちらでは、一応、横須賀と協議して取り扱いを決めようかと思っているんだが、君たちの意見はどうかね。」
「多分、司令部でも持て余すと思います。今や国家安全保障省たるや飛ぶ鳥を落とす勢いですからね。キャプテン滝川に任せたらいかがかと・・・」
「なるほど。しかし、君らは日本人より日本的思考じゃないか。」
「郷に入っては郷に従え。」
「負けた・・・・」

分析（後書き）

ここから現時間です。
国家安全保障省の件はある程度実体験だったりします。
ご意見ご感想をお待ちします。

探査（前書き）

第１２話です。「ドリイ」という深海探査ロボットが登場します。

探査

例の二人の処遇を衛星電話で滝川に依頼した吉村は、再度招集された対策会に顔を出した。今回は始めから米海軍のメンバーも参加していた。

「とんだ邪魔が入ったがミーティングを再会する。これまでに判っているのは、遭難した潜水艦とこの生物に関連があるかもしれない、という処までだが、ここまでで何か質問はあるか？無いようなら、もう少し米海軍の方から説明を頂きたい。チャンさんお願いします。」

ずっと米海軍士官たちと話し合っていたチャンが彼らに代わって説明をおこなった。

「米海軍としての意見は、遭難した潜水艦の細部仕様は不明であるが、これまでの非公式情報から推して影響を受けた可能性があります。我々の任務がこの艦の救難であるかぎり、非公式な情報といえど無視はできない。これが第7艦隊司令部と連絡を取った後の公式見解と考えて頂きたい、とのことです。もう一点、ソナー信号の異常が見られる点から、最後に判明している位置までの逆シミュレーションをしたい。ついては、本船メインコンピューターの使用を許可されたい。さらに津田さん、長野さんに協力を願いたい。公式な要請と受け取ってもらって構わないという事です。以上です。」

「了解した。観測用メインコンピューターについては私の権限で無制限な使用を許可します。津田君、長野君、それからソナー担当として山崎君も参加してくれ。それと、時間は無いと思ってくれ。細部に渉っての解析は必要ない。蓋然性が証明できた時点で、異常海域の捜索に入る。それではかかってくれたまえ。」

こういう状況での吉村の指揮能力は群を抜いていた。普段の「オジさん」からは想像もできない状況把握能力と決断力を垣間見せていた。

分析とシミュレーションは1時間もせずに終わった。シミュレーションすら必要なかった。横須賀経由で入手した次回位置通報点の座標が滝川から送られて来たことで、単純に海図上に線を引く作業だけでも判る蓋然性、最終位置判明点から次回位置通報点まで引いた直線上に現在位置があったからだった。

「みこもと」船上では遠隔観測担当の田中が「ＤＯＲＩＩ」の準備に追われていた。

「田中君、もう発進できそうか？」

「あ、吉村さん。あと１５分くらいです。今回はケーブルを引くんで、操縦特性の設定が厄介でして。」

「『みずなぎ』の状況を考えれば、いくら利口な「ＤＯＲＩＩ」とはいえ、自律制御はちと無理がある。音響もレーザーもだめ、となればケーブル引くしか無いからなぁ。」

「はぁ、それは判ってます。別にケーブル引いた事がないわけじゃありませんから、その辺に問題はありません。問題なのは「ＤＯＲＩＩ」自身が進歩しちゃって、昔のデーターじゃ不足がある事でして・・・・」

「あー、なるほどね。こいつは頭がいいからなぁ。ケーブル引いたのはほんの初期だから、今のこいつにしてみれば、高校生に小学一年レベルの計算で行動を規定しろ、っていってるようなもんか・・・」

「そういうことです。足りない分は人間が補うしか無いけれど、最近じゃこいつ僕より頭が良いみたいで・・・・」

「頭の良い恋人だと思えばいいんじゃないか？便利だぞ、そういうのって。」

「時間が無くてまだ本物の恋人も居ないのに、そりゃ酷なお言葉・・・」

「まぁ、腐らずにしっかり準備しておくれ。」

「了解・・・グスン。」

まったくはた迷惑な吉村ではあったが、準備は怠り無く進み、「Ｄ

ＯＲＩＩ」は海中深くその姿を沈めた。
　吉村が観測室に戻ってみると、すでに操作担当の田中、村上だけでなく、観測メンバーのほとんどが顔を揃えていた。
「田中君、どう、順調？」
「ええ、いままでの処問題はありません。例の生物は極力避けて潜らせますが、向こうが動いたらケーブル引いて機動性が落ちてますから、避けるのは難しいと思いますが・・」
「ま、そりゃ仕方が無い。ケーブル切り離しても自分で浮上はできるんだろ？」
「はい。それは問題ありません。こちらから切り離しても、不測の事態でケーブルが切れても、自動で浮上します。もし、浮上経路に障害があるようならば、それを避けて浮上も可能なようにプログラムしてあります。」
「２００ｍ通過。」
制御担当の村上が緊張を孕んだ声で深度を読み上げた。ＣＣＤカメラは動作していたが、照明は落としてあるため、スクリーンは漆黒のままであった。
「４００ｍ通過。」
「そろそろ、例の生物が視野に入るんじゃないか。」
緊張を破ったのは生物学の村木だった。
「それじゃカメラを振ってみましょう。照明は無使用。」
画面、かなり遠くに発光が見えた。
「ソナーでの距離は約３００ｍ。」
「近づいているのか？」
ソナー映像を今は担当している長野に吉村は聞いた。
「いえ、目立った動きはありません。相変わらず中層流の流れに任せて動いています。」
「ならこちらが上流側だから問題無い。変化があれば即座に警告してくれ。それでは続行。」
「ＤＯＲＩＩ」は水深２０００ｍで搭載されている音響測深儀を動

作させた。その画像は観測室に表示された。
「２５０ｍほど下に疑似海底みたいな反応が出てます。非常に微弱。」
音響観測担当の山崎が緊張した声で報告した。
「これが、例のドーム状になった異常部の始まりと考えていいのかな？」
「はい、吉村さん。本船ソナー映像で読み取れる限り、そう考えて良いと思います。」
長野が「ＤＯＲＩＩ」の音響測深データーを取り込みながら答えた。
「長野君、海水のデーターをどっかのスクリーンに出してくれるか？」
「メインスクリーンにオーバーラップさせます。」
海水の塩分濃度、温度などがメインスクリーンの端に表示された。
「現状、それほど異常とは思えんなぁ・・・」
「吉村さん、比重を見てください。あの怪物付近では比重が大きくなっていた。」
「長野君比重は出せるの？」
「はい。今出しました。」
明らかに通常の海水よりも比重が大きくなっていた。
「やっぱり。しかし、温度はあまり変化が無いのに比重だけが大きくなるのか？海水物性としてはどうなのかね、望月君。」
「火山性の熱水チムニー付近で重金属が多量に存在する事で比重が大きくなるケースはありますが、透明度に変化があまり無いのが不思議です。普通は濁ると思うんですが・・それと海水粘度にも変化があると思うのですが、これだけはサンプルを分析しないと・・・」
「諸君、このまま異常水域へ潜入するが問題は無いか？」
「異常水域での海水比重が不明ですから、一旦異常水域手前で停止して比重測定行う方が良いかと思います。浮力調整が崩れかねません。」
「その方が安全だろうな。田中君、ではそのタイミングは任せた。

よろしく頼む。他に何かあるか？」
「生物学的調査が可能ですか。」
「村木君、残念だが今回は無理だ。海水サンプルだけは持ち帰るつもりだから、それで我慢してくれ。本潜水の第一義は遭難潜水艦の発見だ。ほかに意見はないかな？それじゃドリイを異常水域に入れてくれ、田中君。」
「了解」

探査（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

DORII（前書き）

第13話「ドリイ」の活躍です。

DORII

数分後、「ＤＯＲＩＩ」は異常水域に到達していた。それまでも徐々に海水比重、密度の変化は連続していたが、この深度を境に不連続面とでも言える部分が形成されていた。「ＤＯＲＩＩ」はその深度に一旦停止し、直下にある不連続面下層の海水採取とその分析を開始した。

「うわっ、こりゃ海水ってよりも、ゼリーに近いですよ。粘度が飛躍的に大きくなってます。海水採集プローブが沈んで行かないですよ。」

田中が言った通り、境界面でプローブが止まっているように見えた。

「『ＤＯＲＩＩ』は潜入出来ると思うかね。」吉村が聞いた。

「別に物理的な壁があるわけじゃありませんから、時間をかければ潜入するとは思いますが、沈下速度は粘性抵抗で極端に遅くなると思います。粘性抵抗はある程度形状依存しますから、『ＤＯＲＩＩ』のような外部突起物の多い形状では避けようがないですね。」

「何か方法は無いのかね、その、もう少し早く沈める方法だが・・・。」

「これまでも、徐々に海水比重が上がる事で、余分なバラストを取り込んでますから、あまり余裕は残ってません。浮力調整による潜入には限界がありそうです。あとはケーブルが繋がってますから、動力潜入くらいしか・・・」

「田中君、『ＤＯＲＩＩ』の音響観測装置は下へ延ばせるタイプでしたよね。とりあえず音響観測プローブだけでも下げて見て、不連続面以下の音響特性がどうなってるのか調べて見たらどうでしょう。その結果次第では『ＤＯＲＩＩ』を潜入させる必要がないかもしれないし・・・」と望月が提案した。

「お、それやってみる価値がありそうだ。田中君、可能かね。」

「はい。出来ると思います。ただし、サイドスキャンのような精度

はありませんが。」
「それ、こちらにもメリットありそうですよ。田中君今の状況で、プローブの3次元位置はどのくらいの精度で判るの？」ソナー解析を行っている長野が聞いた。
「そうですね、今の状況ならＣｍ単位で判ると思います。でもそれで何か判るんですか？」
「うん、搭載ソナーの問題はこの異常水域の屈折率が判らなかった事なんだ。でも異常水域の中、正確に判明している位置に発音体があれば、屈折率が正確にわかるでしょう。ならば、後はその分補正すれば、それなりの精度の海底地形が得られる。ま、これ以下に不連続面が無いと仮定しての話だけれど、ともかく『ＤＯＲＩＩ』からプローブ下ろせば、その辺も判るわけだし、かなり有用ですよ、このアイディア。」
「よし、判った。田中君、『ＤＯＲＩＩ』を不連続境界面で潜入停止、音響プローブを下ろしてくれますか。」
田中は準備を完了すると同時にプローブを繰り出し所定の位置に固定する操作を開始した。抵抗を低く抑えた形状であるにも関わらず、プローブはなかなか所定の位置に到達しなかった。それでも、「ＤＯＲＩＩ」そのものを沈めるよりは遥かに短い時間でしかなかったが。
「所定深度です。発振開始します。」田中は音響プローブの発音体を稼働させ、海底に向かって超音波探信を開始した。それと同時に長野は音響プローブからの直接波を「みこもと」搭載の受聴装置で受信、屈折率の測定を開始した。

「ＤＯＲＩＩ」の音響プローブによる探査結果は明るいものだった。現在の不連続面以下に新たな不連続面は存在しない事をそのデーターは示していた。粘度は非常に高いが、これより以下では密度、比重等の大きな変化は無いようであった。この結果を受け、これまでに観測されたサイドスキャンソナーのデーターを観測された屈折率

に基づいて再解析した結果、本来の精度ではないものの一応理解可能な形での海底地形が判明した。そして、その新たに作成された３次元海底図には非常に興味深いものが映し出されていた。
「吉村さん、ちょっとこれ、見てもらえますか？今、そっちのスクリーンに出します。」
長野は吉村を呼ぶと、それまで作業を行っていたスクリーンから、メインの大スクリーンに画像を切り替えた。
「なんか見つけたのか？」そう言いながら、吉村が大スクリーンを見ると、そこにはサイドスキャン特有の線図で構成された海底地形が表示されていた。
「今出しているのは、３０００ｍから俯瞰した、異常水域中央部の再構成海底地形です。画面丁度中央右寄りに他のピークよりも横長のピークが見えます。これ非常に怪しい。現在拡大再構成中ですが、長さから言って潜水艦に非常に近いです。」
「長野君、すると、このピークが着底した潜水艦ではないか、という事なのか？」
「はい、その通りです。おおむねこの海域の海底は平坦で、顕著な海底の突起物はあまり見られません。ですから、この再構成図に現れている海底地形の大半は異常水域の境界面の揺れ、内部波などによるものですが、から来る屈折率誤差に起因するものと考えられます。だとすれば、横長の海底地形は実際の地形を表している可能性が強い。そういうことになります。」
「なるほど。田中君、『ＤＯＲＩＩ』から確認する方法はないかな？」
「『ＤＯＲＩＩ』をその地形らしきものの真上に移動して、今回と同じ、音響プローブで確認するのが一番早そうに思います。少しづつ移動してみればもっとはっきりしますが、プローブを下ろしたまま移動するのは海水の粘度を考えるとちょっとどうかと・・・」
「判った。しかし，他に方法が無いなら最悪『ＤＯＲＩＩ』そのものを近くまで下ろす事も考えておかないとだめだろう。ともかく直

上と思われる位置まで『ＤＯＲＩＩ』を移動させよう。田中君、始めてくれ。」
「了解。」
「ＤＯＲＩＩ」の移動そのものは簡単だった。音響プローブを巻き上げ、現在位置から１／４海里ほどの距離を水平移動するだけに過ぎなかった。問題が起きたのはその直後だった。
「吉村主任、乱流があるようです。『ＤＯＲＩＩ』の制御がうまくゆきません。」
リアルタイム映像のスクリーンもそれを裏付けるようにマニュピュレーターが振動している映像を映し出していた。

DORII（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

DORII　2（前書き）

第１４話です。

DORII 2

「一旦境界面から離れます。このままでは横転する可能性があります。」
そう言うと田中は「ＤＯＲＩＩ」を一気に５ｍほど上昇させた。
「なんだ、内部波か何かなのか？」
「いえ、上昇乱流のような感じでした。現在境界面の上５ｍで安定しています。リアルタイムカメラを境界面に向けてみます。」
カメラの映像が映し出したのはチムニーから吹き出す熱水のような、陽炎のような映像だった。およそ差し渡し１０ｍにも及ぶかという範囲が陽炎のように擾乱しているのが映像から確認できた。しかし高さはさほどでもなさそうで、境界面と思われるところから、１ｍほどで擾乱は終わっているように見えた。
「擾乱部にセンサーを下ろします。何か少しは判るかも知れません。」
「ああ、やってみてくれ。」
センサーの表示は上昇流であることを示していた。そして、温度が周囲の海水よりもコンマ数度高い事も同時に。
「吉村主任、これは熱上昇流です。この下に何か熱源があって、それによって発生した熱上昇流が境界面の擾乱をおこしているようです。」
「うん、そう見えるな。望月君、君はどう見る。」
「確かに熱上昇流と思えます。問題は熱源ですね。この海域にはホットスポットは知られていません。もちろん、調査が未だ進んでいない海域ですから、知られざるそれも無いとは言いませんが、この調査区画前後の区画ではそのような兆候はありませんでしたから、ほとんど点熱源という事になります。それは非常に考えにくい。原潜の原子炉廃熱と考える方がはるかに合理的です。」
「うなづける見解だ。長野君、この擾乱を要素に加えた場合、ここ

に潜水艦が沈んでいる蓋然性はどのくらいになる。」
「ソナーデーターが信頼できませんから、誤差が大きい事を承知願った上で、単純推測演算の結果は７８％の蓋然性という結果が出ています。データー誤差による低下を３０％と見積もっても５０％近い蓋然性を有している事になります。」
「判った。十分調査に値する目標であると判断して良さそうだな。それでは、田中君、『ＤＯＲＩＩ』を動力潜入で境界層以下へ潜入させてくれたまえ。喪失等の最悪の事態についての責任は全て私が持つ。従って慎重かつ大胆に実行してくれ。」
「了解」とだけ田中は答えると、村上にピッチ、ロール軸の安定操作を任せ、「ＤＯＲＩＩ」を一気に３０ｍほど上昇させた。垂直方向の最大速度である３ノットの速度を稼ぐためだった。慎重に位置決めを行った後、全てのスラスターを上に向け、全出力で「ＤＯＲＩＩ」を擾乱の中心部に向けて降下させた。熱上昇流の中を降下させるのは、若干でも海水の粘度が低くなっていると思われるからだった。
高粘度域に突入した瞬間、４基のスラスター全てに一瞬過負荷警報が現れたが、すぐに自律制御がモーターへの電流を制限し、続いて最適化制御を行う事で、安定した推力を持続するように働いたため、姿勢の大きな崩れは無かった。さすがに粘度の高い熱上昇流の中では実質降下速度は１ノット以下に落ち込んだが、それ自体は織り込みずみであった。しかし、高粘度域へ潜入するにつれ、曳いているケーブルの粘性抵抗が増大し、速度がさらに低下すると同時に操縦の自由度も次第に失われはじめた。結局、約８００ｍを降下し、海底に接近した頃にはケーブルは先端の５ｍほどを除いて、ほとんど自由度を失っていた。
「海底まで２５ｍ。フラッドライト点灯します。」
それまで暗くなっていたメインスクリーンが明るくなり、ＣＣＤカメラの映像が映し出された。しかし、擾乱による散乱のためか、海底までフッドライトが届かない様子で、スクリーンには陽炎のよう

な擾乱の様子だけが映し出されるだけだった。
「どうも良く判らんな。やはりもっと下がらないとだめなようだな。」
「吉村主任、ケーブルを曳いている限り、この辺が限界です。現在、スラスターフル稼働で、降下速度はほとんどゼロ、前後左右の動きも非常に制限されています。」
「何とかならんかね、田中君。せめて擾乱部分から出る事は出来ないかね。」
「ケーブルを切り離さない限り無理だと思います。ただし、ケーブルを切り離した場合、スラスターの消費電力から言って、内蔵の電池だけでの持続時間は良くて２５分程度になります。現在でもモーターは過電流ぎりぎりのレベルで働いてますから。」
「やはり、切り離さないと無理か。よし、切り離そう。『ＤＯＲＩＩ』の自律能力と学習能力に賭けよう。もともとそういう目的で作られたロボットだ、この程度の異常事態程度、自力で乗り切ってデーターを持ち帰らなけりゃ、作った意味が無い。」
「しかし、吉村さん、この状況ではまったくデーターのやりとりができません。船上からのコマンドバックアップも無理です。ケーブルを切り離した瞬間、『ＤＯＲＩＩ』は完全独立で行動する事になります。これまで、一度もそういう状況での試験をしていませんが？」
「田中君、判ってるよ。しかし、『ＤＯＲＩＩ』は君らが手塩にかけたロボットだ。君らが一番彼の能力を知っているんじゃないのか？たしか、シミュレーターでは完全独立運行もやってるはずだと思ったが？」
「シミュレーターでは確かにやってます。しかし、あくまでも普通の海水での状況で、こんなに異なった環境でのシミュレーションはさすがにやった事がありません。」
「その辺は『ＤＯＲＩＩ』の自律能力と学習能力に期待しよう。田中君、大丈夫、きっと『ＤＯＲＩＩ』はうまくやるよ。」

「判りました。吉村さんがそうおっしゃるなら、完全独立制御に入れてみます。村上、独立制御のプログラムを入力して、ケーブルが繋がっているうちに試験してくれ。俺の方は擾乱域の脱出時間とその後の海底観測時間がどうなるか、シミュレーターを走らせる。制御特性はもう十分にデーターがあるよな。それ、こっちにダンプしてくれ。長野さん、すみません、シミュレーターの方、手を貸して頂けますか。」

「ほい。引き受けた。」

準備は３０分ほどで終わった。最大の問題は観測プログラムだった。擾乱域からの脱出時間が計算出来ないため、最も短い観測時間で結果が得られるように設定する必要があった。現在深度で擾乱域を脱出、１０ｍ降下して海底をＣＣＤカメラでスキャン、電源容量一杯までそれを行って、バルーンにより浮上という手順が最も妥当と思われたが、電源の残量が不明なため、海底のスキャンは賭けに近い事やバルーンによる浮上が高粘度海水中でも可能かどうか、など未知数の問題を多く抱えていた。

「プログラム完了。脱出、降下、撮影、バルーン放出、の手順です。電源残量が少ない場合は１０ｍ降下を省略、２５ｍから一発ストロボでの撮影になります。」

「了解。村上君もいいな。それでは、独立行動モード起動、ケーブルを切り離してくれ。」

「独立行動モード起動完了。すでにケーブルからの制御を離れました。ただいま待機中。ケーブル切り離し後の予測浮上時間は１時間５５分後。それではケーブル切り離します。観測プログラム起動、３、２、１ケーブル切り離し。・・・・ケーブルモニターでは切り離しは成功です。」

「ご苦労様。とりあえずこれまでのデーターを各自持ち帰って、分析してくれ。特に高粘度海水の素因についての検討が欲しい。望月君よろしく。それでは『ＤＯＲＩＩ』浮上後、もう一度ここへ集合してくれたまえ。以上。」

潜水艦発見（前書き）

第１５話です。

潜水艦発見

「ＤＯＲＩＩ」の孤独な戦いは、擾乱域からの脱出行動で始められた。熱上昇流による上向き加速度を相殺した上で、最大の前進力が得られる最適スラスター角を計算、擾乱によるヘッディングの狂いを細かく修正しながら、音響観測で得られた最近の擾乱境界面に向かって移動を開始した。１０分後、約５ｍを移動して、擾乱域から脱出に成功、そのままスラスターによる動力沈降に移行したが、海水の粘性抵抗が予測より大きかったため、６ｍ降下した時点で電池残量が１０％以下となり、降下を停止、深度維持しながら海底をストロボ撮影、１４ショット撮影した時点で電池残量が機能維持最低限に迫ったため、バルーン放出、海面への上昇を確認したあと、バックアップ以外の全電源を遮断、海面までの眠りについた。

海面までの上昇はおおむね無事といっても良かった。高粘度海水の部分ではバルーンの抵抗が上昇速度を減殺し、非常にゆっくりとした浮上速度だったが、高粘度域を抜けてからは正常な浮上速度に復帰した。途中、例の怪物に接触しそうな状況もあったが、なぜか怪物の方が避けるように収縮し、事なきを得た。しかし、そのようなスペクタクルがあった事を、「ＤＯＲＩＩ」自身も、船上で浮上を待つ吉村たちも知る術は無かった。

海面に浮上した「ＤＯＲＩＩ」は空気を取り込む事で機能する、空気電池が動作することで目覚めた。最低限の機能しか覚醒させなかったが、内蔵されているアンテナを延ばし、ビーコンを発信する程度の作業には十分すぎるほどだった。不慮の事故による沈下を防ぐための浮力体が２酸化炭素ガスによって膨張し、アンテナ基部が水面上に露出すると、直ちにビーコンを発信し始めた。

「ビーコン受信、『ＤＯＲＩＩ』浮上しました。」

先刻から「ＤＯＲＩＩ」のビーコン受信装置にかじりついていた田中が叫んだ。今にも泣き出しそうに顔をくしゃくしゃにしている。

「おお、無事だったか。」吉村もさすがに安堵の表情を浮かべていた。
「吉村さん、それじゃ早速回収班を向かわせます。」
「ありがとうございます、船長。宜しくお願いします。」
レーダーで位置を特定した後、回収班は「ＤＯＲＩＩ」浮上点に向かった。重い「ＤＯＲＩＩ」をゾディアックに回収するのは無理なため、２隻のゾディアックで曳航して「みこもと」の揚収ベイに引き入れ、走行クレーンでデッキ上に引き上げられた。
デッキへの収納をじりじりしながら待っていた田中は、固縛装置の締め付けを待たずに「ＤＯＲＩＩ」によじ上り、耐圧構造の外部電源接続缶を開き、外部電源を接続した。さらに、非接触式データー端末接続点にラップトップを接続、「ＤＯＲＩＩ」の覚醒作業に入った。
「いい子だから、無事に起きてくれ。」祈るような言葉をつぶやきながら田中はスリープモードの「ＤＯＲＩＩ」ＡＩプロセッサーを覚醒させた。
「ＤＯＲＩＩ」の覚醒に問題は無かった。何事も無かったかのように、覚醒後のルーチン点検結果を田中が接続したラップトップに吐き出し、ワイアレス端末を起動して、待機モードに入った。田中はＴＣＰ／ＩＰ接続が確立したのを確認して、制御室に戻り、画像データーの回収に入った。
１４コマ撮影された画像は圧縮されずにビットデーターの形でメモリーに取り込まれていた。たった１４コマにも関わらず、３００Ｍｂを超えるデーター転送はＵＷＢを使った高速無線伝送でもそれなりに時間のかかる作業だったが、解像度とのバーターなら価値があった。
「吉村主任、ビンゴです。「ＤＯＲＩＩ」の撮影した画像に潜水艦の一部らしきものが写ってます。」
「ＤＯＲＩＩ」浮上から２時間後、画像解析を行っていた田中が、制御室に現れた。

「うん、良くやった。早速、米海軍の連中に見てもらおう。」
「はい。とりあえず、制御室の大スクリーンに出せるよう、データー転送はすでに行っています。ただし、一次解析ですから、あまり詳細な部分までは判りません。詳細な解析はすでに長野さんが始めています。」

１４コマの画像のうち、直感的に何かの物体が写っていると判るのは６コマあった。吉村に呼び出された例の二人を除く米海軍オブザーバーたちは、一次処理されただけの、その画像を見ただけで、それが潜水艦の一部であることを判別、確認した。しかし、実際にその艦を見ていない彼らにそれ以上の事を期待するのは無理だった。
「吉村主任、解析結果が出ました。ご覧願えますか。」長野からそう連絡があったのは深海探査艇「かいえん」艇長、長崎と捜索法についての検討を行っていた時だった。
深海探査艇「かいえん」は「しんかい６５００」で培われた日本の深海探査艇技術を究極のレベルまで発展させた結晶とも言えるものだった。主要な要目は、

全長　１３ｍ
全幅　１．８ｍ
全高　３．１ｍ
最大潜入深度　１万３０００ｍ
安全潜入深度　１万９００ｍ
最大前進速度　３．５Ｋｔ
安全潜入速度　１１０ｍ毎分
動力装置　純水封入型高効率交流水中電動機　４基　軸出力合計８．４ｋＷ
推進装置　全周回転式可変ピッチ・ダクテッド・プロペラ　４基
電力装置　リチウム銀イオン複合型蓄電池集積体　２基　９６Ｖ／４５００Ａｈ

同　　リチウム触媒燃料改質型燃料電池集積体　２基　出力６ｋＷ
同　　高効率交流インバーター　１基　出力　１２ＫＶＡ
観測装置　１６関節ＡＩ制御マニピュレーター　２基
同　　高解像度カラーＣＣＤビデオカメラ　３基
同　　２ｋＷ　フラッドライト　３基
青緑レーザー／音響複合型多目的水中データー通信装置　一式
その他観測装置は計４カ所のベイにミッション別に搭載。
潜行可能時間　深度１万ｍにおいて７０分

というものであったが、表に現れない部分に用いられた新技術やノウハウはまさに最先端技術の結晶と言えるものだった。例えば、１万メートルの深海の水圧に耐える浮力体や４基の推進機を操縦者の意思に従って常に最適化するＡＩ技術など、深海底での安全性と機動力を高いレベルで統合するために用いられた高度な技術により、１万メートルの水深でも１００メートルでのそれと同じ操作性を保つ事に成功していた。

潜水艦発見（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

接触（前書き）

第１６話です。明日以降週末以外、時間が取れなくなるかも知れません。更新が遅れるかもしれませんので、先にお断り致して起きます。申し訳ありません。それでは続きをどうぞ。

接触

「お、早いな。すぐ上がる。それじゃ長崎さん、後よろしくお願いします。」
吉村が観測室に上がるのを待って。長野はメインスクリーンに2次解析の終了した6枚の映像を分割表示させた。
「最初の3枚には規則的に交差する線が写っています。米海軍オブザーバーによれば、遮音タイルの継ぎ目ではないか、という事です。また5枚目の写真を見てください。はっきりしませんが、何か構造物のように見えます。コントラストを強調し、輪郭線だけを抜き出したものがこれです」長野は5枚目の写真を拡大し、それに輪郭線を重ねた。
声を上げたのは米海軍の連中だった。チャンが同時通訳をする。
「うぁ、これ、非公式に出た想像図のセイルそのものじゃないか。」
二世代ほど前のロシア潜水艦のそれに似た、流線型のセイルを斜め後ろから写したらこう写るだろう、という形がそこには現れていた。
「では、最後に決定的と思われる写真です。」
長野が表示した写真は最初の6枚とは違うものだった。
「これは番号で言えば12枚目になります。よく見てもらうと判りますが、中央左下に何か黄色いものが小さく見えます。拡大したものがこれです。」
黄色のしみのような部分を拡大したものがスクリーンに映し出されると、観測室に集合した面々からどよめきが起きた。それは、黄色の円の中に書かれた赤い文字だった。拡大しているため、文字の輪郭がぼやけ、判読は難しいが、それが何かの注意書きであろうことは、誰の目にも明らかだった。
「判った。長野君ご苦労さんでした。チャンさん、米海軍のメンバーもこれに疑問は無いと思いますが？」
「はい。彼らももう間違いない、と言っています。至急、『ニミッ

ツ』に連絡して、この海域に艦艇を集結させたいそうです。」
「了解した。どれでも可能な手段で連絡してもらってかまわないと伝えてください。ただし、『かいえん』を使う場合の指揮権は譲らないと伝えてください。その他要望があればできる限りの協力は惜しみません。」
そういいながら、ブリッジ直通電話で船長を呼び出した。
「吉村さん、写真はどうでした。」
「船長、たびたびすみません。米軍の連中が通信機を使用したいそうです。どれでも彼らの希望するものを使わせてやっていただけますか。写真は決定的でした。」
「そりゃ、大変だ・・・通信機は問題ないです。短波でもインマルでも好きなものを使って結構です。」
「すみません。すぐに行かせます。」
吉村の言葉が終わらないうちに、二人の米海軍オブザーバーは駆け足でブリッジに向かった。
「さてと、米軍はこれで良いとして、問題は『かいえん』を潜らせて何をするのかだが・・・」
「基本的に言えば、生存者の確認、生存者が確認できれば通信の確保、この二つが最優先だろうな。救助の具体的手段は状況が把握できてから、ということだろう。」
潜行準備作業をペアの一の瀬に任せて、観測室に顔を出していた「かいえん」艇長の長崎が自らの作業の優先順位の確認も兼ねて発言した。
「しかし、吉村さん、この潜水艦が我々が遭遇したのと同じ状況だとしたら、一般的な通信手段は全滅、ってこともありえますよ。」
「ああ、津田君の言う通りだろうな。さりとて、3千mの海底で、スパナで船体を叩くわけにもゆかん。頭の痛い状況だな、こりゃ。」
「いや、そのスパナで叩くっての、できるかも知れんぞ。誰か艇まで行って、一の瀬を呼んで来てくれんかな。」
長崎に呼ばれた一の瀬は、自分がなんで呼ばれたのか判らないまま

観測室に現れた。
「おい、一の瀬、お前、マニピュレーターでサンバのリズム叩けるって自慢してたよなぁ。それ、水深３千ｍでもできるか？」
「い、いきなり何ですか、長崎さん。あれは例えの話ですよ。まぁ、出来ないって訳でもないですけど・・・・そ、その３千ｍって何の話です？」
「いやな、なんで『かいえん』が潜るか判ってるだろ。で、多分、他の通信手段は死んでるだろうから、船体をぶん殴って、生存者の確認をしようってわけだ。できるよな？」
「ああ、そういう事ですか。水深３千で、しっかり音が伝わるほど船体を叩こうってなら、かなり重いものでないとだめですから、サンバのリズムは無理だと・・・」
「バカ、通信できりゃ良いんだから、サンバのリズムは忘れろ。ともかく、船体を何か重いものでぶん殴るのは可能だよな。」
「ああ、そりゃ可能です。『かいえん』のマニピュレーターは空気中でも２０Ｋｇ程度の重量を扱えますから、水中ならそれで船体叩くのはできますよ。」
「おし、ほんじゃ、工具バスケットに大モンキー突っ込んどけ。それでぶっ叩く。」
「ハンマーの方が良いんじゃ・・・・」
「馬鹿やろ、潜水艦殴るのはモンキーって決まってるんだ。おまい、映画も見てないのかよ。」
「・・・・・・」
「まぁ、通信手段は確保できたわけだが・・・・・」吉村が吹き出しそうになるのをこらえながら先を続けた。
「さて、高粘度海水域だが、ちょうどいい、長崎さんどう思います。『かいえん』は潜入できると思いますか。」
「そりゃ、『ＤＯＲＩＩ』が行けたんだから、『かいえん』だって行けるだろ。それに『ＤＯＲＩＩ』は上昇流の中を下ったが、今度は高粘度水域の辺縁を目的深度まで下って、横移動で行って見よう

と思う。高粘度域に入ったところで、浮力調整さえ決まれば、あとは横移動のエネルギーだけだし、浮力調整もこっちは『ＤＯＲＩＩ』より大きいから、何とかなると思う。距離的には近いしな。」
「ま、長崎さんがそういうなら、お任せします。ところで、長野君、『かいえん』との通信はどうするのかね。」
「ええ、青緑レーザーでは自殺行為でしょうから、音響だけになりますが、それだと不連続面を越えられない。で、考えたのですが、『ＤＯＲＩＩ』が曳いたケーブルがありましたよね。あれにトランスデューサーを付けて不連続面の下へ下ろしたらどうかと。『ＤＯＲＩＩ』のときの音響観測では、内部に別の不連続面は無いようですから、データーは無理でも、音声通信は行けるんじゃないかと思うのですが。」
「お、そりゃ良いアイディアだ。早速用意できるかね。」
「あ、すでに準備はしておきました。『金魚』に使っているトランスデューサーの予備がありましたから、それにウェイトを抱かせて、できれば不連続面から１００ｍ程度は下まで行きたいと・・・」
「なんと、いつもの長野と違って随分手回しが良いじゃないか。それじゃ、先にそれを下ろそう。サイドデッキのクレーンで扱える重さだろ。」
「はい。１００Ｋｇ程度ですから十分扱えます。巻き上げも『ＤＯＲＩＩ』のラインローラーが空いてますから、それを使います。」
「うん、すぐ掛かってくれ。それじゃ長崎さん、『かいえん』お願いします。準備でき次第、すぐに潜行作業に入っていただいてかまいません。ただし安全だけには十二分に注意を願います。」
「了解。一の瀬行くぞ。ほれ。」
長崎はまだ状況が飲み込めていない様子の一の瀬を引き連れ、風を巻いて「かいえん」に向かった。
「さてと、『かいえん』は長崎御大に任せるとして、米軍の方はどうなんだね。チャンさん。」
「現在、『ニミッツ』基幹の第５７任務群が集結中です。ただし空

母は航空機運用のため、走り回る必要があるので、こちらには接近しないとのことです。群司令官は『ブルーリッジ』に座乗してこちらに向かいつつあります。早期警戒機と駆逐艦で海域を半径１００海里に渉って閉鎖するそうです。『みこもと』の作業に一切の邪魔はさせない、と司令官自らが命じたそうです。」

「なんとも、ありがたいことで・・・いつでもそうなら感謝もするんだが・・・・・まぁ、皮肉は置いといて、本船に通信機材を設置するなら、私の責任で船長に許可をとります。自由に設置してもらってかまいません。ただし、『かいえん』を運用するとなると、割ける人手は皆無と言っていいので、要員は米軍の方から派遣願いたい。１０名程度なら研究員部屋が空いてるんで、そこに受け入れられる。『かいえん』への便乗は第二回潜水以降受け入れます。初回は未知の要素が多すぎる。慣れた二人に道を開いてもらってからでも遅くないでしょう。」

「米軍側はそれで了解しています。あと、『かいえん』のペイロードについて質問が来てます。どうも第2回潜水以降、何らかの機器を持ち込みたいようです。」

「『かいえん』のペイロードは公表されたものが、掛け値なしの数値です。そのように伝えてください。それから持ち込む機器が爆発物などを含むような場合や、電力の消費が大きい場合などは事前に打ち合わせしたいですね。」

「了解しました。そう伝えます。米海軍からは、現在の進捗状況に大変満足しており、感謝に堪えない、という謝辞を戴いておりますので、ご報告しておきます。」

「ああ、それは素直に受け取っておきましょう。それでは『かいえん』の支援体制に入りましょう。」

接触（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

「かいえん」（前書き）

第17話です。
深海潜水艇「かいえん」が活躍します。

「かいえん」

「かいえん」潜水作業支援のため、「みこもと」はダイナミック・ポジショニングに移行し、ＧＰＳデーターに基づいて、船を地球上の一点に数メートルの誤差で停止させた。デッキでは通信用のトランスデューサーを降ろす作業と、「かいえん」の進水作業が平行して行われているため、戦場のような有様だった。ほぼ潜水艦の直上と考えられる位置の上流側で停止している「みこもと」から３千ｍにも及ぶケーブルを繰り出し、ほぼ潜水艦の直上にトランスデューサーを位置させるには、緻密な計算と勘の高度な統合が必要だった。このような作業に山下船長は最適任だった。長年のサルベージ・ボート勤務が培った経験に勝るものは多くない。

「長野君、位置はどうかね。微調整必要かね。」

「あ、船長、いえ、どんぴしゃりです。このままなら潜水艦のセイルに届きますよ。」

「そりゃ結構。それじゃこのまま続行でいいですね。」

「はい、お願いします。」

一方の「かいえん」は船尾ベイからガントリー・クレーンによって進水していた。電池の節約のため、潜入開始点である、潜水艦位置至近の境界面付近まではゾディアックに曳航されて向かっていた。切り離し式の浮力体と余分のバラストを外部に搭載したため抵抗が増え、曳航はゆっくりしたものにならざるを得なかった。しかし艇の内部では、そののんびりした曳航風景とは裏腹に、忙しく機器チェックを行う男たちがいた。

「艇長、動力系全て正常値です。動作試験良好。」

「おう、了解。通信系、音響、無線、問題なし。現時点ではデーター系も稼働できる。伝送速度９６００ｂｐｓまではＢＥＲ許容値以下。あとは潜ってからだな。ん、なんだ、一の瀬、顔色悪いぞ。」

「いえ、なんか船酔いしたみたいで・・・こんなに長く曳航された

のってあまり無いですから・・・」
「潜入するまでの辛抱だ。ちょっと休め。あと１０分くらいのもんだろ。」
「ええ、まぁ大丈夫だと・・・・ウプッ・・・」
「あーあ、しようがねぇなぁ。こんな処で吐くんじゃねぇぞ。ハッチから頭出してろ。」
２０分後、潜入開始点に到着したときには、ハッチから半身出した、死にかけたマグロが一匹・・・・・
「一の瀬、潜るぞ。頭引っ込めて、ハッチ閉めろ。」
「りょ、了解。ウプッ・・・ハッチ閉鎖、潜入用意よし。」
「潜入開始。深度１０で浸水チェック。」
「了解、深度１０で中性浮力、浸水チェック。」
「深度１０、中性浮力よし、浸水なし。」
「潜入続行。１１００まで一気に下るぞ。１１００で各機能チェック。」
「了解。」
「ん、なんだ、潜入と同時に顔色がよくなってやがる。」
「ああ、やっぱり水中の方が良いなぁ。揺れない船ってのは作れないもんですかねぇ。」
「ったく、しょうがねぇやつだなぁ、お前は、ほんとに。」
艇内の騒ぎとは関係なく、「かいえん」は潜入を続けた。
「ただいま１０００、中性浮力とします。」
「了解、１１００で沈下停止、機能チェック。水の出し入れだけで沈下止めてみせろよ。スラスターは使わんからな。」
「任せてください。１０９０、１１００沈降速度ゼロ。」
「よくやった。電力系チェック。」
「充電９７％、燃料電池出力１０％、電力系異常なし。」
「スラスター４基異常なし、推進系チェック。」
「水密チェック異常なし、艇環境は問題ありません。」
「おう、それじゃ通信系チェック。音声は継続して通信ができてる

から省略、データー系で本船と繋いでみてくれ。」
「了解。本船サーバーに接続、異常なし。」
「よし。それじゃ観測系チェック。」
「マニピュレーター動力チェック、動作正常。ＣＣＤカメラモニターに出します。フラッドライト点灯。」
「うん、問題ない。それじゃ目的深度まで一気に行くぞ。」
「了解。低光量カメラの映像だけ、モニターに出しておきます。」

「かいえん」は順調に潜入を続け、海底から５ｍの深度で垂下させておいたテザーが海底に接触、下降速度を相殺するために自動制御になっていた推進装置が動作した。
下降速度がゼロとなった時点でテザーを切り離し、中性浮力に再度調整した「かいえん」は横移動を開始した。
「さーて、高粘度海水域とやらに突っ込むぞ。比重が違うらしいから、浮力調整は気合い入れていけよ。」
「了解。一発で決めてみせますよ。」
「かいえん」は１．５ノットの速度で高粘度海水域に進入した。急激な粘性抵抗の増加でスラスターが一瞬過負荷になったが、即座に自動制御により適切な負荷状態に調整された。浮力調整は問題なかった。海水粘度が高いため、艇は緩慢な動きしか出来なかったからだ。しかし中性浮力とすることもまた難しかった。長崎は動きが緩慢であることから、厳密な中性浮力を求めることなく、前進を開始した。２５分後、それはフラッドライトの中に現れた。
「一の瀬、モニター見て見ろ。」
「は、はい、あ、見つけましたね。」
「おお、見つけたよ。さてと、バスケットのモンキースパナは健在か？」
「すぐ準備します。」
一の瀬は、バスケットのモンキースパナをマニピュレーターで掴み、取り出した。

「それじゃ、後部ハッチ近くに持って行くから叩いて見ろ。」
長崎は後部ハッチへ接近すると、マニピュレーターの届く距離を保って艇を静止させた。
「ほれ、叩け。」
一の瀬は器用にマニピュレーターを操り、ハッチを叩き始めた。最新型潜水艦だけあって、遮音がしっかりしているため、海中ではあまり大きな音に聞こえない。15～6回叩いた頃だった。
「艇長、何か聞こえませんか？」
「おう、ちょっと待て、水中マイクを切り替える。」
水中マイクを超音波通信用から、海中音響採取用のものに切り替えると、今度ははっきり聞こえた。
「返信して見ろ。」
「了解」
相手の音響が止むのをまって、また叩くと、今度はすぐに返答があった。
長崎と一の瀬は、英文モールスで簡単な質問を叩いた。短点は叩いた後スパナをハッチに押しつける。長音はすぐに離す事で可能だ。しかし、ゆっくりしたモールスなので、あまり複雑な質問はできない。それでもかなりな事が判明した。
それによれば、
潜水艦内は問題ない。独立回路の艦内空気循環系は正常に働いている。
動力は原子炉がスクラムした。現在、再臨界前のルーチン点検中。
配電盤がほとんど全て焼損しているため、遠隔操作ができない。
電力は非常用バッテリーで賄っているが、もうすぐ限界になる。
乗員は負傷者数名の他は無事。空気は原子炉が動けば問題なくなる。
動力装置はメインの電動機が焼損したかも知れない。
メインタンクのベント弁が故障している。
現在水中電話を復旧させるべく努力中。
などが判明した。すでに潜水艦近くまで下ろすことに成功していた

「ドリイ」のケーブルに繋がった「金魚」を用いて、この情報を「みこもと」に送ると、米海軍のメンバーは大騒ぎとなった。すでに遭難してから2週間近くが経過しているにもかかわらず、全員が無事という知らせなのだから、無理もない事だった。

「かいえん」は一旦この深度を離れ浮上することとなった。次の潜水には米海軍の要員が同行するためだ。高粘度海水の中をゆっくり浮上した「かいえん」は、不連続面を通過すると、通常の浮上速度で海面に向かった。

「かいえん」（後書き）

多分、日曜日に次の投稿が可能だと思いますが、来週はちょっと本業の都合が判りません。火曜日は確定ですが、それ以外の日がどうなるのか、まだ不明です。すみません。来週1週間、投稿不可になるやもしれません。

宜しくお願いします。

ご意見ご感想をお待ちしています。

プリオン（前書き）

第１８話です。

プリオン

その頃、「みこもと」の生物学実験室では、「みずなぎ」の持ち帰ったサンプル海水の分析が進んでいた。
「村木さん、これ見て貰えますか？」
「何か判りましたか、望月さん。」
「ええ、この海水サンプルですが、こりゃポタージュ・スープですよ。中はタンパクで一杯です。このまま火を通せば、塩辛いですが美味いかも知れませんよ。」
「ってことは、タンパク分子塩水溶液って感じですか？なんか醤油か醤醢みたいだな。」
「当然ですが、この溶液に大出力のレーザー通せば、経路のタンパクは熱で変成して白濁するわけです。で、そのタンパクなんですが、こういうものです。」
望月は電子顕微鏡で海水サンプルを見た映像をモニターに出した。
「ありゃ、これウイルスですか？」
「いえ、遺伝情報は持ってませんから、プリオンというのが正しいでしょう。それよりも、こちらの結果が面白いですよ。実は電撃の由来を調べるための実験だったのですがね。」
望月はさきほど終了した実験映像をモニターに出した。
「これ、プレパラート上に海水サンプルを置き、両端に約１Ｖの電圧を掛けた結果です。」
「こりゃまた、きれいに整列しましたなぁ。」
「ええ、電圧を掛けると、このプリオンみたいなものは、整列します。一種の液晶とでも言いますか・・・その上で、画面の右上の表示を見て欲しいんですが、整列前は普通の海水電気伝導度なんですが、整列した後、急激に伝導度が下がり、逆に起電していることが判りますか？」
画面右上の数字が整列と同時にマイナスになっていた。つまり、こ

のプリオン類似タンパクは、整列すると発電作用がある事を示唆している実験結果だった。
「望月さん、こりゃ、普通の生物学者じゃ手が出ませんよ。分子生物学で扱う分野です。」
「そうだと思います。ともかく、ここで出来ることには限界があります。研究室へ帰って厳密な条件で調べないと本当のことは判らないと思います。」
「僕の方もどうもこのサンプルは集合体として動くように思います。染色剤で着色してサンプルを一般の海水に入れると、凝集するんです。何に反応しているのかまではまだ判りませんが。」
「整列すると起電する事に何か関連がありそうな気がしますね。」
「ともかく、ここでは限られたことしか判りません。今、潜水艦救難に必要なのはどんな刺激に反応して放電するかが優先されると思います。限られたサンプルしか有りませんので、深く追求は出来ませんが、ともかく刺激を与えて見ましょう。」
この実験の結果、このプリオン類似タンパクは、タンパク凝固を発生させる現象、つまり熱に反応して凝集する事が判明し、電位差を与えると整列し起電する事も判った。また、この時、凝集範囲内に導電性の物質が有った場合、そこで発生する電位差により整列が発生し、現在海中にあるような膨大な量では、整列の完成と同時に強烈な起電力が起き、それによって、瞬間的な電撃が発生することも判明した。
このことから潜水艦が電撃を受けた原因が特定できた。つまり原子炉温排水により、凝集が発生、艦外に露出した金属部分による電位差で整列した事で電撃を受けたのである。これが原因ならば、潜水艦は2次冷却水の流量を増やして温度をタンパク凝結温度以下にする事で、このプリオン類似タンパクの凝集行動を引き起こさずに動力を得られる事になる。しかし、これで潜水艦の脱出は可能になるかも知れないが、「みずなぎ」が受けた電撃は説明不可能だった。タンパク凝集体が自律行動を起こしたように見える事は説明できな

い。
それでも、この実験結果は貴重であることに変わりは無かった。二人は吉村に実験結果を報告した。
「それじゃぁ、この海水はスープみたいなもんというわけかい。」
「そういうことになります。ただし、電撃を引き起こせるスープですが。」
「なんか物騒なスープだな。あまり食卓では出会いたくないなぁ・・・」
「そんなことより、早く米軍に知らせなくて良いのですか？」
「おお、そうだ。望月君、ちょっと呼んできてくれ。」
米海軍の技術士官はすぐに顔を出した。吉村は実験結果をかいつまんで説明し、温排水についても排出温度を摂氏６０度以下、できれば５０度以下に保つようにすることで凝集を回避できる事も説明した。実験映像と説明を聞いた米海軍士官は信じられない、という顔をしていたが、「みずなぎ」に加えられた電撃の結果を実際にみているからには、信じるほか無かった。何より、電力さえ復旧すれば、自力で状況を脱出出来る可能性があるのだ。すでに潜水艦乗員の生存は「かいえん」からの連絡で判っていた。しかし、この深度では救出の方法が無いのだ。ＤＳＲＶは安全潜行深度９００ｍ程度、無理しても１２００ｍより深いところでの救出活動は不可能だった。それゆえ、潜水艦が自力で脱出出来る可能性があることは、大きな朗報だった。
ほどなく、「金魚」の複合トランスデューサーと「ドリイ」の制御ケーブルを用いて高粘度海水ドーム下に下ろした簡易音響情報収集装置が、米海軍使用の海中通話装置、今も昔も、変わらず「ガートルード」と呼ばれる装置の発する変調波と思しき信号を捉えた、とシステム担当の長野から連絡があった。
米海軍技術士官が持ち込んでいた「水中通話装置」の送受波端に「ドリイ」制御ケーブルのうち、音響信号伝送用の４本の線を繋ぎ込むと、通話装置のスピーカーから、高域と低域の双方を酷くカット

した（それゆえガートルードと呼ばれる。）音声が聞こえた。
米海軍士官６名は全員が「ドリイ」制御室に集合して、潜水艦との通信の成功を喜んだ。通信によれば、すでに潜水艦はスクラムした原子炉の再起動ルーチンに入っており、数十分で原子炉を臨界状態にできるようであった。米海軍技術士官は、望月と村木の実験結果を潜水艦に知らせ、２次冷却水排水温度を５０度以下に保つよう、注意を促した。潜水艦側は、それを了解し、発電開始後、２次冷却水流量を増加させ、熱排水温度を低く抑える対策を検討すると返信してきた。一般に軽水原子炉は出力調整が簡単ではないため、ほぼこの対策以外、有効な対策はないと言う意見で、「みこもと」側も潜水艦側も一致していた。
その他、現在位置の海水粘度が異常である事、その原因が異常なほどに凝集したプリオン類似タンパクによるものであること、などの情報が伝えられ、また、海上には第７艦隊の空母任務群が待機している事、負傷者、疾病者などは、浮上後空母への緊急移送が可能であること、この回線はその他の通信が復旧するまで、２４時間体勢でモニターする事などを伝達して、最初の交信は終わった。

異変（前書き）

仕事出発前に時間ができましたので第１９話投稿します。
今週末まではどうもインターネット環境はありそうですので、時間
でき次第投稿しようと思います。
今回は少し長めにしてみました。

異変

交信を終えた数時間後、潜水艦は浮上した。その頃には空母とその護衛を除く、ほとんどの艦艇がソナーで捉えた潜水艦をトレースしており、その浮上点付近に蝟集していた。「みこもと」はその蝟集した艦艇の中心部にあった。潜水艦の動力装置が異常をきたしていたため、タンクブローのみで浮上した事で、必然的に「みこもと」至近に浮上する事になったからであった。

「いや、何とも壮観ですなぁ。これだけの米艦艇に囲まれるってのは、あまり有ることじゃないですからね。」

船長の山下はブリッジで潜水艦の浮上を見守っている吉村に言った。

「ええ、全く同感ですねぇ。ちょっとした観艦式なみの数ですから・・・」

現在、「みこもと」は事後作業の真っ最中である。使用した潜水艇、観測機器の一次メンテ作業、ケーブル等の巻き取り、などの片付け作業と、生物学的に重要な意味を持つと思われる、高粘度海水および浮遊生物の調査を、主に音響観測機材を使って行っていた。潜水艦はセイルだけを水面に出して「みこもと」から３００ｍほどの処に浮上している。

その時だった。３隻の駆逐艦の後部甲板がにわかに慌ただしくなり、数分後、３機のヘリコプターが離艦したのだ。そしてその直後、「みこもと」船橋のＶＨＦ通信機から米軍艦艇からの通信が流れ出した。

「こちらは第７艦隊駆逐艦「ステザム」、現在使用中の音響観測装置の即時停止を要請する。」

山下船長がこれに応答した。

「こちらは観測船「みこもと」船長、山下です。要請は了解。差し支えなければ理由をお聞かせ願いたい。」

「こちらは駆逐艦「ステザム」艦長、ダラク中佐。「ニミッツ」搭

載機がこの海域で潜水艦を探知した。現在、当艦を含む3隻が対策担任艦に指定された。貴船のソナー発信が探知の障害になり得るため、停止を要請する。」
「了解した。直ちに発信停止措置を執る。以上。」
「感謝する。「ステザム」通信終わり。」
「吉村さん、聞いたとおりです。一時的なものとは思いますが、音響観測の停止をお願いします。」
すでに吉村は音響観測室への電話を繋いでいた。
「黒岩、音響観測即座に中止だ。他国の潜水艦が居るらしい。ああ、そうだ。宜しく頼む。」
1分と掛からず、「みこもと」からの音響発信は停止した。しかし、水中聴音機は生きていた。
船橋で船長と吉村が米艦の慌ただしい動きを見守っていたとき、突然船橋の電話が鳴った。
「はい、ブリッジ。吉村さん、音響観測室からです。」
「すみません、船長。吉村だ、どうした？」
「黒岩です。本船から方位２２０度方向、えらい騒々しい潜水艦が居ます。距離は「金魚」流さないと判りませんが、音響レベルの変化からいって接近しています。深さは現在の温度跳躍層より上ですから、２５０m前後と思います。」
「了解。一応米軍には連絡しておく。」
「船長、方位２２０度方向に潜水艦発見。距離は不明、深度およそ２５０m。先ほどの駆逐艦に連絡願います。」
「了解。駆逐艦「ステザム」、こちら「みこもと」オーヴァー」
「こちら「ステザム」何かあったか、「みこもと」」
「こちら「みこもと」船長。本船水中聴音機にて、潜水艦と思われる目標探知。方位本船から２２０度、距離不明、深度おおよそ２５０m。」
「「ステザム」了解。ご協力に感謝する。以上。」
「「みこもと」以上。」

すでに離陸していたヘリが「みこもと」から２２０度方向へ集まり始めていた。
船橋には米海軍からの派遣士官も登ってきていた。
「吉村サン、どうしました。」
「ああ、「ニミッツ」の搭載機が潜水艦を発見した。「ステザム」以下３隻が対策担任に指定され、動き始めてる。本船水中聴音機でも捕捉した。２２０度深度２５０だ。」
「ああ、それで。しかし本船聴音機なかなか優秀デスね。」
「そりゃ、海中生物や海底変動の音を聞けるように作られてるんだ。騒々しい潜水艦なんぞ、それから比べたら、楽隊が来たようなもんだ。」
「それじゃワタシの仕事無くなるから、困りマス。」
「別にうちの水中聴音機は隠しては居ないよ。全部市販部品で構成されてるしね。」
その時、また船橋の電話が鳴った。
「ブリッジ。吉村さん、音響観測室からです。」
「船長すみません。吉村だ。何か判ったのか？」
「黒岩です。どうも潜水艦がもう１隻居るようなんですが。」
「なんだ、もう１隻ってのは？別の音響が聞こえるって事なのか。」
「ええ、３１０度方向から別の潜水艦らしき音が聞こえます。」
「もう少し正確に判らんか？」
「固定聴音機じゃこれが精一杯ですね。「金魚」を流せば、もう少し判ると思いますが。」
「パッシブだけなら問題にならんと思うから、出してみるか。」
「了解。山崎を後部に向かわせます。一応そちらから船の方への依頼お願いします。」
「判った。船長、忙しくして申し訳ありませんが、「金魚」を出したいのですが。」
「ああ、そうくると思ってました。もう作業員は他の作業を終わってますから使ってもらって構いませんよ。こちらからチョッサーに

連絡しておきます。」
「すみません。なんか黒岩がもう1隻潜水艦が居るようだと言うんですよ。」
「ああ、そりゃ本当なら大変だ。作業急がせましょう。」
「お願いします。ジョーブ中佐、艦隊への連絡をお願いできますか。」
「判りました。「みこもと」の探知レベルは思ったより優秀なんで艦隊も助かると思いマス。」
「それじゃお願いします。私は電話に張り付いて観測室と繋いでおきますから。」
船尾からケーブルに繋がれた「金魚」を下ろす作業は手慣れた作業員総出だった事もあり、あっという間に終了した。
「黒岩、どうだ、何か聞こえるか？」
「ええ、やっぱり潜水艦だと思います。方位３１１度、距離は余り精度良くないですが、８海里＋／－０．５海里、深さ３１２ｍです。かなり静かですね、こっちは。」
「判った。中佐、方位３１１度、距離約８海里、深さ３１２ｍに潜水艦らしき音響。」
「了解。」
中佐が艦隊に連絡をすると、先ほど離陸した３機のうちの１機が３１１度方向に向かった。２２０度の目標はすでに捕捉しているらしかった。
「中佐、一体どこの潜水艦だろう？」吉村はジョーブ中佐に聞いた。
「２２０度のは多分、中国でしょう。相当に騒がしいようですから。３１１度のはロシアの新鋭原潜じゃないかと思いマス。」
「なるほどねぇ・・・第７艦隊の艦艇総ざらえだもの、興味はあるだろうわな。しかし、例の潜水艦はもう浮上してるし、動力は動いてないから、潜水艦じゃデーターは取れませんがな。ん？まてよ、するとこの船が参加しているのを知られない方が良いのか。」
「そうですネ。「みこもと」の能力は公開されてますから、第７艦

隊がそんな深いところで、何シテルって事になりますね。」
「う～む・・・」
「音響観測室か、黒岩頼む。」
「黒岩です。」
「おい、この船はかなり静かだったよな。特に「金魚曳き」の速度だと。」
「ええ、航走音がうるさいと観測の邪魔になりますから。」
「仮に相手が潜水艦だった場合、どのくらいの距離で探知できる？」
「さぁ、潜水艦の機器には詳しくないんで、よく判りませんが、海自の知り合いは1海里くらいかな、と言ってましたが。」
「おう、ありがと。」
「ジョーブ中佐、海自の潜水艦で1海里程度の探知距離らしいですが、どうなんでしょうね。」
「オオ、ＪＭＳＤＦが1海里なら、今探知された潜水艦は、船の真下でも「みこもと」を探知できないと思いマス。」
「それなら少しは安心できそうだな。」
その時だった。黒岩が船内放送で吉村を呼び出した。
「吉村主任、至急音響観測室へ。」
まだ放送が終わらないうちに吉村はブリッジを飛び出した。
音響観測室では黒岩が真剣な顔でヘッドセットに全感覚を集中していた。
「どうした。何があった黒岩。」
「ああ、吉村さん、実は２２０度の潜水艦の航走音が消えました。弱いドーンという音の直後、推進器が止まったみたいです。騒々しいほどの音をまき散らしていたんですが、突然消えました。」
「消えた？！、消えたってのはどういうことだ？」
「推進器の回転が止まった事は確実です。それと同時に多分原子炉への冷却水循環ポンプも止まったと思います。つまり、突然、動力音が消えたって事です。」
「と言うことは、潜水艦はどうなるんだ？」

「どういう浮力状態だったかによりますね。沈むか、浮くかのどちらかです。動力を失ったように見えますので、流体力学的平衡は失われていると思われますから。」
「それ、聴音で判るか。」
「今聞いてますが、もうほとんど音がしません。”金魚”曳いてですから、かなり難しいですね。」
突然、音響モニターから、ゴーンという、軍用アクティブソナー特有の低周波音が鳴り響いた。ヘッドセットを外して肩に掛けていた黒岩は胸をなで下ろした。ヘッドセットを耳に付けていたら、ただでは済まなかったろう。
「アクティブ・ピンです。」
「米海軍も動力音が消えたのはモニターしていたんだな。上に行ってジョーブ中佐と話して来る。何かあったら上に連絡くれ。」
「了解。」
吉村はまたブリッジに引き返した。
「中佐、今、音響観測室で誰かがアクティブ・ピンを打ったのを聞きましたが、何か情報はありますか？」
「吉村サン、こちらには何も知らされていませんヨ。」
「実は２２０度方向の潜水艦の動力音が突然消えまして、それで私が呼ばれたのですが、推進音と同時に冷却水ポンプの音も消えまして、”金魚”の聴音装置でも突然消えた状態なりました。」
「ナルホド。それでアクティブ・ピンを打ったわけですか。この辺は普通のＶＨＦではマズイですネ。隊内通信で聞いてみましょう。」
中佐はすでにブリッジに仮設置済みであった、秘話装置付きの軍用通信機端末に向かい、英語で交信を始めた。後に判明したことであったが、この時、ロシアのものと思われる航空機が周囲１００海里の閉鎖圏内に接近していることが「ミニッツ」のＡＥＷから報告されており、ジョーブ中佐はすでにこの情報を知らされていたため、軍用通信端末を用いて交信したのだった。

異変（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています。

圧懐（前書き）

まだインターネット環境がありますので更新。
来週は本当に判りません。運が良ければ衛星経由のインターネット環境があるかも・・・
それでは第２０話です。

圧懐

交信の結果によれば、やはり米軍側もヘリのディッピング聴音とＡ－３対潜機からのソノブイにより、潜水艦推進音の消失に気づいており、その為対潜艦からアクティブ発信を行ったのだった。すでに最初のアクティブ・ピンから数えて３回発信されており、それによれば、潜水艦は動力を失って、かなり急速に沈降している、ということであった。米海軍の予測では、このまま沈降が止まらなければ、３０分程度で圧懐深度に達するようだった。潜水艦は音紋照合により、中国の「漢」級潜水艦と判明しており、このままであれば、「みこもと」から約４海里ほど離れた水深３２００ｍの海底に着底すると思われた。

米海軍は状況をかなり深刻に受け止めており、艦隊のデフコンを一段階引き上げていた。

「ジョーブ中佐、これはうちの「みずなぎ」や、そちらの潜水艦がやられたのと同じ感じがしますが・・・」

「吉村サン、同感デス。しかし、このままこの潜水艦が失われたなら、事実何もデキマセンが、軍事的緊張状態になるかも知れまセン。」

「それはまずいですねぇ・・・特に”みこもと”の存在が明らかになると、特殊法人とは言え、半官半民の政府外郭団体ですから、日本に対しても何か言ってきそうですね。」

「こちらも困ってマス。この状況で潜水艦が沈んだ原因がこちらからの攻撃では無いと証明デキマセン。」

ブリッジの電話が鳴った。観測室からであった。

「吉村だ、どうした。」

「あ、吉村さん、どうも圧懐音らしきものが聞こえるんですが・・・」

「すぐ行く。中佐、同行願えますか？」

「ＯＫ、ユキマショウ。」
観測室に降りた吉村達を待っていたのは、音響モニターから聞こえる形状しがたき音だった。
「音響方位２３５度、距離約４．５海里、深度９００ｍ」
黒岩が「金魚」で観測したデーターを読み上げる。
「これはホントウに圧懐音デス。私は古いスキップジャック級を処分した時に聞いてマス。」
「ということは、この潜水艦はもう助からない？」
「ソウデス。中の乗組員もネ。」
「吉村さん、圧懐音に隠れていましたが、もう１隻の潜水艦の推進器音も止まってます。ただし、循環ポンプの音らしきものは聞こえますから、単に停止しているだけと思います。ひどく静かですから、あまりはっきりとは言えませんが。距離約７．５海里、水深は３２０ｍ。方位は３２５度です。」
「多分、圧懐音に気づいたな。それで停止して無音状態になっているのかも知れん。黒岩君、これまでの聴音記録は取ってあるのか？」
「はい。固定聴音開始から、”金魚”を下ろして現在までの聴音結果は全てデジタル化してメモリーに残してあります。」
「ジョーブ中佐、うちの聴音結果のコピーを提供します。沈没原因が攻撃によるモノで無い事の証明の一助になるかも知れません。」
「Ｏｈ、Ｔｈａｎｋｓ．　それはかなり強力な証拠になると思いマス。感謝しマス。」
「どうしますか？ハードコピーで司令部に持ち帰りますか？ならばすぐにでもハードコピーしますが。長野君、出来るよな。」
「はい。すでにＳＤメモリーカードに落としてあります。一応、３枚複製を作ってありますから、いつでもどうぞ。」
「おお、なんかいつもの長野と違うな。今回のミッションはいやに手際が良いな。」
吉村はそう言って、長野から受け取った３枚のＳＤカードの一枚をジョーブ中佐に渡した。

「アリガトウ。スミマセン、船内放送でスカンロン大尉を呼んで貰えマスカ？彼に旗艦に届けさせマス。」
現在「みこもと」に残っている2名の米海軍士官の一人を呼び出した。最初に乗船した8名の海軍士官（2名は便宜上だが）のうち、技術系の4名は浮上した潜水艦に乗り込み、また例の問題を起こした2名は、潜水艦の浮上と同時に旗艦のブルーリッジに移っていた。残っていたのは艦隊と行動を共にするために必要な連絡士官2名だった。そのうちの1名が聴音記録をデジタル化した情報の入ったSDカードを持ってブルーリッジに飛ぶのだ。
船内放送で呼び出されたスカンロン大尉は、すぐに音響観測室に現れた。ジョーブ中佐が経緯を説明し、ブリッジの軍用端末を使用して「ニミッツ」搭載のUH60を迎えに来させた。波浪貫通型双胴船形で後部甲板は普通の観測船より広いとはいえ、さすがにヘリの着船までは考慮していない「みこもと」からヘリに乗るためには、低空でホバリングしたヘリへスリングラインを使って乗り込むしか無かった。
吉村達はスカンロン大尉がヘリに乗り込んだ後、また音響観測室へ戻り、もう1隻の潜水艦の動向に注意を集中していた。

その頃、中国籍潜水艦の着底点直上に到着した駆逐艦「ステザム」では大騒動が巻き起こっていた。それは二つの事が同時に発生した結果の大騒動だった。一つは、圧懐した潜水艦からのものと思われる救難ブイの浮上と、それからの衛星向け救難信号の発信だった。それは30秒ほどの時間、救難信号を発信し、自沈した。これで中国海軍は自国潜水艦の沈没とその位置、仮に含まれるとすればその原因を知る事になる。
もう一つは、着底点海面に浮上してきた大量の気泡から、大気中に放射性物質が拡散したことを検出した事だった。これの意味は、圧懐で原子炉区画が破損したことを示していた。検出された放射性物質は空気1立方メートル当たり、7万ベクレルに及ぶものだった。

検出された核種から、最低限1次冷却水系が海中に解放されている可能性が高いと判断され、周辺海域が深刻な核汚染に陥った事は明白だった。
この情報は即座に周辺全艦艇に通報され、周辺艦艇は即座にＡＢＣ防護の体勢に入った。「みこもと」にもこの情報は伝達され、ＡＢＣ防護システムを持たない「みこもと」は深刻な核汚染に陥らないうちに、即座にこの海域を離れるよう、要請された。
要請を受けた「みこもと」では、曳航していた「金魚」を直ちに巻き上げ、着底点海面から風上に当たる方向に、静粛を保てる最大速度で移動を開始した。また、甲板作業に従事していた乗組員のスクリーニングが実施され、その結果幸いにも汚染された乗組員が居なかったのは不幸中の幸いだった。スクリーニングは第７艦隊全艦でも同様に実施され、直上に居た「ステザム」で外部作業に当たっていた５名の乗組員が体表面１平方ｍ当たりで数百ベクレルレベルの汚染を受け、洗浄措置を取った以外、汚染は発生していなかった。
曳航中の新型潜水艦を含む艦隊は可能な最大速度で風上側に待避を行い、現場から１６海里以上離れた海域からヘリを発艦させ、着底点海域周辺のモニタリングを行った。
志願により求められた正副操縦士は防護服に身を包み、各部開口部を密閉した上で、後部席に搭載した圧縮空気ボンベにより機内圧を外気圧より高く保ち、半径５海里から、各方向へ通過飛行をしながら空気中の線量をモニターした後、着底点直上でホバリングにより特殊容器に海水サンプルを採取、空母に戻るパターンを４回繰り返したところで、ヘリ外部の汚染が洗浄しても除去できない状態になったため、このヘリは海中に投棄された。
第７艦隊司令部はこのモニタリングを、２４時間以上継続し、放射性核種の拡散状況をシミュレートするための基礎情報を収集していた。海域は北西太平洋のど真ん中であり、主権問題は発生しなかったが、今後の拡散状況によっては太平洋両岸に影響を及ぼす恐れがあり、今後の天候の変動、海流などを勘案したかなり精密な拡散状

況のシミュレートが必要だった。幸いなことに、この海域を流れる海流は、黒潮や親潮などの沿岸流から離れた、太平洋中央部で収斂する随伴流や反流が主だったものだったのは幸いであった。

圧懐（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちします。

核汚染（前書き）

仕事に来てみて驚いた。最近の衛星回線って凄いのね。自宅より早かった。^^;
では第21話をどうぞ。

核汚染

中国籍と思われる潜水艦の圧懐から約３０時間後、中国政府は救難ブイの信号から割り出したと思われる、自国海軍潜水艦の喪失を発表した。その中でかなり明確な表現で、「撃沈の可能性」に言及していた。これは日米両国、特に米国にとって大問題であった。発表された喪失位置は概ね正確で、それはすでに公表されている閉鎖水域の中心に近かったのである。この水域に米第７艦隊の多数の戦闘艦が蝟集していたのは隠しようのない事実であり、中国は潜水艦喪失の調査のため、この水域に水上艦艇群を派遣すると発表していた。その頃「みこもと」は、第７艦隊から離れ、２００海里以上海流を下った海域に到達していた。海水汚染のモニタリングのためである。核汚染発生直後、内容秘匿のため米海軍の衛星回線を通じて日本政府にも汚染発生が通知され、「みこもと」には、文部科学省から公式ルートを通じて、海域汚染のモニターを行う政府命令が下っていた。米国からの依頼によるミッションそのものは、一応の成功をもって終わっていたため、軍事的秘匿の理由以外、「みこもと」の行動を制限する理由はなかった。そのため、「みこもと」は第７艦隊との共同体勢を解いて、単独で核汚染モニタリングの調査に入っていた。

核汚染のモニタリング自体はすでに東北関東大震災での福島第一発電所災害対策として茨城県、千葉県沖合で実施していた手順を踏襲するだけであったため、問題は無かった。潜水艦の着底点周辺１００海里はいまだに米海軍による閉鎖水域となっていたため、海流の下流方向に１００海里進んだ点から、海流を下りながらモニターを実施していたが、この海域では目立った汚染はこれまで検知されていなかった。この海域での海流は沿岸流の黒潮などと違い、時速０．６ノット程度と遅いため、まだ汚染水が到達していないものと思われた。そのため、２００海里以上離れた海域で汚染水の到達を待ち、

その位置を維持していたのだった。
「しかし、大変な事になりましたねぇ・・・」
システム担当の長野は、手持ちぶさたに自動放射線モニターの数値を追っている主任の吉村に話しかけた。
「まぁなぁ、中国があそこまで強硬な態度に出るとは思わなかったからなぁ・・・」
中国の水上艦部隊の先鋒は3時間ほど前に第7艦隊の航空部隊と接触していた。
「しかし、米艦隊に『捜索をするからそこをどけ』などという通告をするとは思ってもいませんでしたからね。」
「米艦隊としちゃ、すでに目的は達したから、場所を空けるとは思うけれど、曳航している潜水艦を見られたくはないだろうから、航空機も含めて接近は許さないだろうからなぁ。」
「しかし、中国側はあの海域の特殊な状況を知りませんから、さらに被害が出るんじゃないかと・・・」
「彼らも国内事情が、節を曲げてでも情報の提供を乞う事を許さないだろうし、現場だけで秘密裏にってのも、乗り組んでいる人間の教育に問題があるから、難しいだろうなぁ・・・」
「しかし、あの沈んだ潜水艦、やっぱり例の『幽霊』にやられたんですかね。」
「前後の事情を考えれば、そうとしか思えないからね。ダメコンでは多分世界一の米海軍の最新鋭潜水艦があの状態なんだから、いくら複合素材を使わない金属製船体だからと言っても、ある程度のダメージは食らうだろ。それが生死に直結しない部分なら問題なかっただろうが、聴音データーだと推進器どころか原子炉の冷却動力さえ止まったようだから、どうにもならなかったんじゃないかな。それと潜水艦乗員の練度の問題もあるだろうしな。」
「中国海軍の潜水艦って練度低いんですか？」
「そりゃ、潜水艦の運用に支障が無い程度の練度は持っているだろうさ。しかし、あの国は日米英独仏露とか北欧諸国みたいに戦前か

ら潜水艦を運用してきた国じゃ無いし、元々、下級乗員の程度が高い訳じゃ無い。今時の潜水艦は最新技術の塊みたいなもんだから、日本の自衛隊だって専門職として扱われるほどの知識を必要とするのが潜水艦乗りで、いくら通常運用が出来るからといって、突発事態、それも予想もしてない突発事態に対応しろ、と言う方が酷だよ。」

「なるほど。海洋調査機構随一の潜水調査艇乗りの能瀬さんですら、やられたんですから、当たり前か・・・」

「ま、そういう事だ。問題は政治が未来永劫、それを理解できない事だろうな。」

その時、観測室の電話が鳴った。吉村が電話を取った。

「はい、観測室。あ、船長。はい、船長室ですね。すぐに伺います。長野、船長から呼び出しだ。ちょっと行ってくる。」

「了解。」

吉村が船長室に顔を出すと、すでに一等航海士、二等航海士、機関長、運用長（ボースン）が顔を揃えていた。

「吉村主任、ご足労願って申し訳ありません。」

「いえ、で、何かあったのですか？」

「ええ、テーブルに、先ほど機構本部から受け取ったメールのコピーがありますから、目を通して下さい。他の諸君もお願いします。」

通信文にざっと目を通した吉村は、

「船長、これ、かなり深刻ですね・・・」

「ええ、それで船の幹部に集まってもらったわけなんで・・・」

通信文には米海軍が通告した立ち入り禁止海域についての情報が記載されていた。それによれば、東経１５６度から１６０度、北緯３０度から３４度の範囲を軍事的理由から一般船舶の立ち入りを制限するとされていた。現状に鑑みれば、中国海軍との戦闘行為を想定しているとしか受け取れなかった。「みこもと」の現在位置はこの閉鎖海域の南端に位置していた。

テーブル上のもう一枚の通信文には、「みこもと」の安全確保のた

め、自衛艦2隻が出港したこと、第7艦隊から駆逐艦が1隻随伴のために派遣される事、「みこもと」は所定の核汚染モニターが終了次第、すみやかに母港へ自衛艦と共に帰港すること、などが記載されていた。

「吉村さん、そういうわけですので、観測調査部員にも周知願いたいんですが。」

「判りました船長。この後すぐにミーティングを開きます。」

「お願いします。他の諸君も同様に願います。まだ戦闘が始まった訳ではありませんので、くれぐれも冷静に対応をお願いします。本船航路としては、この閉鎖海域を速やかに出るため、取りあえず南下、閉鎖海域の外側で72時間のモニタリングを行い、汚染検出の有無に拘わらず、航路を西へ向け、海域を迂回、小笠原西側近海を北上して帰港するコースを取ろうと思います。何か意見はありますか？」

「観測調査からは特にありません。」

「機関科からも特にありませんな。」

「それでは、この航路予定で進めます。第7艦隊の駆逐艦と会同するまで、現在位置を保持、その後南下、海域を出て72時間漂泊、放射線モニタリングを実施、その後進路270度で東経140度付近まで、そこから北上するコースを取ります。吉村さん、航走中でもモニタリングは可能ですか？」

「ええ、可能です。ただし、海流の詳細が判りませんので、拡散予測データーとしてはあまり意味が無くなりますが・・・」

「了解です。しかし、最悪、そのような形になることも了承願います。」

「判りました。出来る限り意味のあるデーターにするよう、海流データーの精密度を上げておきます。」

「機関長、燃料は大丈夫ですね。」

「取りあえず、閉鎖海域の迂回には十分です。もちろん帰港にも不足はないですが、出来るならどこかで多少補給はしたいと思います。

」
「了解。それは小笠原近傍でもう一度判断しましょう。最悪海自艦からも都合は付けて貰えるかも知れませんし。」
「その他何もなければ解散。宜しく願います。」

核汚染（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

制限海域（前書き）

出先から帰ってきて自宅から更新しようとファイルを開いたところ、ファイル破損と表示され開けなくなりました。バックアップはすでに掲載した分までしかありません。仕方なく思い出しながらまた書いています。およそ４話分くらいのデーターが飛びました。ふぅ・・・

第２２話です。

推敲が甘くなっています。誤字、脱字等あると思います。ご容赦ください。

制限海域

「みこもと」に随伴するために派遣された駆逐艦はおなじみの「ステザム」だった。また、「ステザム」との連絡士官として乗船してきたのは、これまたおなじみのジョーブ中佐だった。

「ステザム」は放出された核汚染物質を含む気泡の中に入ってしまったため、乗員の被爆は軽微で済んだものの、艦各部に洗浄しきれない高濃度汚染域が出来てしまい、特殊な洗浄法を用いなければ、除染が不可能な状態であった。このため、戦闘行動に制限があることから、比較的安全と思われる「みこもと」随伴に派遣されたのだった。ジョーブ中佐は第７艦隊司令部付きであるため、第５７任務群とは命令系統が異なり、艦隊司令部には彼の居場所が無かったため、志願して「みこもと」に乗り込んで来た。もちろん、吉村や船長と知己があることも大きな動機ではあった。中佐という階級は「ステザム」艦長と同じであり、つまり、艦長以外の「ステザム」士官から、命令を受ける必要がない、と言うことでもある。米第７艦隊指揮下に無い、日本の公用船に乗り込む連絡士官としては非常にやりやすい立場であった。

もちろん、吉村や船長も日本滞在が長く、日本語も堪能なジョーブ中佐の連絡士官乗船は歓迎すべきことであった。彼は乗船と同時に持ち込んだ艦隊衛星通信装置を、「ステザム」の技術下士官とともに「みこもと」の乗員の協力を得て、船橋内に設置した。「ステザム」との通常交信は一般のマリンＶＨＦ通信機で行うが、軍事的に重要な通信はこの通信端末を用いて行われるのである。また、この通信端末は艦隊司令部でもモニターでき、当然ながら「みこもと」の位置、針路、速度などがリアルタイムで艦隊旗艦ＣＩＣでモニター出来る様になっていた。

「みこもと」は「ステザム」と会同すると、針路を１８０度に取り、新たに米海軍が設定した制限海域から抜ける航路を進んだ。速度は

ゆっくりとした１６ノットだった。これは補給ポスト付近に高線量汚染があるため簡単には燃料補給を受けられず、残燃料に不安を抱える「ステザム」の状況を考慮したためだった。
それでも２０時間ほどで制限海域外側１００海里付近に達し、「みこもと」はここで当初計画通り、７２時間のモニタリングのための漂泊に入った。「ステザム」は「みこもと」から方位１０度方向に約３海里ほど離れて同様に漂泊していた。
モニタリングの漂泊とはいえ、すでに「みこもと」の聴音能力を承知している「ステザム」から、音響監視を依頼されていたため、「みこもと」は「金魚」を曳航しておよそ5海里ほどの距離を8の字型に行きつ戻りつしていた。
「みこもと」の受聴した音響信号は船内の処理装置でデジタル化され、長野たちの努力で、船橋の軍用衛星通信端末に繋ぎ込まれていた。このため、「みこもと」が捉えた水中音響は、リアルタイムで「ステザム」のイージス端末または艦隊旗艦のデーター処理端末で処理され、水中音響データーベースとの照合により、それが潜水艦でデーターベースに記録があるものである限り、イージス端末に接続された各艦艇、航空機に表示されるようになっていた。このシステムの実証は漂泊を始めて間もなくなされることになった。
その頃、船橋に詰めていた吉村に音響観測室の黒岩から連絡が入った。
「吉村さん、潜水艦らしき推進器音、方位１２０度、距離８海里以上、深度３５０ｍ」
「了解、黒岩。ジョーブ中佐に確認して貰う。」
「了解です。」
「ジョーブ中佐、音響観測室から潜水艦らしき推進器音検知したそうです。確認願います。」
「了解デス。すぐに『ステザム』に連絡しマス。詳細をお願いしマス。」
「本船からの方位１２０度、距離８海里以上、深度３５０ｍ」

「了解。」
数分後、通信端末の呼び出し音が鳴った。
「吉村サン、探知した潜水艦は友軍のものデス。６８８級潜水艦がパールから本隊に向かっているようデス。艦名は判りませン。」
「了解、それなら安心です。あー、音響観測室黒岩、探知潜水艦は友軍と判明。以降モニター不要。」
「吉村さん、了解。それ以外の音響に注意を集中します。」
「宜しく頼む。」
本来、日本の公用船でこのような事を行うのは、いろいろと五月蠅い事になるのだが、任務群本隊から離れ、固有の対潜ヘリを持たないアーレイ・バーク級イージス駆逐艦である「ステザム」は対潜ヘリの運用ができなかったため、「みこもと」の聴音能力に頼るしか方法が無かったのである。「みこもと」にしても、すでに複数の潜水艦を探知しており、また中国海軍の強硬な態度から、米艦隊の庇護下で行動する事は必要であった。

「みこもと」が漂泊を開始してから２４時間が過ぎた頃、船橋の通信端末が呼び出し音を鳴らした。船橋当直に付いていた2等航海士はインターカムで自室に引き取っていたジョーブ中佐を呼び出した。船橋後部の水先人用船室を自室としていたジョーブ中佐は数秒で船橋に現れ、交信を開始した。すぐに通信を終えたジョーブ中佐は、自ら船長室に連絡を入れ、1階下の船長室応接間に降りていった。そこには隣室の吉村も来ていた。
「船長、吉村サン、今、艦隊司令部から連絡で、中国艦隊から2隻の駆逐艦が離れ、こちらへ向かっているそうデス。艦隊の早期警戒機によれば、我々の周囲３００海里にはこちらの艦隊以外船は居ませン。目的は『ステザム』か本船以外にありませン。対処の準備をお願いしマス。」
「判りました。しかし何で我々なんですかね。それに我々の存在をどうやって知ったんですかね。」

「向こうの意図はわかりませン。存在は衛星だと思いマス。動いている船を衛星で捉えるのは、かなり難しいデスが、我々はもう２４時間以上、この位置からあまり動いていませン。それで衛星で発見されたのでショウ。」
「しかし、対処って言っても、調査機構本部からは明確な指示があるからなぁ。７２時間のモニタリング終了までにはまだ４０時間以上あるしなぁ。」
「吉村さん、本船の安全には換えられませんよ。私は船長として、危険が有るなら早期に避難すべきと思っています。」
「しかし、汚染はかなり深刻で、このまま放っておくわけにも・・・」
「吉村サン、この辺は海流が弱いですから、拡散には月単位の時間がかかると思いマス。状況が良くなってからでも遅くは無いと思いマス。原子力艦を除いて、軍艦はあまり長い間補給ナシではいられまセン。」
「なるほど。この状況も長くは続けられない、と言うことですか。」
「そうデス。５７任務群も『ニミッツ』が居ますカラ、頑張ってマスけれど、『ステザム』のように燃料に不安が出てマス。」
「ジョーブ中佐、了解しました。本船は退避準備に入ります。まだ時間はありそうですから、中国艦のレーダー覆域に入る前に避退しようと思います。」
「了解デス。『ステザム』とその方針で協議しマス。」
「お願いします。吉村さん、そういうわけです。研究員にも周知お願いします。」
「判りました。私も研究員の安全が第一です。船長の方針に同意致します。」
「なんか、とんでもないことになって、研究員諸君には申し訳ない。状況が状況だけに勘弁して欲しいと伝えてください。」
「いや、船長が謝られる事じゃありません。仕方が無い事ですから。」

「そう言っていただけると気が休まります。それではお願いします。」

船長はそう言って、当直員に状況と今後の方針を伝えるために船橋に登っていった。吉村はすでに夜明けまでの時間が６時間を切って居る事もあり、起床後全員呼集をかけて伝達することにし、自室に引き取った。ジョーブ中佐は「ステザム」と連絡を取り「みこもと」の方針を伝え、０８００に「ステザム」艦長と再協議する事になった。

制限海域（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしています。

迎撃（前書き）

今度はバックアップファイルが飛びました。書き直した分が全てアクセス不能。仕方なくまた書き直しています。ディスク・ユーティリティーで見ると、起動ディスクが不良となっています。しかし、起動にも他の操作にも異常はなく、不良もＳＭＡＲＴのエラーのようです。しかし、問題は起動ディスクだけで、バックアップの外付けディスクは異常になっていません。
なんか、ウィルスみたいな感じだったんで、ウイルスソフトを別のものに更新して検査しましたが、結果は無し。なんだろう・・・
それでは２３話目どうぞ。

迎撃

この頃、第５７任務群本隊は、輪型陣の中央に航洋タグボートとそれに曳航される潜水艦、その左右にタイコンデロガ級イージス巡洋艦を置き、その前方に空母「ニミッツ」を置いた艦隊陣形で新たに設定された制限海域の東側限界線近くに達し、南東へ進んでいた。中国艦隊はすでに圧懐した潜水艦の沈没点付近に到達しており、海底の捜索を行うらしき海洋調査船と駆逐艦１隻を沈没点付近に残したまま、５７任務群本隊の後を追って南下していた。艦隊から分離した２隻は方位南南西に向かい、漂泊する「みこもと」と「ステザム」への最短コースを進んでいた。中国艦隊には２隻の補給艦と思しき艦が随伴していたが、「ニミッツ」艦載機の偵察では中国艦隊が補給を行った形跡はなかった。

「みこもと」と「ステザム」は、中国艦が約１００海里の距離に近づいた時点で、核汚染モニタリングを打ち切り、任務群本隊とは逆の西に向かって「ステザム」の燃料事情が許す最大速度２４ノットで避退を開始した。この時の中国艦の速度は２１ノット程度であったため、中国艦が「みこもと」の現在位置に達する頃には、西方に１２０海里程度の距離を取れると考えていた。本隊とは逆方向へ避退したのは、「みこもと」の帰路を考慮したためであった。本隊へ接近する方向、つまり東へ避退した場合、本隊を追尾する中国艦隊との接触を回避するために、相当な大回りが必要だった。補給を受けられなかった「ステザム」より燃料事情は良いとはいえ、有り余っているいるわけではない。東へ避退した場合、中国艦隊を迂回する航路では、日本領海までの燃料事情が著しく不安になるためだった。

しかし、「みこもと」も「ステザム」も中国側の彼らへの関心の度合いを読み違えていた。というよりも、事実上手出しが不可能な空母機動艦隊である５７任務群本隊よりも、たった２隻、それも１隻

は非武装船であることが確実な「みこもと」と「ステザム」なら、彼らの力でどうにかなると踏んだのかも知れなかった。他の手段を持たない中国側は、相当な衛星資源を「みこもと」と「ステザム」の2隻に集中したのだろう。「みこもと」が避退を始めて1時間半程度が経過した時だった。船橋の軍用通信端末が呼び出し音を鳴らした。当直中だった2等航海士はブリッジ後部の水先人室で休んでいたジョーブ中佐を呼び出した。数秒で船橋に姿を現したジョーブ中佐はすぐに軍用端末で交信を開始した。短い交信が終わると、彼は自分で船長室に連絡を入れ、階下の船長室に降りていった。船長室応接間にジョーブ中佐が入ると、船長と吉村がすでに待っていた。吉村の自室は船長室の隣にある。

「ジョーブ中佐、何かあったのですか。」船長の山下は聞いた。

「ハイ。こちらに向かっていた中国艦が針路変更シテ、高速でこちらに向かっていマス。『ニミッツ』の早期警戒機が探知しまシタ。このままだと、後3時間ほどでレーダー覆域に入りマス。」

「こちらの避退が向こうに知られたと言うのですか！」

「ソウデス。おそらくかなりな数の衛星を我々の海域に集中させたのデショウ。」

「困った事になりましたね。本隊からの支援はあるのでしょうか。」これは吉村だった。

「ハイ。艦隊司令部からは航空機の支援を出すといっていマス。ただ足止めはできないでショウ。」

「『ステザム』の燃料の件もありますから、さらなる増速もコース変更も難しいでしょう。」

「吉村さん、それはこちらも同じですよ。これ以上燃料の消費が増えれば、小笠原領海までの最短コースを取らざるを得なくなります。」

「困りましたね。しかし、このまま進むしか方法は無い。」

「そうですね。警戒しながら向こうの出方を待つしか方法は無さそうです。ジョーブ中佐、そのように『ステザム』に伝えて戴けませ

んか。」
「ワカリマシタ。どちらにせよ、『ステザム』にも採れるオプションはそう多くないと思いマス。」
３時間後、中国艦がＶＨＦ通信可能範囲に入ったと思われる頃、「みこもと」のＶＨＦ通信機から中国語と思しき音声が流れ出した。船橋当直員がすぐに船長を呼び、船長はジョーブ中佐と吉村を船橋へ呼んだ。吉村は中国語と思われることから、自室からチャンを船橋に呼び出していた。遅れて船橋に入って来たチャンに吉村は、
「チャンさん、すみませんね。どうも中国語で呼び出しを受けているようなんですが、通訳をお願いできますか。」
「判りました。やってみます。」
まだ距離が遠いため、ＦＭ方式のＶＨＦ通信でも、若干の雑音が混じっており、慣れないチャンは聞き取るのに苦労していた。中国艦はまだ水平線下にあった。
「あまりうまく聞き取れませんでしたが、内容は停船命令のようです。日本船は直ちに停船して接近を待て。従わなければ必要な措置を取る。と繰り返して言っています。」
ジョーブ中佐はチャンの翻訳を「ステザム」に中継した。しばらくの協議の後、今後の交信は「ステザム」が行う事となった。交信は衛星リンクを通じて、５７任務群旗艦「ブルーリッジ」、ハワイのＣＩＮＣＰＡＣ、ワシントンの国防総省にリアルタイムで中継されていた。交信は英語で行われた。

＜ステザム＞「こちらを追尾中の中国艦、こちらは合衆国軍艦『ステザム』である。貴艦の発した停船命令の説明を要求する。当該日本船は当艦による随伴を受けている。」
＜寧波＞「『ステザム』こちらは中華人民共和国軍艦『寧波』である。日本船は中国領海を侵犯した疑いがある。当艦は日本船の拿捕命令を受けている。停船して指示に従え。」
＜ステザム＞「こちら『ステザム』。貴艦の主張は理解不能。当海

域は中国領海では無い。国連海洋法条約に照らし、貴艦に当該船の拿捕権限は無い。また、貴艦の行動は海賊行為防止に関わる国連決議に違反している事は明白である。直ちに追尾を中止し、針路を変更せよ。」

＜寧波＞「こちら『寧波』。本艦は中華人民共和国法により、権限を与えられている。直ちに停船して指示に従わなければ、しかるべき処置を執る。命令である。停船して接近を待て。」

＜ステザム＞「『寧波』こちら『ステザム』。貴艦は自分が何を言っているのか理解しているのか？注意して置くが本交信は全てしかるべき部署に中継されている。貴艦の持つ権限は合衆国軍艦はもとより、日本国政府公用船に対しても及ばない事は明白である。従って貴艦の指示に従わなければならない義務は無い。逆に、本艦は合衆国政府より与えられた権限により、海賊行為防止に関わる国連決議に明白に違反する貴艦らに対し、直ちに追尾行為を中止するよう勧告する。従わない場合、本艦に与えられた権限に基づき、しかるべき処置を執るが宜しいか。」

この「ステザム」の通信に対する返答は、水平線上に現れた煙の尾を引く二つの光点だった。直後に「みこもと」船橋の通信端末から、「ヴァンパイア、ヴァンパイア」のミサイル警報が流れ出した。この時の「みこもと」と「ステザム」の位置関係は、警戒配置についた事もあり、１０海里以上離れて、中国艦と「みこもと」を結んだ線上に「ステザム」はあった。「みこもと」からは遙かに霞んで見える「ステザム」から４本の煙の帯が上がり、その先端に４つの光点があった。「ステザム」が迎撃を開始した瞬間だった。

迎撃（後書き）

ご意見ご感想お待ちしています。

狂騒（前書き）

第２４話です。
破損したファイルは復元不可でした。どうもＭＳワードフォーマット（．ｄｏｃ）のファイルだけが飛んだようで、ＭａｃのＲＴＦファイルは問題ありません。
手書き復元ファイルはＲＴＦでセーブしました。バックアップも同じ。これで様子を見ます。もう一度飛んだら、復元する気力があるかどうか・・・・

狂騒

「みこもと」船橋では、事態を飲み込めていない操舵手を突き飛ばすように船長が舵輪に飛びつき、左舷一杯まで舵輪を回した。普通の船で２０ノットを超える速度でこんな操舵をすれば、最悪転覆してもおかしくなかった。しかし波浪貫通型双胴船形の「みこもと」は右舷側船体をぐっと沈めるだけで、操舵に追随した。ミサイル到来方向に船尾が向いたと思われる頃、船長は操舵手に舵輪を渡し、「方位を維持しろ」とだけ言い、エンジンテレグラフのストッパーをもぎ取るように外し、両舷とも一杯まで押し込んだ。一瞬の遅れの後、船は体が後ろに持って行かれるほどの加速を見せ、増速し始めた。すぐに船橋の電話が鳴り、耳に付けなくても聞こえる音量で機関長と思しき声が叫んでいた。船長は「ごちゃごちゃ言うな。回せ回せ！！！、目一杯回せ。」と電話に叫んだ。

船長が舵輪に飛びついた時を同じくして、吉村はコンソール上の警急ボタンを押し込んでいた。船内に「プゥア、プゥア」という警報音が流れ出した。続いて吉村は船内放送の「緊急」ボタンを押し込んだまま、警報音にかぶせて「全乗員は救命胴衣着用の上会議室へ集合」と繰り返し放送していた。会議室は船橋の２層下船首側にあり、ミサイルに背を向けて逃げている状態ではミサイルの直撃を受けても、被害は最小限で済むと思われる位置にあった。船はその間にも加速を続け、すでに公称最大速度の２７ノットを超え、３０ノットに迫ろうとしていたが、加速はまだ続いていた。緊急処置を終えた船長と吉村はすぐさまウイングに飛び出し、ミサイルの行方を見ようとした。そして彼らがウイングに飛び出した直後、「ステザム」の向こう側の空中に二つの火の花が咲いた。

その頃、機関室は狂乱状態にあった。いきなり過負荷全速状態へエンジンテレグラフをたたき込まれた結果、それまで４基ある発電機のうち、３基を運転して航行していたものが、４基目の発電機が起

動し、暖気運転も無しでいきなり全速回転に入り、さらにそれに続いて燃料電池へ燃料を圧送する燃料ポンプが起動した瞬間から全力運転に入った。リミッターを外されて稼働し始めた機器からは無数のアラームが鳴り響き、機関長は半狂乱になっていた。それでも機関員が監視盤の運転状態を巡航から過負荷に切り替えた事で大半のアラームは消えたが、推進用電動機制御のインバーターが出す低電圧アラームは４基目の発電機が並列運転に入るまで続き、２４ノットという高速でいきなり左舷一杯という大舵を取られた舵機は油圧機構のシールが破損したのか、舵が中立となってもアラームを響かせていた。一端は喧噪が収まったに見た機関室だったが、すぐにまた喧噪の渦に巻き込まれた。今度は発電機、燃料電池の温度警報だった。４基のうち、ずっと稼働していた２基は、すでに温度がレッドゾーンに入りかけていた。また燃料電池も、供給される燃料に改質触媒の作用が追いつかず、過熱し始めていた。これらの温度警報が、また機関室を満たすことになった。

こんな喧噪を知ってか知らずか、船橋では船長が微動だにせず、後方を双眼鏡で観察していた。次のミサイル発射を警戒していたのだ。「みこもと」の全速力退避を見て、「ステザム」も中国艦から距離を取る方向へダッシュを始めた。さすが軍用ガスタービン機関の力は「みこもと」などとは比較にならない加速を生み出し、あっという間に３０ノットを超える速度に達していた。それでも「みこもと」はすでに３０ノットを超え、竣工試験時にマークした過負荷最大速度を超えていた。１時間強、こんな状態で突っ走った後、「ステザム」から通信が入った。それによれば、偵察機による偵察で、中国艦が速度を落とし、針路を中国艦隊本隊に向けた事が知らされ、また、「ステザム」が「みこもと」と会同したいため、速度を落として欲しいとの要請も伝えられた。ジョーブ中佐からそれを聞いた船長は、それまで前方一杯に押し込まれていたエンジンテレグラフを巡航（低速）まで引き戻した。これにより、発電機エンジンの回転低下を聞いた機関長は安堵の余り、一時的に意識を手放したらしい。

船橋でも状況は同じで、船長、吉村、ジョーブ中佐それぞれが、それぞれに突っ伏していた。

しばらく各人とも突っ伏していたが、後始末だけでもそうもしては居られなかった。船長は機関室と連絡を取り、状況の説明を行い、また機関室の状況を聞いていた。吉村は会議室に集まった全乗員に状況説明と、警戒態勢は続けるため、人員の割り振り等を行うために会議室へ降りていった。ジョーブ中佐は通信端末にとりつき、「ステザム」ではなく、艦隊司令部と通信を行っていた。３０分ほどで「ステザム」と会同した「みこもと」は針路を９０度近く変え、５７任務群本隊との邂逅コースに乗った。「ステザム」からの要請だった。すでに艦隊から給油艦が分離してこちらに向かっていた。

狂騒（後書き）

ご意見ご感想お待ちしています。

給油（前書き）

第２５話です。
現在の処、ファイルは正常です。バックアップも問題ナシ。ｄｏｃ．
ファイルだけの問題のようです。まだ訳がわかりません・・・・

給油

６時間ほどで給油艦と会同した「みこもと」「ステザム」は直ちに給油行動を開始した。「ステザム」には補給ポストがあるため、通常の洋上補給、つまり給油艦と併走する形で給油が可能だ。しかし、「ステザム」の補給ポスト付近には、高線量の核汚染が存在するため、通常の補給活動は出来なかった。厳重な防護服に身を包んだ要員が、オイルマーカーで示された高線量部分を避けるようにテンションワイヤーを繰り出し、給油ホースは給油艦側から供給される形で補給が開始されたが、開始までの時間は通常の３倍近く掛かっていた。「みこもと」は補給ポストを持たないため、通称「縦曳き給油」つまり給油艦が「みこもと」を曳航する形で行われる。良く訓練された海軍なら、縦曳き給油と併走する通常の補給活動を平行して行う場合があるが、軍用給油艦からの補給など一切考慮していない「みこもと」相手では無理だった。「みこもと」は「ステザム」の給油が完了するまで１海里ほど離れた位置を同行し、その後給油を行う予定になっていた。給油は比較的低速（１０ノット前後）で行うため、余裕のできた「みこもと」機関室では、２基の酷使された発電機を停止、不具合のチェックと、消耗品の交換作業に入っていた。機関科総出の作業であるため、給油艦から必要な燃料の量の問い合わせが来た時、直ちに計算が出来る手空き要員が居なかった事が齟齬を生んだ。機関長は１等機関士に整備作業から抜けてそれを計算するように命じた。ベテランの１等機関士は機関制御室に戻り、残燃料を確認して、日本領海までの最小必要量を計算し、それを船橋に伝えた。

船橋士官や吉村を始めとする研究員は、それなりに米海軍との付き合いがあり、慣れていたが機関科は普段、機関室で勤務するため、あまり交流は無かった事が遠因だったかもしれない。１等機関士は燃料の必要量を通常通りキロリットルで算出していた。そしてそれ

はそのまま給油艦に伝えられた。
「ステザム」の給油が終わり、速度を落とした給油艦に「みこもと」は後ろからゆっくり近づいて行った。サンドレットが投げられ、それに結ばれたホーサー（太索）が給油艦に固定されると、給油艦から給油ホースがホーサー伝いに延ばされ、チクサン継ぎ手で「みこもと」側のホースと繋ぎ合わされ、給油が開始された。給油に当たった機関員は、予定の量を超えても送り続けられる燃料にあまり疑問を抱かなかった。送る量は送る側が管理しており、受ける側は要求量以下である場合のチェックだけしかしていない。普通は若干多めに送る事が常であることも手伝い、機関員は最低量チェックを済ますと、コーヒーが入ったと呼ばれていた食堂へ入っていった。どうせ給油が終われば呼ばれて、ホースの分離と漏油対策をしなければならないのだ。
ゆっくりとコーヒーを飲んでいた機関員は、いつまでも呼ばれない事に疑問を持った。そして燃料タンクの点検孔を見て頭の上に？マークが浮かんだ。すでに給油量は要求量の倍を超えていた。しかし、それでも、量の管理は供給側というセオリーが染みついている機関員は、疑問には思ったがすぐに補給停止を要求しなかった。そして、給油完了の連絡があったとき、給油された量は要求量の４倍弱に達していた。給油艦側からホース内がエアブローされ、チクサン継ぎ手を切って、メクラで蓋をした給油艦側ホースを送り出したとき、機関長から連絡が入った。機関員は補給量について機関長に正確に伝えた。それを聞いた機関長は頭を抱えてしまった。補給艦は米国である。米国の液体単位はガロンなのだ。補給艦は暗黙として単位を付けずに提示された必要量をキロガロンとして受け取っていたのだ。「みこもと」の燃料消費が酷く経済的あったが故、キロリットルをキロガロンと受け取ってもおかしくない数字が提示されていた事も一因だった。通常、米軍は自国艦以外への補給は後日代金を請求するのが常だった。それで機関長は頭を抱えたのだ。あまり経済的に余裕のない海洋調査機構では、かなり厳密な予算に従って事業

を行っている。今回のミッションは突発事態であったものの、すでに第7艦隊司令部には、必要経費の請求を行っており、それには燃料費も含まれていたのだ。それを必要量の4倍近く、それもＭＩＬスペックに合致した、通常ならば自動車の燃料として使えるようなレベルの燃料を事もあろうに、キロリットル単位で4倍弱補給してしまえば、後日請求される金額は予算からかけ離れたものになる事は間違いが無かった。始末書で済めば幸せと言うものだ。

しかし、その機関長の憂鬱も僅かな時間に過ぎなかった。給油を終わり、離されたホーサーをたぐり上げた甲板員が、ホーサーに括りつけられたモノを発見した。黒いビニール袋に2重に入れられたそれは、2ケース分の缶ビールだった。そして添えられたメッセージには、米海軍からのささやかなプレゼント、燃料とビールを受け取れ、と書かれていた。そして軍用端末からは、57任務群司令官の名前で、今回の給油は米海軍の徴用船としての給油であるとし、費用は全て米海軍に帰する、という正式メッセージが入っていた。第57任務群は、戦友である潜水艦乗員の命を事実上救った「みこもと」に対し、感謝の意を表したのだ。

彼らは「みこもと」から提示された給油量がキロリットルの単位であることを知っていたのだ。それを知らぬ顔でキロガロンとして供給したのは、彼ら一流のジョークだった。前甲板で頭を抱えてうずくまる機関長の姿は、ジョーブ中佐により携帯電話に録画され給油艦で流されていた。艦内のＣＣＴＶ回線に流された機関長の姿を見て、給油艦の乗り組み員が抱腹絶倒したのは言うまでも無い。後日これを聞かされた機関長は複雑な表情を浮かべていたが、なんら行動は起こさなかった。ただ、倍を超える燃料が供給されていたにも関わらず、報告すらしなかった機関員が、素っ裸でビルジ（船底汚水）清掃をやっていたという噂はあるが、あくまでも噂でしかない。

給油（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

拡散（前書き）

第２６話です。
どうもデュアルブートのＷｉｎ側から何かされたか、ハードの問題のようです。しかしＷｉｎなんか余り立ち上げないのですけどね・・・

拡散

給油を受けた「みこもと」は艦隊に戻る「ステザム」と給油艦と別れ、一路帰途についた。余分な燃料をプレゼントされた機関長の大盤振る舞いにより、通常の巡航速度よりも2ノットも早い20ノットで航行したため、母港横須賀には予定より2日も早く到着した。しかし、母港に帰ったからと言って、乗り組み員はすぐに休めるわけでは無かった。甲板科は索具などのメンテ、航海機器のメンテに追われ、機関科は過負荷全速運転の後始末に追われていた。研究員も今回のミッションで発見された謎の生物と高粘度海水の分析、報告を行わなければならず、帰宅の時間を惜しんで船に寝泊まりするものすら居た。本来なら数日は休暇を与えられ、次のミッションが決まるまでの間に行う作業だったが、今回は帰航の航海中にすでに次のミッションが決まっていた。例の海域の再調査であった。特に核汚染が発生している事もあり、速やかにモニタリングを行う必要があった。

船長や吉村達幹部も各省庁、海保、自衛隊、米海軍などとの調整に追われ、船員や研究員と同じ運命にあった。しかし、さすがに2週間が過ぎると、忙しさも峠を越え、作業も外注作業が主体となり、また研究員は地上のスーパーコンピューターの支援が受けられる体勢が整い、分析作業が飛躍的に進んだ事もあり、定時で帰宅できる状況になりつつあった。そして、核汚染海域での調査のために、特殊洗浄装置と洗浄水処理装置が搭載される事になり、それの仮設工事が始まる事で、甲板作業と機関室での作業は終わりを迎えた。帰航以来2週間強に亘って不休の作業を続けた各員もようやく休暇を与えられ、それぞれの家族の待つ家に帰っていった。吉村達幹部は、それに遅れること3日、久々の休暇が与えられる事になった。

吉村は休暇を家族水入らずの旅行で過ごす事に決めていた。吉村の

家族は妻恵美子と小学5年の長男健、小学3年の長女碧の一家4人であった。伊豆半島の南端に近い下田市T浜にある温泉リゾートY館に宿を取った吉村一家は、温泉と美味い地元産の魚料理を堪能した翌日、下田市内の海中水族館を訪れていた。ここには吉村の大学時代の同期が勤務しているはずだった。水族館に入場した吉村は大小の魚たちが泳ぐ大水槽に妻子を残し、入り口のレストランで落ち合う事にして、さらに奥のアシカプール裏側にある飼育棟へ足を向けた。飼育棟裏手の入り口をノックした吉村は応対に出た職員に「内村さんはいらっしゃいますか？」と聞いていた。

「はい、奥の事務室におりますが、どちら様でしょうか？」

「大学の同期で吉村と言います。お取り次ぎ願えますか。」

「それでしたら、そのまま事務室にお進み下さい。ご案内します。」

「申し訳ありません。」

事務室の扉を開け、案内に立った女性職員が「内村課長、お客様です。」

と声を掛けると、奥まった机で何かを読んでいた小柄な男が顔を上げた。

「おい、吉村じゃないか、珍しいな。どうしたんだ。」

「内村、久しぶりだな。家族旅行でこちらに来たんで、お前の顔が見たくなってな。」

「そうか、ここじゃお茶くらいしか無いが、5時以降ならかまわん。体空いてるんだろ。どうだ一杯。」

「いいね。ただし女房と子供付きだがな。」

「まぁ、それは仕方が無いさ。どこに泊まってるんだ。」

「T浜のY館だ。眺めが良いんで、そこにした。」

「貧乏学生だった頃とはエライ違いだな。」

「そういうお前こそ、管理職が板に付いてきたじゃないか。」

「何を言うか。今や潜水調査艇の大御所が。調査帰りなのか。」

「ああ、そうだ。今回はちょっと特殊だったんで内容は話せないがな。」

「なんだよ、一応、特殊法人は民間扱いだろ。そんなやばいミッションもやるのかよ。」
「民間って言っても給料は税金から出てるわけでな。お前の処はどうなんだ。大水槽の魚減ったみたいだったが。」
「ああ、最近では地元の漁師も老齢化が進んでな。魚を活かして持って来る技術を持った漁師がみんな廃業して、簡単には地元の魚を買い付けられなくなってる。それに水温のせいなのか、このところ不漁だしな。漁師連中干上がりそうだよ。」
「ここでも老齢化の弊害ですか・・・しかし、巷には失業した若い連中が溢れてるんだがなぁ。」
「いや、漁師ってのは、思うほど簡単な商売じゃなくてな。ただ、大水槽の魚が減ったのは買い付けの問題じゃなくてな。」
「どうしたんだ。」
「ここ2週間で2度ばかり、取水口から変なモノが入って来て、魚が死んだんだ。それを取り除くために、大水槽の水を落とさなければならなかったのが原因だ。」
「なんだ、そのへんなものってのは。」
「ゼリーに近い感じの塊なんだが、初め通常のフィルターだけで水を回していたら、大水槽に入り込んでな。そいつに近づいた魚が、電撃でも受けたようになって死ぬ。」
「おい、詳しく話してみろ。どうもイヤな予感がする。」
「いきなりなんだ。そのゼリー状の塊の話か？」
「そうだ。ひょっとすると俺の仕事と被るかも知れん。」
「おいおい、海洋調査機構の対象と被るだと。そりゃ大変だ。どこで見つけたんだ。」
「詳しくは言えないが、小笠原の東だ。」
「そんな遠くでか？ここから１０００海里以上離れてるじゃないか。」
「ああ、そのくらい離れてる。相当に大変な事が起きてる。」
「そうなのか。一応サンプルは取ってある。持って行くか。」

「そうしたいのは山々だが、休暇で家族旅行の最中だ。すまんがこの住所へ送ってくれないか。お前の処には、防護容器あるのか？」
「そんなものあるわけがない。ここで一番危険な生物は人間を除けば、オコゼくらいなんだぞ。」
「判った。ちょっと電話貸せや。市外通話問題ないな。」
吉村は電話を借り、ある場所へ電話を掛けた。
「ああ、吉村です。すみませんが、この番号へ処置済み回線で掛けて戴けませんか。ＰＢＸは通るはずです。宜しく。」
折り返し掛かってきた電話を吉村が直接取った。
「吉村です。処置済みですね。ただ今、休暇で伊豆下田へ来てるんですが、例の生物の類似情報があります。要員を出していただけますか。サンプルは取っているそうです。ここには防護容器ありませんのでお願いします。場所は下田海中水族館、親会社はフジタ観光だと思います。詳細は飼育課長の内村さんから。それではお願いします。私は3日後、機構に戻る予定です。」
「おい、いったいどこへ掛けたんだ？なんかものものしい感じがしたが。」
「ああ、一応、政府の機関だ。多分、明日そこの人間が来る。サンプルを渡してくれ。上には政府から話を通しておく。」
「あのゼリーの塊はそんなに危険なものなのか？」
「まだ判らん。ただし、これまで発見された事の無いものであることも確かだ。」
「しかし政府が動くような代物だろ。」
「政府が動いてるのは別の意味でだ。心配するな。何かあったら俺の携帯に電話してくれ。」
そう言って吉村は自分の名刺を内村の前に置いた。
「内村、心配そうな顔をするな。今夜は久しぶりに一杯やろう。」
「ああ・・・だがなぁ・・・」
「大丈夫だ。場合に寄っちゃお前もプロジェクトに一枚噛んで貰う事になるかも知れんし。」

「判った。心配しても始まらん。お、もう5時近いな。管理棟のレストランで待っていてくれるか。俺のツケで良い。今電話しておく。」
「おい、ここのレストランくらいは払えるぞ。今や潜水調査艇の権威なんだからな。」
「お、言うね。それじゃ今夜はお前の奢りな。すまんな。」
「まてぃ・・・・・・・・・」

拡散（後書き）

ご意見ご感想をお待ちします。

再調査（前書き）

第27話です。
ファイルの問題は少しづつ判って来ました。多分、もう起きないと思います。

再調査

飼育棟を出た吉村はレストランで妻子と落ち合い、内村を待った。内村はレストランの責任者に、閉館時間過ぎても待たしてもらえるよう交渉し、吉村達には一旦自宅で着替えるからここでビールでも飲んで待っていてくれ、と言い残し、車で1分ほどの社宅へ帰って行った。確かに魚臭い作業服に黄色いゴム長姿ではどこへも出かけられなかった。レストランでは吉村と恵美子にはビール、子供達にはミカンジュースが出され、当座のつまみにとキビナゴの丸揚げにレモンを搾り、醤油をたらしたものや、タタミイワシと呼ぶ、シラスを型に入れて薄く干したものを軽く炙ったものなどが出された。子供達は地元産のテングサで作られたあんみつに大喜びしていた。ほどなく内山が着替えて、妻子と共に戻ってきた。内山の家族は妻の有紀と小学5年の一人娘由里の3人家族だった。内山は車を水族館の駐車場に置き、タクシーを呼んだ。吉村と飲むなら車では行けない。二人の妻達はすぐに打ち解け、井戸端会議を始めていた。子供達も、親の親密さが安心させたのか、お互いのＤＳで何かやっていた。タクシーが，着いたのは水族館から１０分ほど走った小料理屋だった。ここの座敷を占領して飲み明かそうと言うのだ。小料理屋の主は内村の知り合いで、住まいが2階であるため、店を閉めてからでも飲んでいられた。幸い季節的に子供達が寝てしまっても、座敷なら問題は無かったし、小さなＴＶも座敷には置いてあった。料理は最高レベルだった。にもかかわらず、子供達にはハンバーグ定食が出てくるというフレキシブルさも同居している。特に魚の見立てが逸品だった。キンメダイなどという下須な魚には目もくれず、白身は旬のイサキ、青物は地産のイナダ、赤身は遠洋の本マグロという刺身の取り合わせは十分に満足の行くものだった。魚だけでは無い。４日ほど前に駆除で撃たれた鹿のもも肉の叩き、春先に採って水煮し、冷凍してあった山菜と小アジのマリネなど、地場の産品

をほどよく組み合わせた料理は、よくぞこの田舎町で、とうならせるものがあった。酒もコレクションと見まごうばかりの各地の地酒を取りそろえ、この時期の燗酒は料理の味を落としますから、という主の勧めで、よく冷えた冷酒を良くできた料理と合わせるのは一時の至福だった。春夏秋冬時々の産品を時期に合わせて調理するのは食の真髄であろう。

一同が満足して席を立った頃には、すでに日付が変わろうとしていた。結局、吉村が払うことになった料金もびっくりするような値段だった。子供も含むとはいえ、7人が飲んで食べて1万5千円でお釣りがくるのだ。それで儲かるのか？と聞いた吉村に、主は、別に特別に高い食材を使っているわけではありませんから、手間賃だけ戴くようなもので、丸儲けです。と笑顔で答えた。

吉村と内山はそれぞれタクシーを呼んで貰い、ここで別れる事になった。子供達はすっかり寝入っていた。

至福の一夜の後吉村一家はホテルの周辺を散策するだけで温泉三昧の二日間を過ごし、横浜、金沢八景の自宅に戻った。翌日出社した吉村は、予期せぬ喧噪に巻き込まれた。内村のサンプルが「みこもと」の採取したものとほぼ合致したからだった。「みこもと」がこのサンプルを採取した日から、およそ5週間で小笠原東海域から伊豆半島まで拡散したのだろうか。これまで知られている海流に照らすなら、それはあり得なかった。中層、深層にこれまで知られていない海流があり、それに乗った、あるいはこのプリオン類似タンパクの集合体が移動能力を獲得した、と結論づけるしか無かったのである。さらに、海自の滝川から、中国とロシアが日本のＥＥＺ付近で大規模な捜索活動を行っている、という情報がもたらされた。それも1カ所だけでなく、数カ所に亘って同時に捜索活動を行っているらしかった。また米軍偵察衛星の情報ではムルマンスクのロシア北洋艦隊のうち、半数程度が姿を消し、この時期なら通行可能な北極海航路に出ている可能性が指摘されていた。なぜなら、これだけ

の艦艇が動いているにも関わらず、大西洋方面には何らの動きが無いからだった。海洋調査機構上層部はこの中国、ロシアの動きを警戒して、「なつしま」と「みこもと」の出港を見合わせよう、という意見が多数を占めたが、核汚染の調査は一刻を争うと言う意見に押し切られる形で予定通りの出港を決定した。しかし、非武装の調査船のみではリスクが大きすぎるのは事実で、防衛省と非公式に折衝した結果、海上自衛隊も核災害訓練の一環として所要艦艇を同一海域に派遣する、という形で、「みこもと」の調査海域に同行する段取りが出来ていた。

乗り組み員の休暇から1週間後、準備万端整った「みこもと」と「なつしま」は横須賀の調査機構岸壁を離れた。すでに海自の護衛艦、「あさぎり」と「ゆうぎり」、「ひゅうが」、「あたご」、「みょうこう」それに海上保安庁の遠洋航海可能な巡視船2隻が同じ海域へ向かっていた。

さらに確認は出来ないが、「そうりゅう」級潜水艦が2隻、現場海域に向かっていると思われた。

前回と違い、今回はだいぶ荒れた海での作業になりそうだった。大陸の低気圧がベーリング海で発達し、台風並みの勢力を持って停滞していた。その影響がこの海域にまで及んでいたからだった。それに、はるか南西ではあるが、台風が発生し、フィリピン東方海上を発達しながら北上していた。しかしまだこの海域へはその影響は及んで居なかった。

前回のＧＰＳ記録を頼りに、海域へ到着した「みこもと」と「なつしま」はただちに放射線量計測を開始した。「みこもと」の記録に基づく位置（米潜水艦の着底位置）南西に5海里ほど行ったところで最大線量を記録した。１５万２千ベクレル／Ｃｍ＾３というとんでもない値だった。「なつしま」は、ここから海流の方向に沿って南下、１００ベクレル／Ｃｍ＾３になるまで追跡し、そこから広がりを知るため進行方向と直交する針路でやはり１００ベクレル／Ｃｍ＾３に下がるまで追跡、その航路を戻って同様に測定、汚染源方

向に1海里ほど戻って同様の行動を行うため、「みこもと」から離れていった。この作業には巡視船1隻が「なつしま」と同行して協力することになっていた。もちろん、巡視船にも放射線モニターの装置は搭載されていた。
すでに気泡は発生していなかったが、海水温度は周囲より2度近く高く、これから逆算して汚染源の温度は摂氏２００度近いと見積もられていた。「みこもと」に乗り込んだ原子炉技術者の相田は、おそらく炉心が環境に暴露されている、と想像していた。一次冷却水配管が破損しただけでは、ここまで温度上昇することは無いと断言していた。また、相田はスクラムが為されなかった恐れがあるとも考えていた。つまり原子炉が核連鎖反応を発生させたまま、環境に炉心を露出させている状態だ。ただ、この辺は上から放射線をモニターしているだけでは判らない事ばかりだった。「なつしま」と別れた「みこもと」はサイドスキャンソナーでの海底走査を開始した。

サイドスキャンソナーでの海底走査の結果、海底は僅か1月に満たない時間で大きく変化していた。音響伝搬の異常はすでにドームではなく、海底全面に広がっていた。また、水深２５０ｍより浅い部分にまで幽霊のような反応が現れており、海中はプリオン類似タンパクで埋め尽くされているようだった。前回の走査で音響異常域の屈折率が判明していた為、それに基づいて補正をかけた結果、海底に横たわる中国潜水艦の残骸と思われるものを発見できたのは幸運だったが、その周辺に潜水調査が可能であるかは未知数だった。残骸の周辺は海底から２０００ｍ以上の厚さで異常域が広がっており、そこからすそ野をを引くように、なだらかな傾斜で海底全面に広がっていた。
「野瀬さん、どうですかね、『みずなぎ』で、浅い部分の『幽霊』は調査可能だと思いますか？」
「そりゃ、吉村さん、可能ですけどね、当座人間を送るのはリスクが高いんじゃないですかね。なにせ前回との様子が違いすぎますか

らね。」
「そうは言っても、他に何か方法があります？」
「私としては、田中君には悪いが、最初に『ドリイ』を送って見るべきじゃないかと・・・」
「『ドリイ』はもっと深いところで使いたいのです、実は・・・」
「そうは言っても、もっと浅いところでの安全が確認できなければ、深いところへ使いたくても使えないぞ。」
「その通りなんですがねぇ・・・」
「『金魚』に全周カメラ積んで引くのはどうでしょう？」津田が言った。
「対水圧と照明に問題があるんだよ・・・」
「それなら解決出来るかも知れませんよ。まず対水圧の問題は、『みずなぎ』のポッドカメラを流用すれば解決します。確か、『金魚』の観測ユニット固定金具はポッドと共通じゃ無かったでしたっけ？」
「それだと『金魚』を改造することになるけれど？」
「ええ、でも『金魚』にはドンガラの予備が何個かあったはずですよね。」
「ああ、あるな。全部で４個だったかな。」
「その１個を改造すれば良いんじゃないですか？」
「改造は出来るだろうが、対水圧はどうする？『金魚』の空気室はそれほど大きな水圧には耐えられないぞ。」
「ええ、だから空気室は無くします。その代わり、『かいえん』用の予備の浮力体をビニール袋か何かに入れて、ドンガラ内部に貼り付けます。中性浮力か、ちょい浮きくらいなら、浮力体もそう多くは要らないと思いますし。」
「なるほど、それなら何とかなりそうだな。」
「それと照明は全周カメラと同軸に取り付ければ、一つのマウントで済みます。」
「それは良いが、電源はどうする？『金魚』には照明を点灯できるほどの電源容量のケーブルは無いぞ。」

「ケーブルは有りますよ。『ドリイ』のケーブルを使えば良いんです。あれなら十分な電源容量持ってます。『金魚』の曳航索に『ドリイ』のケーブルをクランプするだけで済むはずです。」
「ああ、それは良いアイディアだ。それなら何とかなりそうだ。黒岩、どうだ出来そうか？」
「可能だと思います。工作室を使って構いませんか？」
「ああ、占拠して構わないぞ。加工屋連中も全員使って良い。船の持ってる材料が必要なら、俺の方から機関長に話は通す。」
「それじゃ、早速始めます。」
「頼んだ。」

再調査（後書き）

ご意見ご感想お待ちします。

再調査（前書き）

第２８話です。

再調査

『金魚』の改造が終わるまで、「みこもと」は海底の音響異常域がどれほどの広がりを持っているのか、音響調査を行ったが、ピークから１０海里以上離れても海底から数十ｍの処まで音響の伝搬異常を観測していた。改造が終わるまでのおよそ半日以上かけて、東西南北を調査したが、この状況に変わりは無かった。「みこもと」の観測スタッフは想像以上の広がりに、一様に驚きを隠せなかった。まだ増殖のメカニズムすら判明していないと言うのに、僅か一月余りでここまで増えるのは脅威と言うほか無かった。プリオンに類似した構造を持つとは言え、プリオンと同様のメカニズムを持っているのかさえ判明していない。そしてさらなる脅威は、「金魚」を曳くことで判明した。改造された「金魚」は最初のアイディアの他に、黒岩独自のアイディアが盛り込まれていた。その一つが「みずなぎ」の水中翼システム用サーボ制御装置だった。「みずなぎ」用の予備を流用して「金魚」の走行深度を決める潜舵を可変式に改造したのだ。これにより一旦回収すること無く走行深度を可変出来る。それまでの「金魚」用ケーブルでは電流容量の問題で搭載できなかったが、「ドリイ」用ケーブルを使うことで余裕の出来た電流容量がそれを可能にした。また制御にも、本来「ドリイ」制御用の多芯ケーブルが使われずに遊ぶ形になっていたものを流用していた。
投入された「金魚改」は、音響トランスポンダにより「みこもと」船内の「ドリイ」制御室から１ｍ単位で制御が可能になっていた。

水深５０ｍを越える辺りからそれは見え始めた。例のＥＬと思しき発光現象だ。照明を点灯した全周カメラに捉えられたのは、海を埋め尽くさんばかりの、「みずなぎ」が発見した例の巨大生物だった。可変式の潜舵を操作して曳航深度を増すほどにその密度は上がって行き、水深２５０ｍ辺りではＥＬによる発光で照明が不要なほどに

密集していた。そして当然ごとくそれは起こった。
「金魚」と巨大生物との衝突が発生した。突如針路上に現れたそれを、深度を可変出来る様になったとはいえ、曳航されている「金魚」が避ける術は無かった。全周カメラの監視下、巨大生物の中に「金魚」が潜り込んでいく様はかなりシュールなものだったが、巨大生物の透明性がそれを和らげていた。しかし、巨大生物に完全に入り込んですら、曳航索にかかるテンションに大きな変化は見られなかった。「金魚」が生物に入り込むにつれ、それに先行する曳航索が生物の体を切り裂いて行く。しかし、濃いスープをナイフで切っても何も起きないように、切り裂かれた部分はが自動的にふさがって行く。不思議な光景だった。「金魚」と曳航索が通った跡に起きる発光現象でそこを通ったと判るだけであった。あの海底に蝟集していた「高粘度海水」と全く同じであった。そして、「みずなぎ」が受けた電撃は全く発生していない。
モニターを介してその一部始終を見た「みこもと」の研究員達は「金魚」が引き起こした状況でパニックに陥っていた。果たしてこの巨大な怪物は生物と呼べるのだろうか。

「吉村さん、これは個体ではなく群体だと思います。」海棲生物学の村木は吉村にそういった。
「それは判るが、なぜ、『みずなぎ』の時は、個体のような反応をしたのだろう。」
「そういう群体もあります。オビクラゲの仲間は。群体を構成する各細胞がそれぞれに分化して、別の役割を担います。これに少しでも似たものを探すとすれば、イシクラゲでしょうか。もっともこんなスープみたいなものじゃありませんが。」
「なるほど。しかしこの大きさで群体ってのもなぁ・・・」
「吉村さん、実験室での刺激試験で反応するものがかなり判ってます。『金魚』使って試験できないでしょうか。」
「それは第二段階にしよう。今は海中がどうなっているのか、が先

決問題だ。」
「判りました。刺激すると何か判ると思いますので、是非やらせて下さい。」
「判った。優先順位を上げておこう。」
「お願いします。」
「田中君、『ドリイ』を降ろそう。このままじゃ何も判らん。特に沈んだ潜水艦がどうなっているのか知るのは最優先事項だ。」
「でも大丈夫ですかね。」
「君も見ただろ。『金魚』と曳航索が入り込んでも何も起きない。『ドリイ』も大丈夫だ。それに最悪でも自律制御で浮上は出来る。」
「判りました。それでは『ドリイ』を降ろします。」
「頼む。当初は電池節約のためケーブル曳くのか。」
「はい。丁度『金魚』に使ってるんで、用意は出来てますから。以前のように動けなくなったら、切り離して自律制御させます。」
「そうしてくれ。長野、水中データー伝送は行けるか?」
「屈折率が判ってますから、大丈夫だと思います。マルチパスはキャンセルします。」
「よし、それじゃみんな動こう。『ドリイ』を降ろすぞ。」
「みこもと」は一旦停船して「金魚」を引き上げ、「ドリイ」を降ろすためのマニューバーに入った。海流を読んでおよそ沈没潜水艦直上と思われる位置へ船を動かし、「ドリイ」投入を開始した。

再調査（後書き）

ご意見ご感想お待ちします。

映像（前書き）

第２９話です。
９月、１０月は例年仕事が忙しいのですが、今年はどうやら地元だけで済みそうです。
何とかファイルを壊した分に追いつきました。

映像

「ドリイ」の観測ポッドには、全周カメラと放射線測定装置が搭載され、引き上げた「金魚」に使われた「ドリイ」用のケーブルが改めて繋ぎ直された。
「『ドリイ』、『ドリイ』、応答しろ。」長野が「ドリイ」制御室の通信端末に喋っていた。
「長野、なんだそれ？音声認識ができるのか？」
「ええ、帰港してから『ドリイ』のプログラムにちょっと付け加えたんです。」
「こちら『ドリイ』ステータスは正常。」「ドリイ」がボーカロイド風の声で答えた。
「『ドリイ』、こちら長野。音紋照合、確認しろ。」
「『ドリイ』了解。音紋照合合致、長野さんと認識。」
「よし、現在のステータスをダンプ。電池残量を音声で知らせろ。」
「こちら『ドリイ』。電池残量は、メイン９８％、予備１　９７％、予備２　９８％です。」
「なんだよそれ、長野。」
「えっ？ボーカロイドの声をパクったんですけど・・・」
「いぁ、そーじゃなくてだ・・・なんで返事する。」
「ああ、元々『ドリイ』はＡＩなんで、これまで文字表示してたのを音声読み上げにしただけです。」
「田中ぁ、これおまいも噛んでるの？」
「え、えっ、まぁ、そのぉ・・・・・」
「おまいらなぁ・・・・いいじゃん！！どこまで音声制御できるのよ。」
「基本的なコマンドだけです。複数コマンドを一度に音声で命令はできません。」
「ふーん・・・俺でもできるのか。」

「音紋登録すれば・・・・」
「早速やってくれ。」
「はい。『ドリイ』音紋登録。」
「はい、長野さん。音紋登録起動しました。」
「吉村さん、そのマイクに自分の名前を3回言って下さい。」
「吉村、吉村、吉村。これでいいか。」
「音紋記録、アクセスレベルをキーボードから入力して下さい。」
「アクセスレベルはA、全コマンド許可と・・・」
「登録完了しました。登録者：吉村主任、アクセスレベルA」
「吉村さん、そこのマイクで『ドリイ』に音紋照合と言ってみて下さい。」
「『ドリイ』音紋照合。」
「『ドリイ』了解。音紋照合合致、吉村主任と認識。」
「これで吉村さんの声でコマンドできます。」
「なるほど。ちょっと試してみよう。『ドリイ』カメラを左右に振れ。」
コマンドに従って「ドリイ」がカメラを左右に振ったのがモニターで確認できた。
「いいねぇ。これリンクが繋がってる限り自律行動中でもコマンド可能なのか？」
「ええ。ただし自律行動中は『ドリイ』の判断ルーチンが優先しますが。」
「うん、そうだろうな。さて、『ドリイ』を潜らせよう。」
「了解。」
ケーブルを曳いた「ドリイ」は慎重に深度を増していった。ドリイのカメラには巨大生物の姿が密集している様子が捉えられていた。水深１０００m付近で高粘度海水との境界面に到達した「ドリイ」はそれまでの重力沈下から、推進装置を起動して動力沈下に移行した。前回と違い温度上昇流を避けて沈下しているため、沈下自体は静穏なものだった。放射線測定装置の数値も何故かあまり上昇して

いない。海面までわき上がった温度上昇流の測定結果からすれば、酷く考えにくい状況だった。放射性核種が温度上昇流からあまり拡散していない事になるのだ。
水深１６００ｍ付近でケーブルを切り離した「ドリイ」は自分の持つ電池だけで残る１４００ｍほどを沈下し始めた。前回のデーターから最も効率の良い推進器回転数を取った事で、電池の消耗は最低限に抑えられていた。呼吸する空気を考えなくて良い『ドリイ』は沈下に時間を掛けても問題ない。分速数ｍという気の長くなる速度で海底を目指す『ドリイ』だったが、それでも３時間ほどで海底がフラッドライトの照明に現れた。海底から１０ｍ程度の位置を保ったまま、「ドリイ」は矩形捜索に移行した。現在位置を原点として、カメラの視野、視界を１０ｍ程度と仮定した上で、原点から１０ｍ進み、針路を直角に変え、さらに１０ｍ、これを繰り返し、原点に戻ったなら１０ｍ進んでそこを新たな原点とし、同じ動作を繰り返す。次に新たな原点に戻った時、最初の進行方向と９０度異なる方向に１０ｍ進み、同様な捜索を行う。スパイラル矩形捜索と呼ばれる手法だった。
海水の粘度による抵抗が大きいため、電池の容量が心配されたが、スパイラルを１周しただけで目的の潜水艦を発見した。大量のタンパク質が存在するにもかかわらず、海水の透明度が高い事が有利に働いたのだ。「ドリイ」は全体を俯瞰するため、一旦上昇し、フラッドライトの水中での限界付近からカメラを振って潜水艦の全体を視野に収めた。潜水艦は後部から中央部に掛けて巨人の手で握りつぶされた様に圧懐しており、後端から１／３くらいの部分に破口が見られた。全体像をカメラに収めた「ドリイ」は、破口部に向かって接近して行った。
破口部は他の圧懐部分のように、隔壁が破壊されなかった事で部材の延び限界に達し、溶接部分が裂けたものと思われた。間違いなく原子炉区画と思われた。原子炉区画は遮蔽のため、その前後の隔壁を厚くする。それが他の隔壁との強度差を生み、原子炉区画部分だ

けに裂け目が生じたものと思われた。
破口部分は一部に海水の濁りが生じていた。接近してみると濁りは内部ではなく、破口の外側から発生していた。多分、高温の海水に触れたタンパクが変異して透明性を失っているのでは、と想像されたが、接近を試みた「ドリイ」の放射線測定装置が極端に高い数値を示し、また「ドリイ」搭載の電子回路にエラーが生じたアラームが発生したため、それ上の接近ができなかった。
海中で電子回路にエラーを発生させるようなレベルの放射線量というのは、想像の難しいレベルの放射性物質が海中に放出されていることを示していた。このような状況から、「ドリイ」は破口から距離を取り、エラーを起こしたデバイスを遮断、自己診断に入った。自己診断の結果、メモリー素子の一つがビット欠けを起こしており、復旧出来ない事から、中性子線の存在が疑われた。α線やβ線では海中で「ドリイ」のように耐圧殻に囲まれた電子デバイスに影響を及ぼす事はできない。γ線は透過するかも知れないが、海水中であるため、電磁波であるγ線の透過距離は大きくないし、導体である耐圧殻の遮蔽効果も無視できない。可能性が一番高いのは中性子だった。しかし、それが示すことは、核燃料の環境露出だ。「ドリイ」管制室は、マニピュレーターに付いたＣＣＤカメラを故障覚悟（ＣＣＤは放射線感受性を持ち、高線量では受光素子が破壊される。）で線量が低い部分の裂け目から内部に入れることを決断した。マニピュレーター先端部の照明に照らされて見えた内部は酷いものだった。圧力容器が破断していたのだ。数ｍを隔てた裂け目からですら燃料集合体が直接見える状態だった。そしてそこから見えるチェレンコフ光の状態はこの燃料集合体がいまだ核分裂連鎖反応を起こしている事を示していた。
深刻な状況だった。周囲の海水は膨大な量であるため、冷却される燃料集合体は溶融することすらできず、燃料ペレットに含まれるＵ２３５と副次的に生産されるＰｔ２３９が尽きるまで、核分裂連鎖反応による放射性物質を排出し続けることになる。ここまでの状況

が判明した時点でＣＣＤカメラは映像を送ることが不可能になった。僅か数秒だったが、得られた情報は貴重だった。中性子がデバイスに飛び込んでも不思議では無い状況を確認した「みこもと」スタッフは、即座に「ドリイ」の回収に入った。

映像（後書き）

ご意見ご感想お待ちします。

専門家（前書き）

やっと３０話まできました。

専門家

吉村たちは「ドリイ」の回収を田中たち「ドリイ」班に任せ、今回乗り組んだ原子炉技術の専門家と状況の検討に入った。原子力安全委員会から委託を受けた原子炉技術の実務家である北村と原子炉設計、特に圧力容器の設計に携わる志村、放射線測定が専門の東京大学の鈴木の3名に、吉村、長野と海棲生物学の村木、海洋学の望月などが加わった状況の検討は陰鬱な空気に包まれていた。原子炉の状態が想像以上に酷いことがその原因だった。

口火を切ったのは志村だった。

「想像以上に酷いです。圧力容器の破断など、これまで試験ですら見た事がありません。おそらく、冷却水循環が停止して短時間で内圧が上昇し破断したと思われますが、圧懐してからでは周囲の水圧がありますから、破断できません。圧力容器の破断は圧懐前に起きていたものと想像します。」

「圧懐前に圧力容器が破断？？？そんなことがあり得るのか？それに『みこもと』の音響観測装置は推進器音停止から、圧懐まで捉えてる。1時間に満たない時間で圧力容器が破断するほどの内圧上昇が起きるのかね？」

「無いとは言えません。発電用原子炉などでしたら、そういう事が発生する以前に逃がし弁が開いて、ウエット・ベントという状態になります。これは圧力を上げている原因の水蒸気を格納容器下部にある、圧力調整室に導き、内部に貯めてある水の中に放出する事で、水蒸気と水という相による体積の差を用いて圧力を安全なレベルに保ちます。しかし、軍用の場合、この圧力調整を行う必要が有る、という状況はすでにエマージェンシーであり、多分それは海中に直接放出されることになるはずです。しかし、海には深さがありますから、どんな水深でも放出が可能だとは限りません。少なくとも放出出来る限りは、その水深での水圧より、放出される水蒸気の圧が

大きくなければ、放出はされず、圧力容器内圧は水圧と同じ程度に保たれます。つまり、この潜水艦は、圧力容器が破断する圧よりも深く潜ったと言うことになります。それでも、原子炉区画が先に圧懐して、水で満たされたなら、破断は起きなかったでしょう。内外圧が均圧すると思いますから、その時点で圧力容器に掛かる力はゼロになります。そうではなかったから、圧力容器が破断したのだと思います。」

「説明は理解できるが、本当にそんなことが起きるのだろうか。」

「潜水艦の原子炉は加圧水型と呼ばれるものがほとんどです。ですから、圧力容器には一定上の圧力が掛かっているのが普通の状態です。本来は圧力による破断は発生するはずがありません。」これは北村だった。

「しかし、圧力容器に使われる金属材料が不適切な場合、放射線脆性により、硬く割れやすくなります。これが発生しているなら、他の部分の圧懐による歪みが限界を超えた力を圧力容器に及ぼし、破断したことも考えられます。」

「なるほど。「漢」級はかなり設計の古い潜水艦だからあり得るかも知れないなぁ・・・」

「ところで、原因についてはもう判りましたから、今後の対策をどうするのか、検討しませんか。」鈴木だった。

「しかし、鈴木さん、『みこもと』が出来ることはほとんどありませんよ。この船は観測、調査する事が仕事で、観測対象に何か出来る様なものは何もありませんよ。」

「しかし、深海潜水艇があるじゃないですか。事実上、この深度で作業が可能なのは『かいえん』だけですよ。」

「鈴木さん、そりゃ確かに、深海潜水艇はその耐圧部分の厚さがありますから、普通の潜水艇よりは放射線遮蔽に優れているかも知れませんよ。でも、深海潜水艇を操縦するのは生身の人間なんです。いくらなんでも、いまだに核分裂連鎖反応が継続している炉心から数mの距離で仕事をさせることはできません。」

「しかし、やってもらわなければ、汚染が際限なく広がって、太平洋は死の海になりますよ。」
「あなた、本気でそれを信じておいでなんですか。」
「吉村さん、あなたこそ放射線の恐ろしさを知らない。だからそんなことが言えるんです。」
どうもこの鈴木はある種の人々の仲間のようであった。吉村はこういう人種には容赦がない。
「放射線の怖さですか？あなたは実際に放射線、特に微量の放射線で恐ろしい状態になった方を見た事があるんですか？何より、あなた自身、放射線測定をおやりになっているわけで、それはとりもなおさず、ご自身が被爆していると言うことですが、あなた自身が恐ろしい状態になっているのですか。」
「いや、大人は良いんです。子供が心配なんです。」
「いい加減にしませんか？太平洋の海水には一体どれだけの放射背物質が含まれていると思っています？それにこの潜水艦の核物質が付け加わったからといって、何ほどのことが起きるのですか？」
「放射性物質と言っても、核分裂生成物じゃありませんよね。核分裂生成物は放射線強度が違うんです。」
「あのですね、非常に重いいくつかの元素を除いて、現在有る放射性物質はその全てが核分裂生成物なんですがね。」これは志村だった。
「失礼ですが、鈴木さんのご専門は放射線測定とありますが、核物理学のご専攻なんですよね。？」北村が聞いた。
「いえ、私は放射線測定、つまり環境中の放射線強度の測定が専門です。専攻としては環境学ですね。」
鈴木を除く、他の参加者の表情がそれと判るほど変わった。
「ということは、測定結果を基に、放射線の持つエネルギー量を測定して、放射性元素の特定などはなされるのですか？」
「それは核物理の範疇でしょう。私はそんなことしませんよ。人間の命が最初でしょう。」

これは調査機構の大ポカだった。現在必要なのは元素特定に基づく拡散予測を行う事で、この原潜による核汚染が人間生活とどのように関わってくるのかは、それ以降の問題だった。放射線の持つエネルギーを測定することで、分裂した核種をある程度特定できる。核種が特定できれば、それらの比重や性質が判り、それを前提にどの程度の範囲に拡散するかが予測可能なのだ。シンチレーションカウンターでどれだけの崩壊がカウントされるかは、作業に携わる人間の安全以外、現時点ではあまり重要ではない。

これが原子力発電所などなら、燃料ペレットの組成が判明しているため、核分裂生成物の分布は簡単に予想ができるが、相手が潜水艦の原子炉、それも中国であるなら、燃料組成は全く不明である。ウランが分裂して生成される放射性核種は限られているためその元素特定に問題は無いが、核燃料に含まれる不純物等が中性子を吸収して放射性核種に変わるような場合は組成が判らなければエネルギーを測定して特定するしか方法が無かった。吉村達はそのための専門家と思い込んでいた。おそらく調査機構もそうだったのだろう。

環境の放射線測定など、別に機器さえ有るなら素人でも可能だった。「みこもと」には、今回のミッションのため、それこそ必要以上に半導体式カウンターは積み込まれていた。また水中での放射線測定はそれこそ専門家ですらあった。要するに鈴木は今回のミッションには不必要な人間であったのだ。それは「みこもと」に調査機構が深海でも使えるように改造した放射線の固有エネルギー測定装置が積み込まれていた事が誤解を招いたと思われる。機器のキャリブレーションなどは専門家でなければ難しい。校正されていない機器でいくら固有エネルギーを測定しても、それは元素特定には繋がらないのだ。

困ったのは吉村だった。このままでは拡散予測が特定の元素だけになってしまいそうだった。実質、最も拡散しやすいと思われる、ヨウ素１３４とセシウム１３１だけでも、それなりの拡散予測は可能だったが、重金属系の放射性物質についてはお手上げだった。幸い、

測定器のメーカーの人間が乗り込んではいるが、その校正を承認する科学的権威が居ない状態なのだ。結局、測定だけ行って、結果の数値の分析はネット経由で地上で行う事にし、校正の正否の判断は帰港してから校正記録を専門家に提出することで落ち着いた。多分、鈴木も東京大学というタイトルが無ければ、相手にもされなかったろう。東京大学の、という肩書きだけが信憑性を付与していたのだ。福島の原発災害以来、このような人間が増えていた。

専門家（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

異変（前書き）

第３１話です。
とんでもない仕事に巻き込まれて四苦八苦。それでも更新できる時間があるだけましなんでしょう。
多分、近々引っ越しをします。場合によってインターネット環境がしばらく無くなります。どうかご了承下さい。

異変

「みこもと」は「ドリイ」の撮影した潜水艦の映像をネット経由で本部に送り、原子力潜水艦に知見のある人間による分析と、今後の対処を問い合わせた。機構本部の返答は、現在「みこもと」にある機材で可能な限りの拡散防止を指示していた。また、同時に送った巨大生物の増殖については、現在、このタンパクの研究を複数の研究所で行っており、一次解析結果がもうすぐ出るらしいため、その結果を待ってさらに詳しい検討をすることになった。とはいえ、この生物については、最も知見を持つ人間は「みこもと」に乗り組んでおり、おそらく「みこもと」での限定された分析結果であっても、地上の研究所に与える影響は大きいと思われた。

吉村は「かいえん」艇長の長崎と助手の一の瀬、「みずなぎ」艇長の野瀬、助手の津田の４人と可能な拡散防止方法を検討していた。野瀬と津田が参加しているのは、「かいえん」の交代要員であるからだった。最初に５人が達した結論は、破断した炉心に対して取れる方策は無い点だった。艦外殻の裂け目から圧力容器までは数ｍあり、マニピュレーターでは届かない。放射線被曝の危険を考慮しないとしても、物理的に無理であった。そして、それが判ってしまえば、可能な方策は唯一、艦外殻の亀裂をどうにかする以外に無かった。「かいえん」には観測ポッドにアダプターを搭載することで、簡単な溶接作業などは可能であったが、３０００ｍを越える深海でそういう作業をする訓練などしてはいなかった。ＪＡＸＡの墜落したロケットエンジン回収などの実績があるため、そのような作業にも対応可能、という予算獲得のための方便としての面が大きかった。確かに、試験などではつり上げのためのリップ取り付け作業なども行っており、溶接作業を行った事が無い訳ではなかったが、船体亀裂を塞ぐ、などという作業とは次元が違う話だった。

さらに生物学担当からは、タンパクの凝集部分で溶接作業を行えば、

さらなる凝集と電撃の危険があり、現在の凝集度であるならば、雷の直撃以上の電撃になる可能性が大きいという警告が寄せられていた。八方ふさがりだったが、亀裂を塞いだ場合、炉心部分で水蒸気が発生しても、水圧による沸点の上昇、低い周辺海水温による発生水蒸気の復水速度などから、水蒸気による均圧は発生しないのではないか、と予測されているため、漏出の低減に関しては非常に有効と思われたのも確かだった。

「みこもと」が漏出対策に頭を悩ませて居た頃、「なつしま」では放射線計測の専門家が首を傾げていた。１５万２千ベクレル／Ｃｍ＾２という高い放射線を中心部で観測したにも拘わらず、その広がりが大きくなかったのだ。僅か５０海里ほどで、規定値の１００ベクレル／Ｃｍ＾２にまで線量が低下した。あり得ない事だった。すでに潜水艦の沈没から１ヶ月近くが経過している。コンピューターによるシミュレーションでも小さく見ても広がりは数百海里の範囲に及ぶと思われたからだ。海水温の違いによる局所的変動を疑った「なつしま」はさらに１００海里地点まで足を伸ばしたが、そこではすでに１０数ベクレル程度の放射線しか検出されなかった。

「なつしま」はさらに周辺を１辺１００海里の区画に分けて観測したが、わき上がりの中心から南西に５０海里程度、幅３０海里程度の範囲だけが規定値より大きな値を示すだけであった。すでに「みこもと」の調査結果は「なつしま」にも知らされており、炉心が海中に露出している状況で、この程度の汚染の広がりは信じられなかった。

「なつしま」はこの汚染の広がりの異常さを「みこもと」に伝え、海域汚染の垂直分布の調査を早急に行うよう依頼した。「なつしま」は何らかの原因で、汚染海水が急激に沈み込んでいる、と想像していた。

「なつしま」からの連絡を受けた「みこもと」では、漏出対策を後回しにして、「なつしま」からの依頼を調査するかどうかの検討会

議が開かれていた。
「『なつしま』からの連絡で、汚染海域が異常に小さいという事が判明しました。『なつしま』では、汚染水の沈み込みを疑っており、中層深度域に大きな広がりがあることを危惧しています。「なつしま」の搭載機器では２５０ｍより深い層の計測はできません。汚染水域の広がりは沿岸諸国に大きな影響を与えます。出口の見えない漏出対策を一時打ち切って、早急に調査すべきと考えますがいかがでしょうか？」吉村が口火を切った。
「現状では亀裂の閉塞は手持ち材料だけでは難しいでしょう。また溶接作業が難しいのならば、さらに手段は限られます。汚染源を絶つ事は非常に重要ですが、材料がなければ何もできません。少なくとも溶接を用いず亀裂を閉塞できる手段が整うまで、汚染状況を調べる事は次善の策と考えます。」志村が吉村に賛成した。北村も
「そうですね。今の『みこもと』には打つ手が無いと思います。水深２５０ｍ以上の層を調査できるのは『みこもと』だけですから、そちらに力を注いで、もし大きな広がりが見つかるのならば、その調査データーは貴重なものとなるはずです。」
専門家の亀裂閉塞には打つ手が無い、と言う意見に一人を除いて反対意見は無かった。その反対意見を開陳したのは、本来ここに呼ばれるべき資格の無い人間だった。
「何を言ってるんですか。海中に壊れた原子炉が放置されて放射能をまき散らしているんですよ。それを止めなければ太平洋は死の海になるんです。放置できる問題じゃないでしょ！！」
「鈴木さん、あなたには具体的な亀裂閉塞の方法があるのですか？」
「そんなことは私が考える事じゃ無いでしょ！あなた方の仕事じゃないですか。その為に給料貰っているんじゃないのですか！」
「え～、鈴木さんは具体的方策をお持ちじゃないのですね。他にどなたかご意見はありますか？」
「無視するんですか？私の意見を。見過ごせない権威主義ですね！！」

「あ～、保安員諸君、入ってくれたまえ。鈴木先生を自室までご案内してください。それでは、会議を進めます。他にご意見がありますか。・・・・有りませんようなら、本船はこれより『なつしま』要請の調査を行います。最初の観測は『金魚改』による広域観測です。準備をお願いします。」

異変（後書き）

ご意見ご感想お待ちします。

潜水（前書き）

引っ越しのためインターネット環境がありませんでした。更新が遅れましたことお詫びします。
やっとケーブルＴＶの引き込みが終わり、無線接続を立ち上げましたが、携帯端末によるインターフェア（ＷｉＦｉアクセスを発見したＡＰ全てに行う設定のため）が酷く、安定的に繋がるまで時間が掛かってしまいました。まだこの国にはスマートフォンは早いのかも・・・・
それでは第３２話をどうぞ。

潜水

「みこもと」は「金魚改」を曳航しながら、速度7ノット程度で、「なつしま」が作成した１００ベクレル線に沿って移動していた。
「金魚改」の曳航深度は２５０ｍ付近であった。
「吉村さん、ここまですでに３０海里ほど曳いてきましたけれど、深くなるほど検出放射線量が少ないんですが？」モニターを見ながらシステム担当の長野が言った。
「うん、変だな。それでも何らかの原因で非常に局所的な沈み込みが起きてる可能性は否定できない。もう少し曳いてみよう。」
「了解。」
しかし、１００ベクレル線辺縁部を１００海里ほど曳航した後でも、深くなるほど検出放射線量が少なくなる現象は変化が無かった。
「志村さん、どうも理解に苦しむのですが、水深２５０ｍと水深１０ｍで４０ベクレル以上放射線量が減少しています。これについて何か知見はありませんでしょうか？」
「吉村さん、基本、私と北村さんは原子炉の機構設計、放射線防護設計が専門ですから、拡散についてそれほどの知見をもっているわけじゃありません。本来なら鈴木さんがそれを担うべきなんですが、あの方じゃ無理だと思いますし・・・」
「吉村さん、放射線防護という観点から見た場合、こういうことは、なんらかの吸着剤を使った時に起きます。例えば水槽に汚染水を入れて、底部に吸着剤を設置した場合、表面の放射線量が高く、底部に行くほど放射線量が下がる、という現象ですね。ただ、元々の汚染水に含まれる放射線核種の量は変わりませんので、吸着剤の線量が大きくなっているわけですが・・・」
「北村さん、ということは、この海域でその吸着を起こす何かがあるという事になりますが。」
「ええ、そうなりますね。本来でしたら、汚染海水を分析して放射

性物質を特定する必要があるのですが・・・」
「取りあえず、搭載した質量分析機での分析は行っています。メーカーの方が乗り込んでますから、操作はできますのでね。」
「どんな結果が出てるんでしょう。」
「これは皆さんに報告していない理由なんですが、表層水、つまり一番線量の大きな部分では、検出されるのはセシウムと僅かなヨウ素だけです。ラドンなどはこの辺まで来ると測定誤差に埋もれているようです。ほとんど９０％以上がセシウムですね。」
「ああ、それは当然ですか。Ｕ２３５の分裂生成物ですから、セシウムが一番多く検出されるのは当たり前ですね。」
「ええ、それで報告しなかったわけなんですが、今、ちょっと思いついて、長野に１００ベクレルまでの海域に含まれるセシウム総量をシミュレートさせてみてます。もうすぐ結果が出ると思うのですが・・・志村さんと北村さんにお願いしたいのですが、潜水艦の原子炉が今までずっと臨界状態だったとして、どのくらいの放射性セシウムが出てくるのか、試算お願いできませんか？」
「これまでの情報では、すごく大雑把な計算しかできませんですけれど、構いませんか？ああ、吉村さんの意図するところは判っているつもりです。」
「それなら話は早い。早速お願いできますか？」
「判りました。
こうして長野のシミュレートと北村の概算結果を付き合わせて判ったのは、汚染海域に存在するセシウムの量が異常に少ない事だった。およそ1千倍近い開きがあったのだ。この結果は原子炉技術者に大変な驚きを持って受け取られた。
「吉村さん、シミュレーションの信頼性は確かなんですね。」
「ええ、おそらく北村さんの概算程度には信頼性はあると思います。」
「誤差を一桁としても、大変な開きですね。何らかの吸着作用が働いているとしか思えません。」

「沈没地点の海底は深海軟泥、炭酸カルシウム、つまりプランクトンの死骸が主成分です。海水は例のタンパクを除いて特異な組成ではありませんね。」
「とすれば、結論は一つではないでしょうか？例のタンパクが放射性物質を吸着している。」
「確かにこれまで発見されていないものであるのは確かですが、そんな能力までタンパク質が持てるのだろうか・・・」
「ともかくもサンプルが必要ですね。」
「その通りです。潜水調査を行いましょう。」

「みこもと」は潜水艦沈没点付近へ戻り、「かいえん」の潜水準備作業に入った。同深度での作業は「ドリイ」でも可能だったが、人間が乗らない事で小さく、安全係数を低く取ってある「ドリイ」の耐圧殻は「かいえん」と比べると薄く、放射線遮蔽の効果が低かった。高粘度海水中ではケーブルを引けないため、前回の調査でいくつかのメモリーにビット異常を起こした「ドリイ」を自律モードで潜水させる事は最悪喪失を覚悟しなければならなかった。「かいえん」は有人であるため、あまり線量の高い部分に近づくことは出来ないが、それでも５０ｍｍを越える特殊鋼耐圧殻は放射線遮蔽にそれなりの効果があった。
準備が終わった「かいえん」は艇長の長崎と助手の一の瀬により潜行を開始した。
「こちら『みこもと』、『かいえん』聞こえますか。」
「こちら『かいえん』感度良好。現在深度２５００ｍ、沈下速度０．９ｍ毎分。海水粘度は前回潜入した時よりも高いようだ。艇内放射線量は０．７マイクロシーベルト。問題は無い。『みこもと』どうぞ。」
音声オペレーターを担当しているのは「みずなぎ」助手の津田だった。彼は「かいえん」の制御システムにも精通している。長野と志村、北村が見つめているモニターには艇外の映像にスーパーインポ

ーズされた艇内外の放射線量が表示されている。それによれば、艇外の放射線量は艇内のそれの５０倍程度に達していたが、状況から考えれば、かなり低い値であった。
「かいえん」は「ドリイ」が設置した音響トランスポンダを目標に潜水艦に接近して行ったが、長崎は前回の潜水とは様相が異なっていることに気づいた。潜水艦に接近するにつれ海水の透明度が落ちているのだ。すでにフラッドライトの先は数m程度の見通ししか無かった。
「『みこもと』こちら『かいえん』、なんか前回と様子が違うんだが・・・」
「『かいえん』、『みこもと』。どう様子が違うのですか。」
「『みこもと』、透明度が非常に悪い。前回はこんなに透明度が悪くなかったのだが。」
「『かいえん』、『ドリイ』が潜水したときはそれほど悪くなかったようでしたが？」
「『ドリイ』よりもライトが強いから、遠くまで見えるんで気がついた。」
「なるほど。それでどう透明度が悪いんですか？沈積泥が巻き上がってる感じですか？」
「いや、泥は巻き上がって無い。ライトが暗くなった感じだ。それでも近距離だと、いつもと同じだから、ライトは正常と思う。光が届きにくくなってる感じだ。」
「了解。潜水艦は見えましたか。」
「いや、まだだ。もう２０mは切っていると思うが艦体はまだ確認できていない。」
「おかしいですね。２０mなら見えても良いと思うのですが。」
「１５m、まだ見えない。１０m、見えた。なんだあれは！！」
「どうかしたか。長崎さん。」吉村がマイクを奪うようにして呼びかけた。
「吉村さん、艦体の亀裂部分が見えない。亀裂部分が真っ黒な海水

で覆われている。」
そのとき放射線量警報装置がアラームを鳴らした。
「現在、艇内線量２０ミリシーベルト、蓄積線量からここに居られるのは後１０分程度と思われます。」
「判りました。黒い海水のサンプル採取だけ行って、至急その場を離れて下さい。」
「了解。サンプルはすでに採取済み、直ちにこの場を離脱します。」
「かいえん」は浮上シークエンスに入り、潜水艦の近くを離れた。
浮上中に採取したサンプルを防護容器に収め、浮上後の汚染を極力防止する措置を取り、順調に浮上した。

潜水（後書き）

ご意見ご感想お待ち致します。

タンパク（前書き）

更新が遅くなりました。いまだインターネットの接続環境が安定しません。無線ＬＡＮを止めて有線接続に切り替えようと考えていますが、各部屋への配線でどうしても借家の壁を貫通する必要があり、躊躇しています。

お金持ちが多い閉鎖コンドミニアムで街自体の治安は良くなりましたが、インターネットの世界では逆に治安が悪くなってます。先日はＷＥＰのパスを割られてパス書き換えられてしまいました。今はＳＳＩＤを隠していますのでそこまでのアタックは無くなりましたが、ＷＡＰにすると家族のＰＣ全てを無線が落ちる（停電は良くあります。）たびに面倒見無いといけませんので、これまた躊躇しています。

それでは３３話です。

タンパク

「かいえん」が持ち帰ったサンプルは直ちに船内に設けられた隔離施設で分析が行われた。サンプルは非常に高い線量を記録していた。「かいえん」も相当に汚染されていたが、仮設された洗浄装置により除染され、作業に支障が無いレベルにまで線量は低下していた。隔離施設での分析により、プリオン類似タンパクがその折りたたみ構造の中に、複数の放射性核種を取り込み、その放射線による構造変化がタンパクを可視光線域で不透明とするため「黒い海水」が発生した事が判った。また、タンパク外殻部の受容体構造が変化し、それまで最大で2カ所であった他タンパク分子との結合点が8カ所に増え、このため放射性核種を構造内部に取り込んだもの同士の結合が放射性核種が多い処では飛躍的に増加し、黒い海水の塊を作る結果になった事が判った。

このような分析結果から、周辺海域の汚染状況がシミュレーションと合致しない原因は、このプリオン類似タンパクが拡散すべき放射性物質を取り込んで凝集したためと考えられ、それを折り込んだシミュレーションでは、現在の拡散状況に非常に近い結果が得られた。さらに、このような凝集を起こした後、放射性核種を取り込んだタンパクが減少するにつれ、一般のものとの結合が多くなり、凝集外殻部には放射性核種を持たないタンパクが集まり、最も遮蔽が難しいγ線でも、その内部に存在する起電機構がγ線エネルギーを吸収するため外部への放射線量が著しく減少する事が判明した。ただし、放射性核種を取り込んだタンパク自体の放出線量は取り込んだ核種の崩壊による放出線量と大差なく、黒い海水部分は非常に高い線量を示していた。

これらの分析結果を受け、「みこもと」は拡散下流域での潜水調査を行い、凝集核となる黒い海水を確認、さらにその近辺ではタンパクの再生産速度が上昇している事も確認された。このタンパクの再

生産はプリオンと同様な機序で行われ、構造外殻に存在するアミノ酸受容体へ特定のアミノ酸が結合することで連鎖結合が始まり、ある点で長く伸びたアミノ酸結合が折りたたみを開始、タンパク分子が再生産される、という形である。これは利用できるアミノ酸の存在が多い場所では、相当に急速に再生産が行われる事を意味していた。そしてそのアミノ酸の供給源は、海洋中心部では海棲生物に由来し、沿岸部では陸上の人為、自然活動からのものに由来しているようであった。そして、現在の海域では、放射線により分解されたタンパク自身が供給源になっているらしく、線量の大きい潜水艦近傍の海水中からは、１００海里ほど離れた海域の海水の約２０倍ほどのアミノ酸が検出されていた。

しかし、分析中に発見された放射性物質を取り込んだタンパクの性質はこれらの発見を全て霞んでしまわせるほど、重要な示唆に満ちていた。なんと、このタンパクは放射性物質を取り込んで変成した結果、電気的刺激による整列が発生すると、双方向スイッチとして働くことが判ったのだ。これまで、タンパクが別のタンパクと結合する受容体は表面上に８カ所、正８面体それぞれの頂点の位置に確認されていたが、それが一つの正４面体だけになり、ただし各頂点は二重結合が可能になっていた。これは放射性物質で変性したタンパク同士で双方向の電流伝達が可能になった事を意味する。そして、一つの頂点へ二重結合したタンパクの状態により、他の結合点のタンパクの状態が変化するのである。これは明らかに演算素子としての動作であった。およそウイルスの半分ほどのサイズの生体演算素子と呼んでおかしくなかった。現状の潜水艦亀裂部周辺では、このような性質を持つタンパクが相互に

無数に二重結合しており、一種の演算装置として働いていておかしくなかった。おそらく、タンパクは現状の外部刺激の状態で最も効率的な増殖を行えるような素子の組み合わせを模索しているかも知れなかった。そしてそれは現状の増殖状況がそれを裏付けていると言えた。

「吉村さん、これはちょっと予想外の展開です。さすがに生体演算素子というようなものが出来上がるとは想像も出来ませんでした。」生物学の村木は明らかな困惑を表情に浮かべて吉村に報告をしていた。
「そうすると、村木の意見としてはすでに生体コンピューターが生成されていておかしくない、という事か。」
「ええ、そう考えた方が合理的です。今は潜水艦周辺のみですが、これがどこまで拡張されるか、増殖速度を考えた場合、ちょっと想像が付きません。」
「吉村さん、このタンパクの構造は、生体コンピューターというより動物の脳の構造に近いですよ。コンピューターに使われるスイッチング素子は、マトリックスの結節点としての機能しかないですが、このタンパクは脳の神経節のような働きをすると思います。」
「望月、すると何か、将来的には意志を持つ可能性が有ると言う事か？」
「ええ、そうなってもおかしくないでしょう。」
「しかし、だとすると、人間の神経細胞よりはるかに小さいこのタンパクが、人間の脳の数千倍、数万倍の容積で凝集する事になるぞ。神経節の量から言って、人間の脳の数億倍になっておかしくないぞ。」
「ええ、仮にこのタンパクが人間の脳と同様の働きをするとするなら、そのキャパシティーは人間の数億倍になるでしょう。」
「それは知的な面で人間を凌駕する存在と捉えて良いのか？」
「それは判りません。基本的にはどのようにプログラミングされるか、に寄るでしょう。鯨の脳は人間よりはるかに多い神経節を持ちますが、人間に知力の面で勝るとは思えません。このタンパクもその特異性から、鯨の脳のような発展をする可能性はあります。」
「とはいえ、それは知性を持つ、たとえ鯨並みとしても、そういう事になる。その上でその容量、これは思考速度なのか記憶容量なのか良くは判らないが、それが人の脳の数億倍であるなら、いつかは

人を凌駕する事になるのではないか。そう考えるのがあくまでも普通の人の考えと思うが。」

「それは否定も肯定もできませんね。」

タンパク（後書き）

ご意見、ご感想お待ちします。
前書きに書いた理由で、更新のペースは落ちると思います。ご寛容下さい。

変異種（前書き）

第３４話です。
相変わらずインターネットの不安定は変わりません。まぁ、投稿できるだけ良しとしておきます。

変異種

この頃、北西太平洋一帯で軍事的には一大問題が発生していた。この海域でのタンパクの問題を知るのは米海軍だけであったが’、米国防総省と米海軍は先の新型原潜遭難を相当に深刻に受け止め、ハワイより西での原潜の活動の中止を決定、また電撃による基準電位変動による影響を最小限に抑えるための対策を全ての潜水艦に施そうとしていた。そのため核パトロール中のオハイオ級戦略原潜を初めとして、通常の哨戒行動を行って居る原潜全てを一旦米西海岸の基地に呼び戻していた。この穴埋めのために、水上艦艇がそれまで原潜が受け持っていた区域の哨戒に当たることとなり、一時的ではあるが、太平洋艦隊に所属する水上艦が中露のＥＥＺ近辺まで出張って哨戒行動を始めたことから、中露、特に中国が相当な疑心暗鬼に陥っていた。米原潜の基地への集結を偵察衛星により察知した人民解放軍海軍は、水上艦の地域への増加を米国の新たな軍事行動の前兆と捉え、また先の潜水艦沈没をこの動きに連動したものと断定、準戦闘態勢に移行し、稼働潜水艦のほぼ全てを哨戒に当たらせていた。しかし、人民解放軍海軍には先の潜水艦沈没の原因調査を行うための装備は存在せず、タンパク巨大生物については全く知見を持たなかった。このため電撃対策を行った潜水艦は無く、ついに２隻目の犠牲が発生してしまう。それはハワイ、オアフ島付近での哨戒任務に当たるはずの「漢」級原潜だった。概略の遭難地点は、先の潜水艦の沈没点から６００海里以上南東に下った、ミッドウェー島とウェーク島を結んだ中間点付近だった。中国政府はこの潜水艦喪失について、武力攻撃の可能性を指摘し、武力攻撃による事が明確になった場合、報復を行うと明言した。そして、完成したばかりの空母を含む艦隊を太平洋に進出させた。

これに対して米海軍も太平洋艦隊から二つの空母任務群を北太平洋海域に遊弋させ、中国艦隊への警戒を行う事態となり、北太平洋は

一触即発状態となった。
このような状況では「みこもと」も海洋調査など行えるはずがなく、中国の政府発表を受けて帰港命令が発出され、僚船の「なつしま」ともども、母港の横須賀へ向かっていた。そして出発時には別々だった調査参加の自衛艦が「みこもと」「なつしま」を中心とした小さな輪型陣を組んで併走していた。
しかし、その帰港の間も、後部デッキにコンテナとして搭載された放射線隔離施設では、「みこもと」研究陣による変異型タンパクの分析が続けられていた。隔離施設は４０フィートコンテナの内部を仕切り、中央部に防護区画、両端部に二つの操作室と必要機器を設置してある。防護区画は白色ポリエチレン内張の外に厚さ２．５Ｃｍの鉛の層、続いて厚さ２５Ｃｍのホウ酸水の層、その外側に厚さ５Ｃｍの蛇紋岩コンクリート層、最後に厚さ３０Ｃｍのポリエチレン充填層、外壁は１Ｃｍ厚のステンレス鋼板で形成されていた。内部の仕切りも同様な構造だったが、５Ｃｍ厚の鉛ガラス３枚でホウ酸水層と空気層を挟んだ形の作業用のぞき窓が両端の操作部それぞれに２カ所設けられていた。防護区画内は常に大気圧より内圧が低く保たれており、作業資料の出し入れはエアロックを介して行われるようになっていた。分厚い放射線遮蔽層のため、防護区画内部は僅かな空間しか無く、その内側に作り付けられた４基のマニピュレーターにより各種作業が行われる。計測装置端末も全て作り付けられていたが、ＣＣＤによる画像だけは、ＣＣＤが放射線により破壊されるため作業用のぞき窓のこちら側にしか無かった。
高い放射線量を持つ変異型タンパクはこのような施設で分析が行われていた。確かに地上にある施設と比べれば、少々見劣りするし、作業エリアも限られたものだったが、必要な実験、分析は可能だった。
村木と望月が中心となって行われた分子生物学的実験、分析の結果、放射性物質を取り込んだ変位型と通常型の差異は、放射線によるタ

ンパク分子構造の結合破壊がきっかけになって発生している事が判明した。増殖のためのアミノ酸受容体が海中のアミノ酸分子を取り込んで連鎖結合を開始すると、特定のアミノ酸が結合した時点でアミノ酸鎖の折りたたみが発生し、その時、その折りたたみ構造に偶然に放射性物質を取り込むと、不規則にアミノ酸結合が破壊される。その時特定の結合部位が破壊されることで結晶構造の変異が起き、正４面体を二つ逆に組み合わせた形から、二重に重ねた形に変化する。それ以外の結合部位の破壊ではタンパクそのものが破壊され、アミノ酸連鎖は分解する。正４面体を二重に重ねた構造は放射線による構造破壊に最も強く、通常型の２０倍以上も生存確率が高い事が判った。この変異型は二重結合の為か、外的刺激が無くても相互に結合し、また結合密度も高く、通常型のように単に粘度の高い海水レベルではなく、固体と呼んで差し支えない密度に達し、海中でなら特定の外形を保持できる程度の強度を持っていた。

このような状況から、沈没潜水艦付近の再調査が急務になっていたが、現在の海域の状況では海洋調査など行えるはずもなく、地上の整った施設でサンプルを再分析する以外出来ることはなかった。また、２隻目の沈没潜水艦の情報も入っており、そちらも早急に調査する必要があると思われたが、事情は同じだった。

ともあれ、「みこもと」と「なつしま」は母港、横須賀に帰着した。船体の除染は本土２００海里以遠ですでに行い、船内には洗浄で発生した高レベル放射線量の汚染吸着剤が残されていただけであった。洗浄水は吸着剤を使用した除染装置で除染され、自然放射線レベルにまで放射線量が減少した事を確認の上、生活用水として再利用していた。船の上で真水は貴重な物資なのだ。

帰港前に各部の線量測定を行い、ホットスポットの有無を確認した上で、両船は調査機構の岸壁に接岸した。接岸とほぼ同時に高レベルの放射線量を持つ変異タンパクのサンプルは厳重に放射線防護を施されたキャニスターに収められ、分析可能な施設を持つ原子力研究所に移送されていった。村木と望月はこの移送に同行して研究所

に出向き、研究所の放射線の専門家及び理化学研究所から出向いた分子生物学の専門家と共同で分析に当たるため、接岸と同時に「みこもと」を後にしていた。また今回乗り組んだ放射線、原子炉関連の専門家も同時に退船していった。
「吉村さん、どうもこれは再調査でしょうかね。」
今回の調査データーを生データーのまま地上のデーター分析システムに転送する作業を行いながら、長野は報告書作成のための数値データーを選別している吉村に話しかけた。
「ああ、これだけの発見だ、再調査は絶対に必要だ。問題は海域の状況だろうな。」
海自の滝川を通じて、現在の北太平洋の軍事的状況を知らされている吉村はそう答えた。
「しかし、なぜ中国海軍は事故という判断を放棄したのでしょう？」
「まぁ、彼らには彼らの事情というものがあるのだろう。どこの国でも同じだろうが、責任の所在を外部に求めるのは、一種の防御本能と言えるからなぁ・・・」
「しかし、1隻目はまだしも、2隻目は米海軍が潜水艦を引き上げた後ですよ。米海軍に責任転嫁するのは難しいんじゃ無いですか？」
「そこなんだが、前回、我々が発見した潜水艦は極秘開発で米国内ですら限られた人間にしか存在が知らされていない。こういう事があるのなら、中国としてもリストにある潜水艦全てが港に戻った事を確認したからと言って、それが全てと信ずるわけにも行かないだろう。」
「しかし、昨今の報道では、米海軍が引き上げた後、海自の潜水艦が撃沈したのではないか、という話になってますね。」
「うん、俺はこの話は中国一流の情報戦だと思うな。防衛省としても潜水艦の行動記録を提示するわけには行かんだろうし。」
「開示してしまえば、日本の潜水艦の行動が明らかになりますしね。しかし国会で追及が始まって居るようですよ。」
「困ったもんだ。ただ今の内閣だと開示しそうで怖いな。」

「海自の友人の話では、海自所有の魚雷の総数は予算書で明らかだから、それと現在数を比較して使用された魚雷が無い事を証明するみたいな事を言ってましたがね。」
「まぁ、それも無理だろうな。数などどうにでもごまかせる、と言われた時にそれへの反証は出しようがない。」
「自分たちが承認した数をごまかしている、というのも何か矛盾したように思いますが・・・」
「連中はそんなことは気にしないよ。1分前に言った事でも、都合が悪ければ言っていない、と言い張る連中だ。」
「しかし、ひょっとすると我々も巻き込まれる可能性があるみたいですよ。『みこもと』の調査記録を開示しろ、と言っているみたいですし。」
「別に『みこもと』は半官の調査船だから、記録の開示は依頼元、この場合は国だが、そこがOKならば問題は無い。特に今回の調査記録は依頼元の国だけの判断で開示できると思うしな。問題は変異タンパクだろう。ただし、これは調査目的とは微妙に異なる発見だから、開示しなくても問題は無いだろうと思うがな。問題になるなら前回調査だろう。こっちの情報開示は米軍が絡むから簡単には行かんよ。」
「そうですねぇ・・・しかし、それも開示せよ、と言ってくると思いますがね。」
「そりゃ無理ってもんだ。依頼元は米海軍で、調査機構としては報酬も受け取っている。最低限、裁判所の命令が無ければ守秘義務違反に問われるからな。その上で、裁判所が開示命令でも出そうもんなら、今度は外交問題だ。いくら連中でもそのくらいの常識はあるだろう。」
「そうだと良いんですが・・・」

変異種（後書き）

ご意見、ご感想お待ち致します。

政治（前書き）

第３５話です。
相も変わらず、我が家の無線ＬＡＮに攻撃をしてくる輩が居ます。
やっとおぼろげですが、どこから攻撃が来ているのか判り始めて来ました。今、特定するための無線装置を作り始めています。無線ＬＡＮの周波数ならおそらく５ｍくらいの誤差で特定できるはずです。

政治

この長野の心配は的中した。与党国会議員が国政調査権を盾に「みこもと」の調査結果の開示を求めてきたのだ。
「ですから、お渡しできる資料はそれだけしかありません。」
「嘘です。もっとあるはずです。国会議員の国政調査権に基づく請求を拒否なさると刑事罰がありますよ。」
「なんと言われようと米海軍からの依頼で調査した結果は私どもから渡すわけには行きません。どうぞ米海軍にご請求願います。」
「私は米海軍ではなく、あなたに要求しているのです。今すぐ出しなさい。」
「あなた、頭大丈夫ですか？米海軍の依頼に基づいた調査資料の所有権は我々には無い、と言っているのです。所有権を持つ方に請求して戴けますか。私は所有権者ではないので、私に請求されても意味がありません。」
「失礼な！私は国会議員ですよ。あなた程度、いつでもクビにできるんですよ。資料を出さなければあなたはクビですよ。」
「やってみたらどうですかね。半官とは言え、立派な民間組織の構成員を国会議員の名をもって解雇できるというならやればいい。」
「後で悔しがっても知りませんよ。」
「ええ、国会議員ってのも、決して安泰な地位じゃないですからね。」
「脅すつもりですか？」
「どっちがでしょうね。申し訳ありませんが、このやりとりは全て録音されていますが？」
「あら、事前に通告のない録音は違法だと思いますが？」
「え？お渡しした承諾書に全て書かれているはずですが、お読みにならなかった？」
「くっ・・・」

「残念ですが、お渡しした資料以上のものはこちらからはお渡しできません。後は米海軍の許可を持参戴ければお渡し致します。ただし、私どもが所有する資料は全て一時資料で、処理は米海軍が行って居ます。デジタルデーターの処理はそちらでお願いする事になります。また資料には米国家安全保障省による保安処置が施されています。その解読もそちらでお願いする事になります。これ以上無ければ失礼致します。」
「ちょっと待ちなさい。あなた日本国民でしょう。日本の国会が求めるものを出さないなんて、非国民じゃないですか。」
「申し訳ありませんが、あなたに言われたくありません。私は帰化した日本人ではありませんので。それでは。」
吉村は食い下がろうとする中国名の国会議員を尻目に応接室を出た。同席した調査部長は顔色を七色に変えながら、「吉村君、おい吉村君！」と呼び止めているが無視した。
廊下に出た吉村を追いかけてきた調査部長は、怒気を孕んで吉村を詰問した。
「吉村君、いくら何でも国会議員に失礼じゃないか。」
「部長、また3年前の繰り返しをなさるおつもりですか？」
「いっ、いやそういうつもりではないが、もう少し言いようがあるんじゃないかね。」
「どんな言いようがあるのですか？データー自体、米海軍の所有物であることは部長もご存じのはずですが？」
「そっ、それはその通りだが、魚心あれば水心ってことわざもあることなんだから・・・」
「部長、米海軍と敵対して今後有効な海洋調査が行えるとお考えですか？それとも、調査機構の存在意義はもう無いとでも？」
「いっ、いやそこまで言うつもりはないが・・・・」
「であるならば、きちんと筋は通していただかないと。しかるべく許可を持ってくるのなら、別に資料を渡すのにやぶさかではありませんが、国会議員なら何でも可能と思われてはこちらが困ります。」

「いや、それはそうなんだが・・・・」
この調査部長は3年前、調査部次長職あった当時、「みずなぎ」開発に関わる米海洋研究所への情報提供に対して吉村追及の最右翼であった一人だった。しかし、「みずなぎ」が成功した事で手のひらを返したように態度を変え、最終的には「みずなぎ」開発の功績をもって、前部長が専任理事に就任して空席となった部長職を引き継いだのだ。3年前とはその時の事を言っていた。専任理事となった前部長は当時の次長の部長昇進を吉村に相談したのだ。「みずなぎ」開発の真の功労者が吉村であることは、機構内部のみならず学会や各探査会社などでも公然の事実だったからだ。それを追い落とすかのような主張を繰り広げた次長を部長に起用する事が今後の活動に影響するのなら、専務理事としては考えなくてはならない。そこで現場の責任を一手に引き受けている吉村に相談した。
「吉村君、忌憚のないところを聞かせてくれないかね。」
「理事、次長は別に悪意を持って私を誹謗したのでは無いでしょう。私がしたことは本来なら調査機構が独占できるものを、提供したわけですから、非難はされて当然です。私が困ったのは、いくら独占したとしても、特許の訴訟で負ければ『みずなぎ』は完成できないと言う点を理解戴けなかった事です。しかし、それは時間が解決すると思います。『みずなぎ』はすでに実績をあげています。失敗したわけでは無いのですから、次長も理解をしていただけると思います。」
「うむ。君がそう言うのなら問題はなかろう。いや、時間を取らせて済まなかった。」
といういきさつがあったのだ。もちろん、調査部長にはこのいきさつは知らされて居なかったが、そこはそれ組織内の事、様々な噂が流れ、それとなくではあったがこの部長もおぼろげに知る事になるのは当然の帰結だった。それ以降、さすがに吉村への妨害じみた事は無くなったが、権力へのへつらいは改善されていなかった。それが吉村の「3年前」という言葉の裏側だった。

しかし、この件はそれだけでは済まなかった。この議員はほどなく、米大使主催の昼食会に招待を受けた。防衛大臣共々招待を受けたこの議員の隣には米国家安全保障省のアジア担当次官が着席した。そして議員を挟んだ反対側にはＦＢＩから大使館へ出向した秘書官、防衛大臣と続いた。この昼食会以降、この議員は目立つ事を極力避けるようになった。昼食会に出席した他の招待客によれば、両隣の着席者と何事か深刻な顔で話していたらしかった。

そんな日本でのコップの中の嵐をよそに、情勢は激動を始めていた。きっかけは、日本政府が軍事的緊張を緩和しようと、プリオン類似タンパクの存在と、その集合巨大生物の存在、整列による電撃などの事実を公表したところから始まる。これは米国に取り晴天の霹靂であった。現内閣が一部からお花畑脳と揶揄される理由の強固な裏付けでもある、この突然の発表は米政府と米海軍にとり、厄介な問題を引き起こしたのだ。つまり、例の海域での米海軍の活動が、その電撃を引き起こす巨大生物の存在によるものであることを暗示的に暴露することになった。ここから簡単に類推できるのはなんらかの米海軍の軍事活動が、この巨大生物により影響を受けた事であり、それでは一体、何が影響を受けたのだ、という疑問が浮かぶのは当然であった。日本政府が公表したのは「みずなぎ」の遭遇したケースだけであったが、その同海域で米軍の空母任務群が活動しているのなら、米国の軍事機密を漏らしたことと変わりは無かった。左翼であろうが右翼であろうが、政治の実務に関わる人間であるならば、政治的に秘匿すべき事、ましてやそれが複数の国に関わる事柄であるのならば、調整も為しにいきなりそれを暴露することが、利害関係を持つ国に取って場合によっては宣戦布告に等しい、という事は常識として理解している。この政権にはその常識が欠如していた。市民運動家上がりを大量に抱え込んだ政権党ではそれが普通の事で有るのかも知れないが、残念ながら世界は彼らの常識では動いていないのだ。

米国はこの発表に激怒したが、時すでに遅しであった。中国はこの発表にかなり過激に反応した。しかし、物的証拠を突きつけられている事から、この発表を得意の「でっち上げ」と非難するわけにも行かず、「みずなぎ」の記録した水深が３５０ｍを越えて居る事を逆手に取り、公表されたスペックに基づいて中国潜水艦はそのような水深での行動能力は無い、とし、米軍の攻撃による撃沈の可能性がこれにより高まった、と米国への非難を強めた。これに対して米国は日本の発表を不本意ながら極力利用し、事故である可能性が否定できなくなったと、中国に反論した。

実際問題、中国として事故であったかも知れないことは十分に理解していたが、すでに引っ込みが付かなくなっていた。艦隊を動かすためには、相当な額の金が必要なのだ。艦隊一つが動けば、その活動期間中の燃料、食糧、兵への手当など、防衛予算の何割、といったレベルで費用が発生しておかしくない。そして燃料、食糧などは事前に用意が必要であり、それはとりもなおさず、すでに相当の金額が支払われていることでもある。ここで未知の巨大生物による事故であったなどという事を認めるなら、米海軍の攻撃という錦の御旗であるがゆえの出費に対する責任問題が持ち上がるのだ。そういう事情から中国、特に解放軍海軍幹部は振り上げた拳を下ろせなくなっていた。そしてその帰結は軍事衝突だった。現時点での世界２大軍事大国間の軍事衝突という、恐ろしいシナリオの実現が刻一刻と近づいていた。

政治（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしております。

緊張（前書き）

第３６話です。
何とか更新できています。

緊張

米中の艦隊が対峙したのは、奇しくも2隻目の潜水艦が遭難した地点からそれほど離れていない海域だった。艦隊戦闘となった場合、米海軍の有利さは歴然としていた。空母だけを取ってみても、「ニミッツ」級2隻を擁する米海軍の2個任務群は運用航空機総数で200機に達し、早期警戒探知、防御なども中国艦隊とは隔絶していた。中国艦隊はこの戦力差を補うためには弾道ミサイルを使用した核攻撃以外、方法がなかった。この時点では中国艦隊はまだ米艦隊の正確な位置を把握していなかったため、弾道ミサイルの発射は行われていなかったが、索敵範囲に入り、米艦隊の位置が判明すれば即座に発射出来る用意はなされていた。米艦隊はすでに空母搭載の早期警戒機を前進させる事で中国艦隊の位置と動きを掴んでおり、中国艦隊の探知圏を避けるかのように行動していた。米国軍事情報組織はすでに中国の弾道ミサイル発射準備を掴んでおり、これを発射された場合、それが戦域核であったとしても、核防衛上、米本土のＩＣＢＭ群を発射しない選択肢は無かったため、全面核戦争となる公算が大きく、極力艦隊位置を秘匿する必要があった。米国は中国偵察衛星の軌道を分刻みで把握しており、軌道変更が有った場合の米艦隊捕捉可能な窓の変化を即座に算出し、可能な限り艦隊を偵察に掛からない位置に移動させる作戦を採っていた。これまでのところ、この作戦は概ね成功しており、中国側はいまだに米艦隊の正確な位置を把握できていなかった。

しかし、米中両艦隊の薄氷を踏むような神経戦に終止符を打つ事象は海底からやってきた。偶然にも中国艦隊は2隻目の潜水艦沈没地点至近を通過する事になったが、その直後、輪型陣外周を警戒していたフリゲート艦の1隻から緊急通信が飛び込んで来たのだ。突然メイン発電機の停止によるブラックアウトが発生し、予備発電機をすぐに起動させたが、配電盤の不具合によりブラックアウトが継続

中という通信だった。これにより、ほぼ全ての主要兵装が使用不能となり、主機も遠隔制御不能、操舵装置も手動状態という事態に陥った。通信は艦隊内通信のみバッテリー電源により確保されていたが、それ以外は電源喪失により不可能な状態で有った。中国艦隊司令部はこのフリゲートを後方に避退させる決断をし、それを指令したが、その直後、ブラックアウトしたフリゲートの後方にあった別のフリゲートから同様な状態に陥ったと緊急通信が入り、その後次々と輪型陣東側で対潜警戒を行っていた６隻のフリゲートが同様な状況に陥り、中国艦隊司令部は混乱の極に達した。最終的には空母の外周で対空エリアディフェンスを担っていた「蘭州」型中国版イージス駆逐艦までもがブラックアウトを発生した事で、中国艦隊は実質的な戦闘能力を喪失した。中国艦隊はこれにより針路を１８０度近く変更し、本土の基地へと帰還する航路に乗った。これ以降不可解なブラックアウトは発生せず、ブラックアウトした艦もそのほとんどが配電盤系の故障であり、予備の部品と交換することで通常航行には支障が無い程度に回復することが出来たが、戦闘行動はレーダーの一部、ソナーなどが使用不能となったため、不可能だった。全面核戦争に繋がる状況は回避されたが、中国側が被った軍事的、経済的打撃は深刻だった。しかし、中国側より、日米当局に与えた衝撃はさらに大きかった。中国艦隊が混乱に陥ったことを知った米空母任務群は、危険を承知で偵察機を発進させ、中国艦隊の動向を探ったのだ。その結果、数隻の艦が電子兵装を全て停止させて漂流している事を発見したのだ。それには「蘭州」級も含まれていた。この事からＣＩＮＣＰＡＣは中国艦隊に起きた混乱が複数艦でのブラックアウトと判断し、その原因は例の巨大生物以外無いと断定した。これは由々しき問題だった。ある意味では核戦争に匹敵する問題を孕んでいたのだ。それは海上通商の阻害であった。巨大生物が海面を行動する船舶に襲いかかる事が明白になったのだ。今はまだ北太平洋の限られた海域だけかも知れなかったが、この生物の増殖速度を考えれば、早晩全ての太平洋航路で問題が発生することは明

らかだった。そして多分であはるが、最も短時間で影響を被るのは中国そのものだろうと思われた。現在の中国は海洋通商無しでは経済的に破綻する。早急な海中の調査が必要だった。

「みこもと」は3度目の同じ海域への調査に出発しようとしていた。今回は先の日本政府発表を受けて、巨大生物の脅威を認識した米国主導の下、国連海洋委員会が主体となった国際調査の形式を取っていた。すでに日本沿岸にはプリオン類似タンパクの小塊が無数に漂着し、沿岸漁業に多大な影響を与えていた。高い放射線量を持つ、変異型タンパクの存在はまだ公表されておらず、また沿岸にも漂着していなかった事から、核汚染に対するパニックは防げていたが、沿岸漁業、特に三陸沖から伊豆半島沖にかけての沿岸はまさに壊滅状態といえた。そして、魚類消費に対する影響はさらに大きかったと言える。日本で最大の水揚げ量を誇る沿岸が軒並みタンパクにより底生魚、回遊魚はもとより、エビや蟹、養殖のワカメまでが壊滅したのだから、当然だった。それでも日本海沿岸、九州西部などはまだ影響を受けておらず、そこからの供給で市場が継続されていたことで、パニックには陥っていなかった。ある意味、東北、関東大震災での原発被災がもたらした放射能パニックが役立っていたかも知れなかった。

このような社会的背景を背負った第3次調査はかなり緊迫した雰囲気に包まれていた。これまでのサンプル調査でこのプリオン類似タンパクの性質はかなり判明していたが、これを阻止する具体的な手法は発見されていなかった。しかし、これまでの拡散状況から試算した結果は、約1年ほどで太平洋全域に広がり、3年で地球の全海洋がこのタンパクで埋め尽くされると示唆していた。したがって、今回の調査は前回までのように単に観測してサンプルを採取するのみでなく、なんらかの具体的な対抗手段を発見する必要に迫られていた。

「あ～諸君、普段はこんな出航前訓示などしないんだが、今回は特

別なんで聞いて欲しい。今回のミッションは前回までと違い、例のタンパクが主たる目的になる。その上、かなり厳しいミッションだ。このタンパクに何らかの対抗できる手段を見つけない限り、太平洋どころか全海洋が死ぬ可能性が大きい。」
吉村は「みこもと」会議室に参集した観測、研究要員を前にこう切り出した。
「これは決して大げさに言っているのではない。現時点で判明している増殖速度から見て、残された時間は太平洋だけで約1年、全海洋でも3年ほどだ。この時間で最低限増殖を抑制する手段が発見できなければ、人類は海洋を失うことになる。臨時に乗船した研究員含めて、それを念頭に調査、研究に取り組んで欲しい。以上です。」
参集した要員からは声もなかった。あと3年で全海洋を失う可能性がある、それはとりもなおさず、人類の滅亡を意味していた。大気中の酸素の大半は海で作られるのだ。「みこもと」に勤務する要員は全てがこの事を理解していた。

緊張（後書き）

ご意見、ご感想お待ちします。

再調査（前書き）

第３７話です。
やっと妨害しているらしき処を特定しました。ここは閉鎖コンドミニアムですので、自身の自治会があります。さしあたりここに相談することにしました。非公式に接触したところ、どうも同様なケースが過去にもあったようです。これで済んでくれるなら万々歳なのですが・・・・

それでは小説をどうぞ。

再調査

「みこもと」は横須賀出航後、野島崎をかわすと針路を北東に取り、三陸沖を目指した。三陸沖から日本海溝に沿って南下、巨大生物の存在をソナーで探知するためだった。「みこもと」には海底地形を探査するための曳航式サイドスキャンソナーが搭載されている。今回の出航前にサンプルを使った実験で、もっとも反射率の高い周波数を調べ、体の組成の水分が多い魚介類、イカやクラゲなどだが、これを良く探知する２８ＫＨｚという周波数が巨大生物をも良く探知する事が判明し、サイドスキャンソナーの周波数をこの周波数に調整可能なよう、改造がなされていた。

巨大タンパク生物の南東方向への広がりと、壊滅的な漁獲状況を勘案すれば、タンパク塊のみならず、巨大生物も日本海溝付近へ到達していておかしくなかった。「みこもと」が出会った現場付近の海流は逆方向であったが、それでは日本沿岸で頻繁に発見されるタンパク小塊の説明が付かないのだ。日本海溝より本土側には黒潮と親潮という世界の海流でも有数の流速を持つ巨大海流があり、この海流の外側で無い限り、「みこもと」が出会った巨大生物とタンパクの蝟集は説明が付かなかった。そのような理由から探査は日本海溝に沿った針路から始められる事になった。

「黒岩、『金魚』の準備は終わったのか？」

「ええ、吉村さん。いつでも『金魚』行けます。ついでに全周型の水中聴音機も搭載しておきました。」

「ああ、それは良い考えだ。今回は単独行動だからな。」

「船長、機関科の方はいかがですか？」

「吉村さん、電撃防止対策は全て終わっているそうです。防食亜鉛板の減りが凄い事になっているようですが。」

「ああ、防食電流を流さないですからね。次のドックまで持つかな？」

「危険な海域抜けたら切り替えるそうです。それでも怪しいですけれどね。」
「それでも本船は動力が電気ですから、ブラックアウトしたら動けなくなりますから、仕方が無いですね。」
「ええ。機関長と昨晩話したんですが、だいぶ苦労したみたいですね。特に電動機系を船体から絶縁するのにえらく苦労したようです。」
「こりゃ、帰港したら機関長に奢らにゃいかんですね。」
「ああ、そりゃ貧乏フラグですよ、吉村さん。あいつは底なしですよ。」
「げっ・・・・ま、まぁ、考えておきます・・・・」

「みこもと」は「金魚」を曳航して観測を始めた。日本海溝西側の急峻な落ち込みに沿うような針路を取っていた。「みこもと」の装備するサイドスキャンソナーは、通常ならば日本海溝底、水深９０００m程度までのレンジを持っていたが、今回使用している周波数では６０００mが限界だった。しかし、今は海底地形を観測する事が主ではないため問題は無かった。黒岩は中層上部２５０mから１０００mまでに現れる微弱な反射を捉えるような設定をしていた。八戸港沖から南下を始めた「みこもと」は「金魚」曳航時の速度、7ノットから8ノットを保って航行していた。
曳航を開始してから二日目、犬吠埼沖合付近まで南下した頃、「みこもと」の音響観測室にアラームが鳴り響いた。
「黒岩、巨大生物か？」
音響観測室へ飛び込んで来た吉村は開口一番そう聞いた。
「いえ、潜水艦でした。詳しくは長野さんから・・・」
「前々回の時、米軍から照合用の音紋ファイル貰ったでしょう。今回、あのフィアルに含まれる音紋を探知したら警報が鳴るようにしたんです。」
「って、長野、あのファイルは返したんじゃなかったのか？？」

「えっ、まぁ、オリジナルは返しましたが・・・・」
「コピーしたのか？しかし、あれはそのままコピーすると全情報を消去するプロテクトが付いてたはず？」
「ええ、媒体から直接コピーすればそうなりますね。」
「ってことは、お前、プロテクト破ったのか？」
「いえ、そんな非合法な事はしてませんよ。照合時にキャッシュにデーター読み込むんですが、読み込みの都度、違うメモリー領域をキャッシュに指定しただけです。それ自体は米軍さんも知ってますよ。処理が早くなるんで。」
「で、どうやってコピーした。」
「いぁ、米軍さんがこの船のメイン機を知らなかっただけの話でして・・・あの程度のデーター量なら、このメイン機だと、全部一度にメモリーに展開しても全メモリーの２０％行かないんですよ。で、全部メモリーに残っていたと・・・・」
「あちゃ～～～、まぁ、一応不正アクセスには当たらんみたいだなぁ・・・・」
「まぁ、アメさんも、精々サーバーレベルで考えてたんじゃないですかね。この船のメイン機は一昔前なら立派なスパコンですからねぇ・・・・」
「なんとまぁ・・・・おっと、潜水艦はどうなった？」
「ああ、それですが、船底の固定聴音機でも捉えてまして、『金魚』と3角測位やったんですが、かれこれ１５海里くらい東に居るようです。例の五月蠅い潜水艦です。」
「ああ、例の『漢』級とか言うヤツか。むこうはこっちに気づいてるのか？」
「吉村さん、こっちは２８ＫＨｚでどんがらがっちゃんやりながら走ってるんですよ。１００海里先でも気づきますよ、普通。」
「そーいやそーだな・・・」
「しかし、この潜水艦、どこに向かってるんですかね？日本領海にまっしぐらのコースなんですが？」

「まだ１２海里線まではかなりあるだろ？」
「ええ、現在位置は領海基線から約７０海里ですね。でもこの潜水艦２０ノットなんて速度で走ってますから、３時間半で領海ですよ。」
「一応、海自には連絡しておくか。」
吉村はそう言って、手元のＰＣから滝川に向けてメールを打った。
返事は１時間経たないうちに現れた。「みこもと」上空にＰ３Ｃ対潜哨戒機が現れたのだ。ＶＨＦ航空無線で連絡を取った「みこもと」は概略で判明している潜水艦の現在位置をＰ３Ｃに知らせた。
潜水艦はすでに「みこもと」斜め後方に移動していた。距離は４海里ほどに接近していたが、すでに最接近点は通過し、だんだんと「みこもと」からは離れていた。Ｐ３Ｃはソノブイらしきものをいくつか投下し、一端はこの海域から離れた様に見えたが、また舞い戻って、低空で旋回をしていた。その間も「みこもと」は７ノットで航行しており、また潜水艦も「みこもと」の航跡と直交するようなコースで進んでいたため、しばらくしてＰ３Ｃは見えなくなり、潜水艦の音響も聞こえなくなった。そして１時間半が過ぎた頃、聴音機に軽い「ドーン」という音が捉えられた。
「なんだ、黒岩、対潜哨戒機が攻撃でもしたのか？」
「多分、領海に接近したんで注意を促す発音弾を投下したのでしょう。海自は領海に入ったから、即座に攻撃というのはありませんからね。」
「って、もう領海なのか？」
「時間的には届いてますね。普通は針路変更すると思うんですが・・・」
そんな騒ぎの中「みこもと」は八丈島東方で針路を東に転じ、「金魚」を巻き上げて潜水艦沈没現場海域への中間点へ向かった。中間点付近で同じように南北方向に走査を行うためだった。
しかし、中間点に向かった「みこもと」に海自の滝川から入った情報は誰もが驚愕するものだった。千葉県九十九里の海岸に中国の原

潜が座礁した、という情報と共に、その原因、全ての浮力タンクの弁制御を失い、まるまる３０時間ほど上げ舵一杯、前進全速状態で沈下を免れ、九十九里海岸沖に座礁して圧懐を免れた事が記されていた。幸い原子炉制御は失われておらず、核汚染の発生する恐れは無かったが、弁制御を失った原因は制御回路の焼損であることが目を引いた。例の巨大生物の仕業を疑わざるを得ない状況だった。中国政府からは日本政府に対し外交チャンネルを通じて公式に救助依頼が出され、海自の潜水艦救難艦がその任に当たり、乗員全員を無事救助、潜水艦は後日中国側人員の立ち会いの下、サルベージされ返還される事になった。

しかし、潜水艦艦長からの事情聴取では、電撃を受けた認識は無かったらしい。全ての浮力制御タンクの排気弁が制御回路の誤動作と思われる状況で全解放され、その後解放のまま人力操作でも閉じられなかった事がこのような結果に繋がったようだった。

艦長は即座に上げ舵一杯、前進全速を発令、蓄気した高圧空気をタンクに送り込んだが、排気弁解放状態ではタンク内の海水を排出できず、水深５０ｍほどまで浮上したところで動的浮力と均衡、そのまま前進を続けるしか無かったらしい。進路変更は何度か試したらしいが、僅かな進路変更の試みでも動的浮力との均衡が崩れ、沈下が始まるため針路上の海岸に座礁するしか、圧懐を免れる手がなかったらしい。

このような事情だったため、「みこもと」のメンバーは当初、巨大生物による攻撃という意見には懐疑的だった。しかし、その後潜水艦のサルベージが進み、中国側立ち会いの下、事故原因の調べが行われた結果、メイン、ネガティブ、トリム、全てのタンク内に例のタンパクが発見され、それのみならず、僅かな漏出と共に、弁のアクチュエーター部分でも発見されるに及び、タンパク集合体による何らかの影響と考えざるを得なくなっていた。また全ての弁が大電流による溶接効果で固着しており、手動でも閉塞できなかった原因と考えられた。この結果を滝川から知らされた吉村は、急遽、船長、

機関長とミーティングを行った。
「船長、機関長、ご足労願いましてありがとうございます。取りあえず、海自からの非公式情報ですが、お手元の報告書をご覧下さい。」
船長と機関長はしばらく書類を読んでいたが、機関長が唸った。
「吉村さん、これかなり大変な事じゃないですかね。本船、電撃対策はかなりしっかりやってますから大丈夫とは思いますが、軸シールや吸水口から入り込まれて、と言うことまでは想定してませんよ。」
「ええ、まぁそれでご足労願ったわけなんです。」
「しかし、進化とでも呼ぶべきなんですかね、これは。」
船長の山下だった。
「何とも言えませんねぇ。しかし、タンパクそのものは自力で動く能力はありませんから、あくまでも水の動きに乗ってという事だとは思いますが・・・」
「しかし、漏水部分を全て潰す事は不可能ですよ。」
「ええ、それも判ってます。要は各部の制御装置へ不要な電流が流れないことが肝心だと思えるのですが。」
「まぁ、その辺も出来るところは全て、接地を船体から浮かせてますから、そう簡単には変な電流は流せないと思いますがね。」
「しかしですね吉村さん、潜水艦も動いていたわけでしょう。そのタンクへ侵入するって事は艦の動きで発生する水流を乗り越える必要があると思うのですが・・・」
「はい。その辺はレポートされていませんね。あるいは艦が水中で停止していた事も考えられますし。」
「うーむ・・・」今度は船長が唸る番だった。
「ともかくですね、制御盤周りの漏水を潰して欲しいのですが、機関長お願いできますか。あと、バラストタンクの水を定期的に検査したいです。船長、甲板員にその採取お願いできないでしょうか？」
「吉村さん、まず、電子系の制御回路についてはこの船は大丈夫で

しょう。全て水線より上にある電子制御室に集中してます。問題があるとしたら、サーボ制御系に使われるステッピングモーターで内部に電子回路を持つものくらいですね。あと弁系は昔と違って開放弁系（船内に開放された弁）は無いです。全てどれかのタンクを経由します。その場合でも船内側は全て手動弁ですから、電子系をいくらいじられても船内に水が入ることはありません。動力系は電撃対策でメインのモーター除いて、ほぼ全ての電装品は船体から絶縁しましたし、センサーも全て絶縁型に交換しました。船体外板が溶けるくらいの電撃でも制御回路に影響は無いと思います。」

「了解です、機関長。まぁ、何が起きるか判りませんので、注意だけは怠らないようお願いします。」

「吉村さん、これ、甲板への散水もまずいですかね。」

「船長、それで何か起きるとは考えられませんが、これまでの常識が通用しないことも確かだと思います。散水を禁止するまでの事は無いと思いますが、注意だけはお願いします。」

「「了解」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6428v/

深海からの侵略

2011年11月20日18時57分発行